

南興野遺跡 発掘調査報告書

1987

山形県
山形県教育委員会

南興野遺跡 発掘調査報告書

昭和62年
山形県
山形県教育委員会



SAII板堀列検出状況



SAII板塙列土層断面



SK100土壤土器出土状況



SE54井戸跡検出状況



SE54井戸上部検出状況



SE54井戸枠組中位検出状況



SE54井戸枠組完掘



SE54 基礎枠組検出状況



SE203 井戸跡検出状況



SE203土層断面



SE203土器出土状況

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和61年度に実施した酒田市南興野遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査では平安時代の建物跡をはじめとする集落に係わる多数の遺構や遺物が検出され、古代出羽の国にかかる貴重な手がかりを得ることができました。

これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものであります。これらを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめる事にもなるものと思われます。現代に生きる私達は、これらを長く後世に伝え残して行くことが重要な責務であります。

近年、県内各地での開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。この両者の間には、困難な問題も山積の状況でありますが、生活文化を向上とする同じ立場から諸問題を調整し、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいる所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって多くの御協力をいただきました地元の方々をはじめ、酒田市、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区他関係各位に対し、心から感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の理解を深めその保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和62年3月

山形県教育委員会
教育長 小野 孝

例　　言

- 1 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて、昭和61年度に実施した
県営ほ場整備事業(北平田第1地区)に係る南興野遺跡(山形県遺跡地図2025)の緊急発
掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和61年6月2日から同年9月19日までの延72日間実施した。
- 3 遺跡の所在地は、山形県酒田市大字南興野字南大坪1他である。
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治(山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査)

佐藤 庄一(同上 埋蔵文化財係長)

野尻 侃(同上 主任技師)

調査員 太田 優(同上 曜託)

黒坂 雅人(同上 曜託)

事務局長 後藤 茂彌(同上 課長)

事務局長補佐 芝野 健三(同上 課長補佐)

事務局員 長谷部恵子・中島 寛・氏家修一(同上主事)

- 5 発掘調査にあたっては、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市北平田公民館、酒田市新青渡地区他関係機関より多くの御指導、御協力をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。

- 6 本書の作成は、野尻 侃・佐藤庄一が担当し、I・II・III・V章を野尻 侃、IV章を佐藤と野尻が各々分担した。挿図・図版の作成は、徳永裕子・真柄美紀子・升谷繁子・吉田直子・岸 栄子・新関純一・佐藤悦子がこれを補佐した。編集は野尻 侃・長橋 至が担当し、佐々木洋治が総括した。

- 7 本書の作成にあたって国立歴史民俗博物館の平川 南助教授には墨書き器等の文字資料解説など御指導と助言を賜わった。また佐藤禎宏(酒田市立中央高教諭)、小野 忍(酒田市教育委員会)には遺跡全般にわたって御指導、助言を賜わった。末尾ながら記して感謝申し上げる。

目 次

| | |
|------------------|------------------|
| 序 | |
| 例 言 | |
| 凡 例 | |
| I 調査の経緯 | |
| 1 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 2 調査の経過 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | |
| 1 地形的環境 | 4 |
| 2 歴史的環境 | 6 |
| 3 立地と層序 | 8 |
| III 検出遺構 | |
| 1 遺構の分布 | 13 |
| 2 掘立柱建物跡 | 13 |
| 3 板塀列・柱穴列 | 26 |
| 4 井戸跡 | 29 |
| 5 土 壤 | 33 |
| 6 溝状遺構 | 42 |
| IV 出土遺物 | |
| 1 遺物の分布 | 44 |
| 2 遺構内出土遺物 | 45 |
| 3 包含層出土遺物 | 73 |
| V まとめ | |
| 付表目次 | |
| 表1 調査工程表 | 表5 土壙内出土土器観察表(1) |
| 表2 建物跡出土土器観察表 | 表6 土壙内出土土器観察表(2) |
| 表3 井戸跡出土遺物観察表(1) | 表7 溝状遺構出土遺物 |
| 表4 井戸跡出土遺物観察表(2) | 表8 包含層出土遺物観察表 |

挿 図 目 次

| | |
|--|-------|
| 第1図 地形分類図(山形県・土地分類基本調査・酒田) | 5 |
| 第2図 遺跡位置分布図 | 7 |
| 第3図 遺跡の層序 | 9 |
| 第4図 遺跡全体図 | 10 |
| 第5図 遺構分布図(付図) | 11、12 |
| 第6図 SB 1・2 建物跡 | 15 |
| 第7図 SB 3 建物跡 | 16 |
| 第8図 SB 4 建物跡 | 17 |
| 第9図 SB 5 建物跡 | 18 |
| 第10図 SB 6 建物跡 | 19 |
| 第11図 SB 7 建物跡 | 20 |
| 第12図 SB 8 建物跡 | 21、22 |
| 第13図 SB 9 建物跡 | 24 |
| 第14図 SB19建物跡 | 25 |
| 第15図 SA11板塀列 | 26 |
| 第16図 SA12柱穴列 | 27、28 |
| 第17図 SE54井戸跡 | 29 |
| 第18図 SE61井戸跡 | 30 |
| 第19図 SE63井戸跡 | 31 |
| 第20図 SE203井戸跡 | 32 |
| 第21図 SK100土壤 | 34 |
| 第22図 SK201土壤 | 35 |
| 第23図 SK202土壤 | 36 |
| 第24図 SK206・207土壤 | 37 |
| 第25図 SK67・195土壤 | 39 |
| 第26図 SK25・28・44・58・60・76・78・84・85・89土壤 | 40 |
| 第27図 SK40・57・70・71・79土壤 | 41 |
| 第28図 SD205溝状遺構 | 42 |
| 第29図 建物跡出土土器 | 46 |
| 第30図 井戸跡出土土器・斎串(1) | 48 |

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第31図 | 井戸跡出土土器・斎串(2) | 50 |
| 第32図 | 井戸跡出土斎串 | 51 |
| 第33図 | 井戸跡出土土器・斎串(3) | 52 |
| 第34図 | 井戸跡出土土器 | 53 |
| 第35図 | 井戸跡出土斎串・土壤出土土器(1) | 55 |
| 第36図 | SE54井戸跡・井戸枠・矢板(1) | 56 |
| 第37図 | SE54井戸跡・矢板(1) | 57 |
| 第38図 | SE54井戸跡・矢板(2) | 58 |
| 第39図 | SE54井戸跡・井戸枠・矢板(2) | 59 |
| 第40図 | SE203井戸跡(1) | 60 |
| 第41図 | SE203井戸跡(2) | 61 |
| 第42図 | 土壤出土土器(2) | 64 |
| 第43図 | 土壤出土土器(3) | 65 |
| 第44図 | 土壤出土土器(4) | 66 |
| 第45図 | 土壤出土土器(5) | 68 |
| 第46図 | 溝状遺構出土遺物・包含層出土土器 | 71 |
| 第47図 | 包含層出土遺物 | 74 |

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 SA11板塀列検出状況
卷頭図版 2 SA11板塀列土層断面 SK100土壤土器出土状況
卷頭図版 3 SE54井戸跡検出状況 SE54井桁上部検出状況
卷頭図版 4 SE54井戸枠組中位検出状況 SE54井戸枠組完掘
卷頭図版 5 SE54基礎枠組検出状況 SE203井戸跡検出状況
卷頭図版 6 SE203土層断面 SE203土器出土状況
図版 1 遺跡遠景(北より) 遺跡近景(南より)
図版 2 坪掘調査状況 A精査区設定
図版 3 遺跡の層序 A区西半遺構検出状況
図版 4 A精査区遺構検出状況
図版 5 SB1・2・3・4建物跡検出状況 SB5建物跡検出状況
図版 6 B精査区遺構検出状況(西より) B区建物跡検出状況(北より)
図版 7 SB7建物跡検出状況 SB8建物跡検出状況
図版 8 SA12板塀列全景(北より) 板塀土層断面
図版 9 SA12板塀列検出状況 SA12板塀列土層断面
図版10 SB5・8・9建物跡柱穴検出状況
図版11 SB7建物跡柱穴検出状況・土層断面(1)
図版12 SB7建物跡柱穴検出状況・土層断面(2)
図版13 SB8建物跡柱穴検出状況(1)
図版14 SB8建物跡柱穴検出状況・土層断面(2)
図版15 SB8建物跡柱穴検出状況・土層断面(3)
図版16 SB8建物跡柱穴検出状況・土層断面(4)
図版17 SA12柱穴列 柱穴検出状況・土層断面
図版18 掘り方検出 上部井桁検出状況
図版19 上部井桁状況 土層断面
図版20 中位井桁状況 下部縦板検出状況
図版21 下部横棧状況 最下部縦板検出状況
図版22 SE54井戸跡遺物出土状況
図版23 SE203井戸跡検出状況 SE203井戸跡上部検出状況
図版24 SE203井戸跡土層断面 SE203井戸跡下部遺物出土状況

- 図版25 各遺構調査状況(SE61・SE63・SK58・SK302・SK311)
- 図版26 SK100土壤土層断面 SK100土器出土状況
- 図版27 SK201土壤完掘 SK201土壤土層断面
- 図版28 土壌内遺物出土状況
- 図版29 SD205溝状遺構完掘 SK202土壤完掘
- 図版30 梢出土土器
- 図版31 遺構調査状況
- 図版32 溝状遺構検出状況
- 図版33 精査区完掘(北より)
- 図版34 建物跡出土土器
- 図版35 建物跡・井戸跡出土土器
- 図版36 井戸跡出土土器・斎串
- 図版37 井戸跡出土土器・斎串
- 図版38 井戸跡出土土器
- 図版39 井戸跡出土土器・斎串
- 図版40 井戸跡・土壤出土土器(1)
- 図版41 土壤出土土器(2)
- 図版42 土壤出土土器(3)
- 図版43 土壤出土土器(4)
- 図版44 土壤出土土器(5)
- 図版45 土壤出土土器(6)
- 図版46 土壤出土土器(7)
- 図版47 土壤出土土器(8)
- 図版48 土壤出土土器(9)・溝状遺構・包含層出土土器
- 図版49 包含層出土遺物
- 図版50 SE54西面井桁板材
- 図版51 SE203井戸枠材外面
- 図版52 SE203井戸枠材内面
- 図版53 SE203井戸跡南井側材
- 図版54 SE井戸跡・水抜栓
- 図版55 SE203井戸跡・水抜栓拡大

凡　例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

SB……建物跡 SK……土壤 SD……溝状遺跡 SE……井戸跡

EB……柱穴 SP……小穴 SX……性格不明遺構

2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。

3 遺物に付した記号は、RP(土器・土製品)、RQ(石製品)、RW(木製品)、RM(金属製品)であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺構分布図・同実測図中の方位は磁北を示している。なおグリッドの南北軸は、磁北より8°00'西に傾いている。また建物跡の主軸方向は、南北棟を桁行で、東西棟を梁行で測定した。
- (2) 遺構実測図では、1/40～1/160他の縮図で探録し、各拡図毎にスケールを付した。
- (3) 遺物実測図・拓影図・図版は原則的に約1/3で探録し、各々にスケールを付した。
- (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、●印が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表わしている。また土師器で内黒のものは内面に網点を入れ、両黒のものでは内面右端と外端左端に網点を入れた。
- (5) 遺物観察表中の計測値欄で、()内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では、「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～III」等は、遺跡を覆う土層(基本層序)を表わしている。さらにF②の○内数字は井戸跡の枠組内部からの出土とその層序(覆土2層)を表わしている。
- (6) 遺物写真は、原則的に小形の壊・塊類が1/3、破片資料1/4・1/6、大形の井戸枠組の板材等は1/8としている。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものとした。

I 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

庄内平野を二分する最上川は山形県の内陸南部から大量の肥沃な土砂をもたらし、広大な沖積平野を形成する。流域には自然堤防等が東から西に向っていたるところに形造り、集散集落が存在する。本遺跡は最上川の支流である新井田川右岸の自然堤防上に立地する。地目は一部畠地も存在するが、ほとんどは水田である。標高は約4mを測る。遺跡は地元の伊藤安記氏によって早くから注目され、昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」(註1)に記載登録され、水田中より、須恵器・赤焼土器片のほか、板材が出土したと記載されている。また昭和53年発行の「山形県遺跡地図」(註2)にも遺跡の広がりを記入するとともに、平安時代の集落跡として県一連の遺跡番号に統一され記載登録されている。

この地域(最上川右岸から日向川左岸区域)では、昭和40年代後半から県営は場整備事業が計画、実施されており、昭和48年県教育委員会に文化財を担当する文化課が設置されるとともに、開発事業との調整を行なってきた。

昭和60年度には本遺跡を含む県営は場整備事業を計画、翌61年度に実施することを県農林水産部、農地計画課より文化課あて提出があった。山形県教育委員会ではこれを受けて昭和60年10月に本遺跡の範囲・性格・内容を確認するため遺跡詳細分布調査を実施した結果、事業計画の南東部、南興野地区をかこむようにし、一部昭和62年度以降の計画区域を含めた地域に遺構・遺物の分布状況がたしかめられた(註3)。

この調査結果に基づき、山形県教育委員会では、文化財保護の立場から県農林水産部、酒田市教育委員会等、関係諸機関と協議を重ねた結果、昭和61年度に緊急発掘調査を実施し、記録による保存を図ることになった。

調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県埋蔵文化財緊急調査団が調査を担当することとなった。調査の期間を昭和61年6月2日から同年9月19日までの延80日間実施した。

註1 山形県教育委員会 「山形県遺跡地名表」 1963

註2 山形県教育委員会 「山形県遺跡地図」 1978

註3 名和道胡雄 「分布調査報告書(120) 山形県埋蔵文化財調査報告書第 号 1966

2 調査の経過

発掘調査は昭和61年度は場整備事業施行予定の県営は場整備事業区域内を限定して始めた。調査を開始する際、昭和61年度当初に事業主体となる山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所とで、工事施行上の問題や、調査日程等で協議を行った。協議では、工区の施行上、調査延日数が80日間では、秋の工事になるとほ場整備事業に重大な支障をきたすことから、一部麦転作地となっている区域を含めて早期の調査開始を要望された。このことにより、調査の進行を3つの段階に分け、最初の第1段階を6月2日～7月1日までとし、遺構・遺物の集中区域を探査することと、早期に精査する区域を決定し調査作業を進める段階とした。第2段階は、7月1日から8月8日までで、第1段階で進めてきた調査の継続と、更に広がる地域への探査作業を実施した。第3段階は8月16日から調査終了日の9月19日までとし、第2段階で遺構・遺物の精査作業を進めた結果による拡張精査区域の調査段階とした。第1段階の調査経過では、始めに遺跡全域を包み込むように5m×5mを1単位とするグリッドの設定作業から始めた。発掘区は工事基本杭(計画道路基準杭No41)に合せた5m単位のグリッド基準線を引き、各単位を50m毎に基準杭を打った。各区の単位は、5m四方を1単位としてX軸(東西線)は西から東に、Y軸(南北線)は北から南に第2象限で座標をとった。各グリッドの名称はX軸の数字を先に呼び、次にY軸の数字を呼ぶこととし、例えば、30-25グリッド(G)というように呼称した。南北基準線は磁北に対してN-8°-Wの傾きを測る。次に設置したグリッドの基本線に対して138ヶ所の1×5mのトレンチを配置し、作業員による手掘りの遺構・遺物の集中区域を探った。その結果X軸58～67-Y軸54～65グリッドの範囲に(2650m²)に柱根や柱穴・土壙等の遺構の広がりとともに、赤焼土器・須恵器片などの遺物が多数発見され、更に東方と北方に広がる傾向を示していることからこの地域を第1段階での精査区域とし、精査A区と呼称した。精査A区は重機械を用いて表土を除去し、その後順次手掘りで面整理を行ない、検出された遺構の精査作業および断面図、平面図、写真撮影等の記録作業を行なった。検出遺構では掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、溝状遺構等が確認された。第2段階では、精査A区の遺構記録作業を続けるとともに第1段階のトレンチ調査で判明した東側と北側に広がる66～77-45～61G(3,000m²)を重機械によって拡張し、同様に面精査作業と記録作業を実施した。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、土壙多数、精査A区から続く溝状遺構が確認された。特に掘立柱建物跡については、2間×4間の建物跡と、2間×9間に1間の底ないし縁東が付く建物跡が同じ向きに確認されたことや、その東側には丸木舟を利用した井戸跡、南側に板塀列が確認された。第3段階はこれら検出された遺構の諸記録を行ない調査を終了した。また9月12日には文化財保護の啓蒙活動として現地説明会を実施した。

| 調査内容 | 月 日 | 6月 | | | 7月 | | | 8月 | | | 9月 | | | | | |
|-------|-------------------------------|---------|-----|-----|-----|-----|----|-----|---------|-----|--------|---------|-----|-----|-------|-----|
| | | 2日 | 9日 | 16日 | 23日 | 1日 | 7日 | 14日 | 21日 | 28日 | 4日 | 18日 | 25日 | 1日 | 8日 | 16日 |
| | | 3日 | 10日 | 17日 | 24日 | 31日 | 1日 | 8日 | 15日 | 22日 | 29日 | 5日 | 12日 | 19日 | 26日 | 27日 |
| 実調査日数 | | 5 | 4 | 5 | 5 | 4 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 4 | 4 |
| 準備 | 資材準備 | [■] | | | | | | | | | | | | | | |
| | 発掘区設定 | [■■■] | | | | | | | | | | | | | | |
| 粗堀り | 手掘り | [■■■■] | | | | | | | | | | | | | | |
| | 重機械使用 | [■] | | | | | | | | | [■■■■] | | | | | |
| 面精査 | 面整理 | [■■■] | | | | | | | | | [■■■] | | | | | |
| | 遺構検出 | [■■■■■] | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺構精査 | A区 建物戸跡 井戸跡 土壙他 | [■■■■■] | | | | | | | [■■■■■] | | | | | | | |
| | B区 建物跡、塀列 井戸跡 土壙他 | [■■■■■] | | | | | | | [■■■■■] | | | | | | | |
| 測図作業 | 水糸張り 土層断面測定 平面実測 レベル | [■] | | | | | | | [■■■■■] | | | [■■■■■] | | | | |
| 写真 | 全体写真 細部写真 | [■] | | | | | | | [■■■■■] | | | [■■■■■] | | | | |
| 備考 | | | | | | | | | | | | | | | 現地説明会 | % |

表 I 調査工程表

II 遺跡の立地と環境

1 地形的環境（第1図）

日本有数の大河である最上川は、山形県内陸部を南から北へ屈曲しながら貫流し、新庄市本合海で西に向きを変え、出羽丘陵の最上峠を下し庄内平野へ注ぎ込む。

最上峡谷を流れ出た最上川は、東方に位置する出羽丘陵に沿いながら北流し、松山町松嶺付近で大きく西方に蛇行しながら緩やかに曲流し、酒田に至り日本海へ注ぐ。

庄内平野は、この本県の母なる川最上川により南北に分けられ、平野部東縁は南部の出羽丘陵羽黒山系のなだらかな丘陵地帯と、北半部の出羽丘陵鳥海山系のなだらかな丘陵地帯となる。出羽丘陵を二分して流れ出た最上川は、日本海に沿う海岸平野の特性を良く示しており、低く、平坦な平野面と、海岸に沿ってのびる庄内砂丘とが特徴的である。

飽海地方とよばれる庄内平野の北半部の地形は、大別して東側の出羽丘陵地域と、西側の庄内平野地域に区分される。平野部はさらに東から、(1)庄内北部河間低地、(2)酒田北部三角洲、(3)庄内北部砂丘の3つに細分される。(1)の庄内北部河間低地には自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地の三者を含んでいる。このうち自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、観音寺から南西に放射状に分布する。しかし、これらの自然堤防は高度が低く、不明瞭なものが多い。後背湿地の明瞭なものは、生石西方や上村付近などにみられる^(註1)。

南興野遺跡は酒田市大字新青渡字南大坪に所在する。酒田市街地より東方約4km、新青渡部落の南方水田中にあり、標高は約4kmを測る。地形分類図(第1図)によれば、酒田北部三角洲の縁辺部に立地する。しかし、南方100mには新井田川が西流しており、新井田川右岸の自然堤防上に立地するものと考えられる。しかしこの自然堤防は高度が低く、不明瞭であり、三角洲性をもち、わずかに地盤の隆起をも蒙っている可能性がある。また付近には旧流路の痕跡を残す地域もあり、湿地性の高い地区である。

遺跡を覆う表層の地質は、第四紀の鳥海火山噴出物、河岸段丘上の堆積物、泥からなり、礫および砂の中粗粒の褐色を呈した土壤である。地質的には粗砂・シルト・および粘土からなる沖積層でかなりグライ土壤化が進んでいる。最上部の表土は明褐色から暗褐色の腐蝕質がおおっている。地下水位もこれに関連し一般的に水位が高い。

註1 山形県「土地分類基本調査 酒田 5万分の1」1978



自然堤防 接合湿地 三角洲 旧河道 河原

第1図 地形分類図(山形県・土地分類基本調査・酒田)

2 歴史的環境(第2図)

庄内地方で確認された古代の遺跡は約300ヶ所におよぶ^(註1)。これらの遺跡のうち、日向川から最上川右岸の間の平野部には約60ヶ所の遺跡が点在している。

第2図はその中に存在する遺跡を地図にプロットしたものである。図からも明らかなように遺跡の大半は平野部の河間低地上に立地しており、東側の出羽丘陵上に位置する遺跡は、一部古代の窯跡は存在するものの、中世的に崇えた山城や縄文時代の集落跡が多い。

この地域は日向川や最上川等の大小河川にもたらされた沖積地で、古代から現代に至るまでのこの肥沃な土地を求めて開発が重ねられ、日本有数の穀倉地帯となっている。現在は見渡す限りの水田の中に特有の集散集落がみられるという景観を呈する。

最上川右岸地域での場整備事業に関連する遺跡の発掘調査件数は、昭和61年度末現在で26遺跡にのぼる。

26遺跡の中で古墳時代までに遡る遺跡は23の関B遺跡であり、それも遺跡地内を通る排水路内の地表下1.7mより出土した土器である^(註2)。その他はすべて平安時代を主とする遺跡であり、本遺跡北方4.5kmに所在する国指定史跡『城輪柵跡』を中心とした遺跡群と考えられ、平安時代出羽国府跡として城輪柵跡を中心に東側の一条から生石・山楯の山麓側を南北に連なる遺跡列と、大島田・前川・関・横代に連なる遺跡列、さらに本楯・庭田・漆曾根・本遺跡の南興野・熊野田に連なる遺跡列、そして城輪柵跡の東西中軸線と平行となる手藏田地区周辺の東西遺跡列等を指摘することが出来る^(註3)。この遺跡分布の概観上から109mを1町単位とし、東西36町、南北46町におよぶ方格地割を想定できるとする考えである。これに対して城輪柵跡内部の地割(1区画400尺約120m)から400尺を1町単位とする考え方を提示されているが^(註4)、これまでの調査からは確証を得るまでの成果が得られていない。いずれにしろ城輪柵跡より南側には、旧建築部材が埋設した篠地業(重層塔の建物基壇)を検出した堂の前遺跡^(註5)、更に南方の河岸段丘上に立地する八森遺跡は一辺90m方形の囲み施設の中に礎石建物跡や堀立柱建物跡、八脚門を確認しており、城輪柵跡政庁城の建物配置を酷似していることから三代実錄仁和三年条(西暦887)にある国府移転先「高敵の地」と推測されている^(註6)。また城輪柵跡外郭線南東付近には、猿投窯産綠釉陶器や灰釉陶器を出土した沼田遺跡^(註7)。人面墨描土器甕内に人形木製品を入れ、払いの場が復元された俵田遺跡^(註8)等、古代国府周辺に存在する集落の歴史的在り方の検討がまたれるところである。

註1 山形県教育委員会「山形県地図」1978

註2 野尻 健・佐藤庄一「関B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第68集 1983

註3 佐藤庄一「城輪柵跡周辺の村落」庄内考古学 第19号 1985

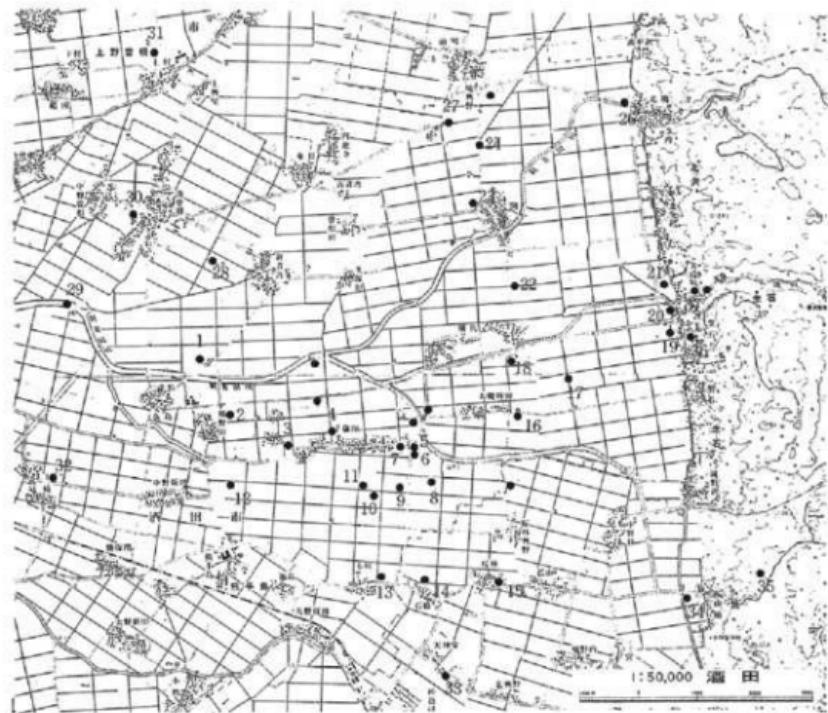
註4 阿部秀彦・洪谷家宣「沼田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第75集 1983

註5 尾形與赤「宮の前遺跡第1次調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第5集 1975・第7馬 1976・第30集 1980

註6 佐藤庄一「八森遺跡第1・2次調査報告書」1978

註7 野尻 健・佐藤庄一「沼田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第78集 1984

註8 安部 寛・佐藤庄一「俵田遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第77集 1984



第2図 遺跡位置・分布図

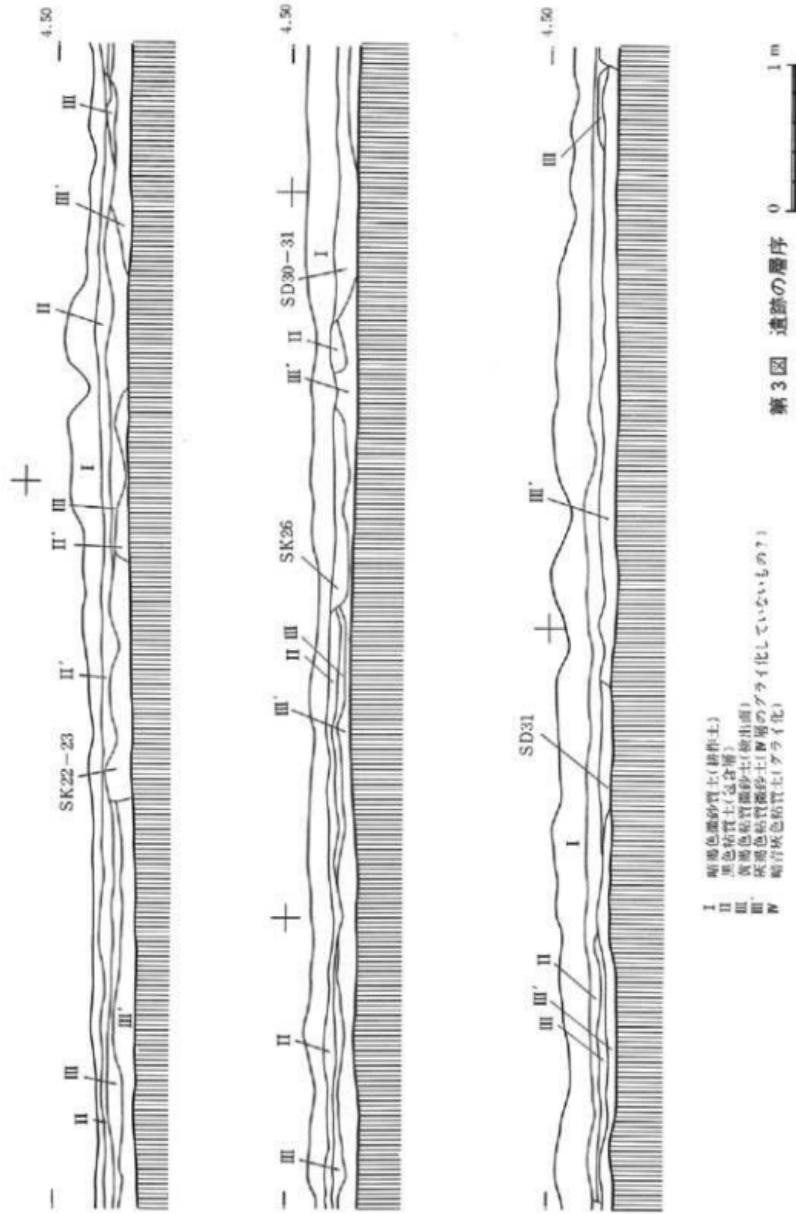
| 番号 | 県道跡番号 | 遺跡名 | 種別 | 番号 | 県道跡番号 | 遺跡名 | 種別 | 番号 | 県道跡番号 | 遺跡名 | 種別 | 番号 | 県道跡番号 | 遺跡名 | 種別 |
|----|-------|-------|-----|----|-------|------|-----|----|-------|-------|-----|----|-------|------|-----|
| 1 | 2025 | 南側野 | 集落跡 | 11 | 2036 | 手藏田8 | 集落跡 | 21 | 2057 | 開道 | 集落跡 | 31 | 2021 | 上曾根 | 墳墓 |
| 2 | 2028 | 熊野田 | 〃 | 12 | 2032 | 手藏田4 | 〃 | 22 | 2042 | 高阿弥陀 | 〃 | 32 | 2027 | 土崎 | 集落跡 |
| 3 | 2029 | 手藏田1 | 〃 | 13 | 2067 | 本川 | 〃 | 23 | 2019 | 開B | 〃 | 33 | 2325 | 天神堂 | 〃 |
| 4 | 2030 | 手藏田2 | 〃 | 14 | 2326 | 平畠田 | 〃 | 24 | 2020 | 北田 | 〃 | 34 | 2297 | 山櫛 | 〃 |
| 5 | 2038 | 手藏田10 | 〃 | 15 | 2327 | 板林 | 〃 | 25 | 2017 | 境興野 | 〃 | 35 | 2298 | 山櫛 | 城跡跡 |
| 6 | 2039 | 手藏田11 | 〃 | 16 | 2041 | 大根新田 | 〃 | 26 | 2048 | 北境 | 〃 | 36 | 2059 | 生石1 | 集落跡 |
| 7 | 2037 | 手藏田9 | 〃 | 17 | 2062 | 生石4 | 〃 | 27 | 2018 | 門能寺經屋 | 経塚 | 37 | 2055 | 矢流川B | 〃 |
| 8 | 2035 | 手藏田7 | 〃 | 18 | 2044 | 横代 | 〃 | 28 | 2024 | 新青渡 | 集落跡 | 38 | 2054 | 矢流川A | 包含地 |
| 9 | 2034 | 手藏田6 | 〃 | 19 | 2060 | 生石2 | 〃 | 29 | 2023 | 船止 | 〃 | 39 | 2328 | 桜林興野 | 集落跡 |
| 10 | 2033 | 手藏田5 | 〃 | 20 | 2058 | 矢口 | 〃 | 30 | 2022 | 漆曾根 | 〃 | | | | |

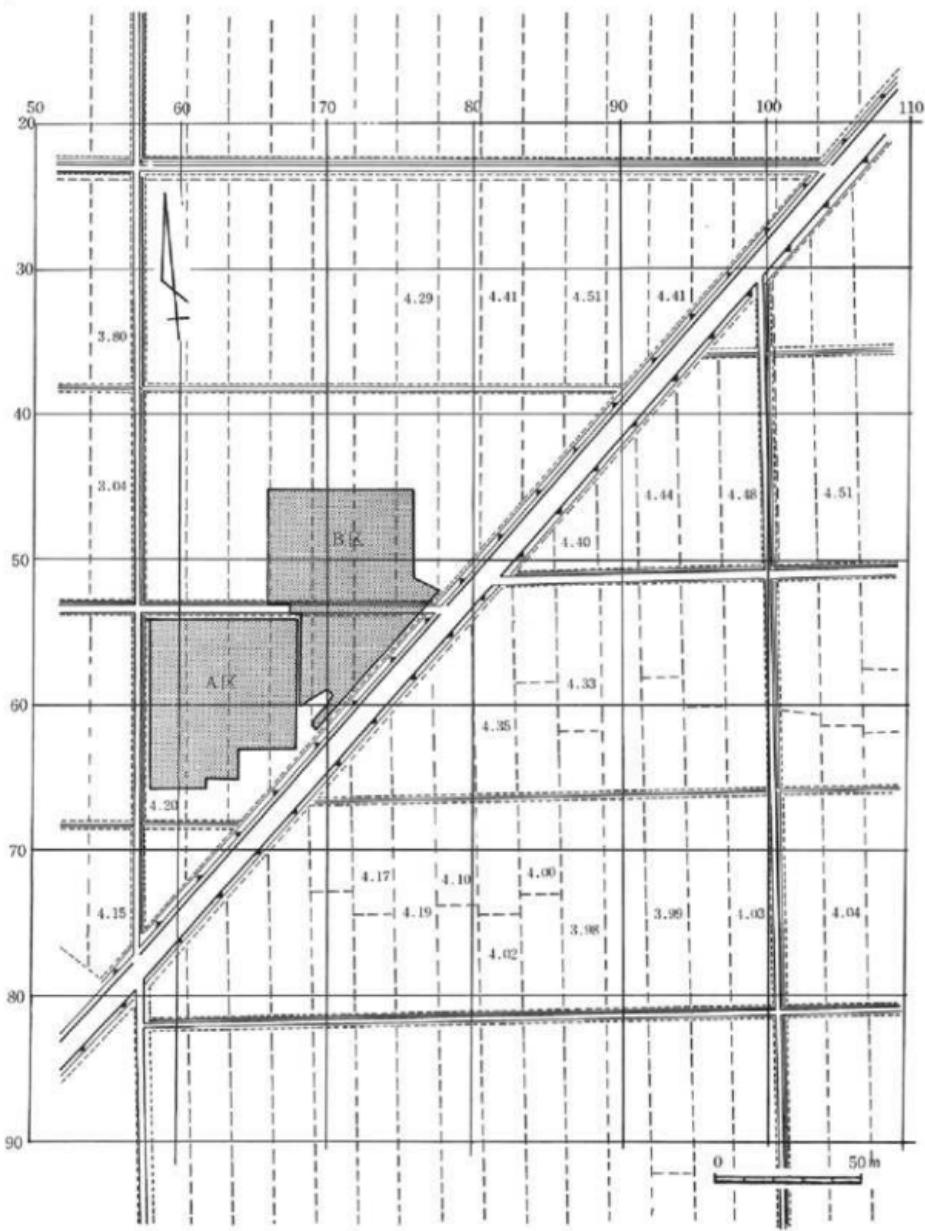
3 立地と層序

庄内平野東方の出羽山地を源にもつ新井田川は、庄内平野に入ると南西に蛇行しながら本遺跡の東方800mで、同じように出羽山地から流れ出る平田川と合流し、酒田市街地を通り日本海へ注ぐ。本遺跡は新青渡地区の南方に位置し、東西方向に延びる新井田川・旧平田川起源の自然堤防上に立地していると考えられる。現集落も基本的な立地条件であり、新青渡地区から南興野地区に通じる市道も自然堤防を利用した周辺よりも比較的高い位置を呈している。遺跡を中心として幾分東西にゆるやかな傾斜が認められる。調査の所見では遺跡全域での地盤が高くシルト・粘土を基本としたやや安定な状況と認識される。しかし、北西方向にかけて除々に基盤層が下がり、耕土下の強粘質土もしだいに厚く、しかもグライ化も強くなる傾向が窺える。しかし、南方にかけては泥炭層が広範に分布し、旧来からの低湿地であった事が理解される。これはすぐ南側に新井田川が西流していることを考えれば、旧氾濫原を想定出来、本章1で記述した地理的環境の中で土地分類基本調査における地形分類図に示された酒田三角洲の東辺に立地しており、三角洲の縁辺が低い自然堤防を形成し旧氾濫原との境界を呈していたと考えられる。

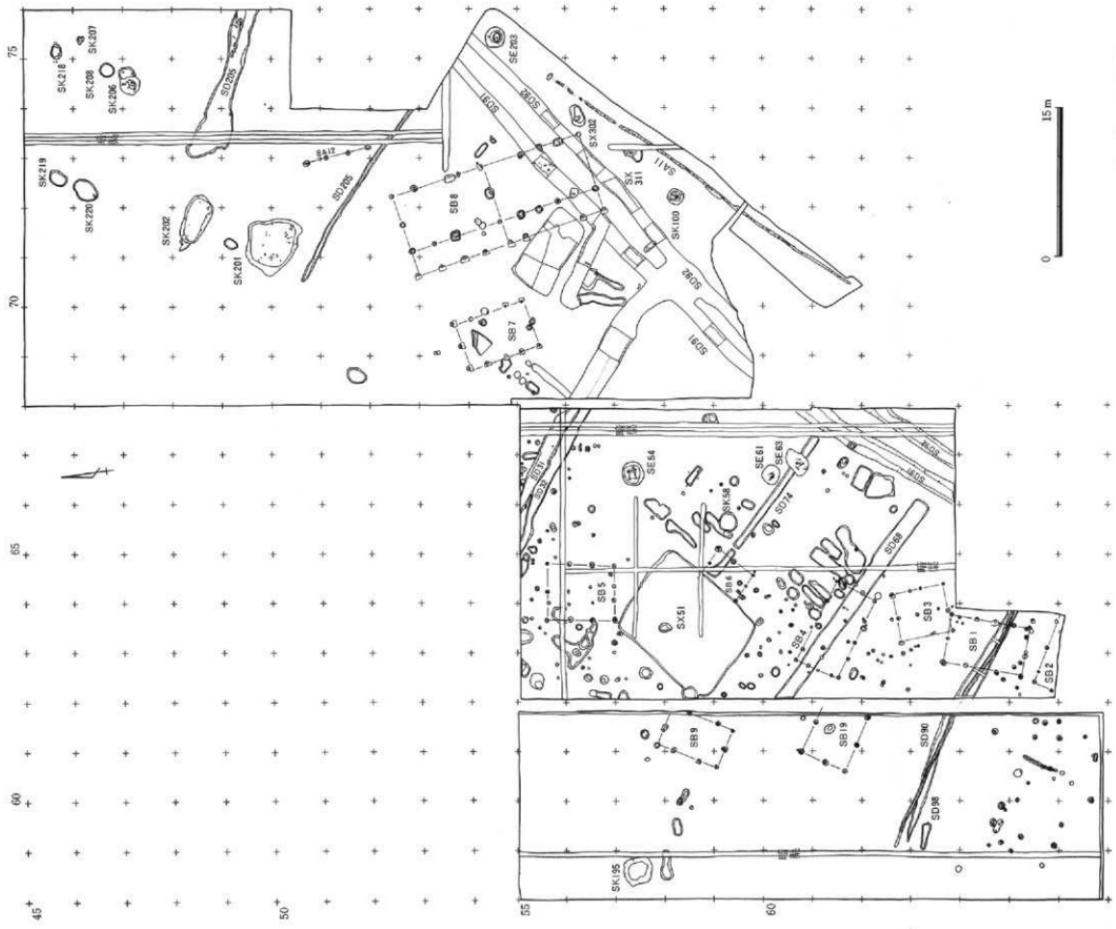
本遺跡の基本的層序は精査区64～67-55グリッド東西線の北面壁によって観察した。第4図に示した層序はその一部である。精査A・B区共に同様な層序列を示している。しかし、精査区西方端になるに従い耕土下の強粘質土がしだいに厚くなりグライ化が強くなる。また精査A区の北側と、B区の西側の部分は昭和初期の耕地整理の際、地盤起こしを広範に行なったとの話が地元より知り、強粘質土のブロックが耕土下に厚く堆積している。以下に第4図に示した層序の観察を記述する。

| | | |
|-------|---------|---|
| 第I層 | 明褐色粘質土 | 水田および畑地の耕作土で、畑地地域は砂分が多く、水田地域では粘性がやや認められる。15～20cmの厚さではほぼ均一に堆積する。 |
| 第II層 | 暗褐色粘砂土 | 第I層との境界部分に鉄分を含む粗砂層で、5～10cmの厚さで堆積する。 |
| 第III層 | 暗茶褐色粘質土 | 炭化物粒子や土器片等を含む遺物包含層で10～25cmの厚さで堆積する。 |
| 第IV層 | 黄褐色粘質土 | 黄色味を呈した部分と、青灰色粘質土部分が存在する。無遺物層で、III層下部又は本層直上面が遺構検出面にあたる。本層は更に下部ではシルト性と砂性に分かれる。 |





第4図 遺跡全体図



第5図 造構分布図

III 検出遺構

1 遺構の分布(第5図)

南興野遺跡の遺構・遺物が分布する範囲は、昨年度秋の遺跡詳細分布調査や、調査当初の坪掘り調査等の内容を加味すると南北400m、東西150m以上となり、更に東方へ範囲が延びる調査結果となった。今回の調査は今年度施工予定区域内を限定しているが、調査の対象とする面積が60,000m²という広大な遺跡範囲である。発掘調査をなし得た面積はその約17分の1(3,600m²)であるが、遺構・遺物の分布状況は把握できる。

今回の発掘調査で検出された遺構は掘立柱建物跡10棟、柱穴列1列、板塀列1列、井戸跡4基、土壙92基、溝状遺構14条、性格不明遺構3基の他、建物跡として構成することが出来なかった柱穴やピット等、登録された遺構は311を数える。地形的な要因による分布状況では、新青渡地区から南興野地区に通ずる市道沿いが周辺地形より一段高い状況により、遺構の分布もそれに沿った傾向を呈している。これは、第II章1で記述した庄内平野地形概観の中の庄内北部河間低地上に当り、観音寺から南西に放射状に分布する自然堤防上に立地することが要因として考えられる。また検出された遺構は、検出状況や、遺構内出土遺物等の特徴から大きく2つに群別出来る。一つは磁北ないし、真北の方向を示す南北の身舎を構成する建物跡と、その東又は南に井戸跡や土壙を付随させる遺構である。もう一つの群は、南西に延びる市道(自然堤防上)に対して直角に90°傾きを呈する建物跡と、それに付随する井戸跡・土壙等の遺構群である。これらは更に出土土器等の検討により細分出来る。しかし、遺構の分布状況の中で、調査区域の北西方を掘り広げたが、精査区域外に延びると考えられる溝状遺構や、建物跡となりそうな柱穴の存在が、天地返しによる破壊を受けているため明確なつながりが判明しなかった。しかし、坪掘り調査においては、多数の土器片が出土していることから遺構は存在していたと考えられる。以下に各遺構毎に記述する。

2 掘立柱建物跡

調査で確認された掘立柱建物跡は10棟を数える。建物跡の中で、磁北又は真北の方向を示すものと、立地条件で組合わさる建物跡群とに分けた。しかしこれらは、柱穴内出土の土器片や建物跡の方向、規模等により古代平安時代の集落単位を呈する建物跡もあり、庄内地方での集落単位の一例を示す例としてあげられるが、ここでは、遺構番号を付した順に確認出来た内容を記述する。

SB 1 建物跡(第6図、図版5)

精査A区南部62・63-63~65グリッドIII層上面で確認された梁行2間、桁行3間の南北棟の建物跡である。身舎の梁行長は5m、桁行長は8.1mを測る。柱間距離は、身舎北面梁行EB121・122・111柱穴で西から2.5m(約8尺)等間、南面梁行EB115~118柱穴で北面と同様の柱間距離を測るが、中間に位置するEB116柱穴が径も小さく浅いことからEB117柱穴がその支えとなつたものと考えられる。桁行での柱間距離は、身舎西面桁行EB118~121柱穴で南から2.7m(9尺)、3m(10尺)、2.4m(8尺)、東面桁行EB111~115柱穴で、南から1.8m(6尺)、1.8m(6尺)、1.8m(6尺)、2.7m(9尺)を測る。西面と東面の柱間距離がそれぞれ違ひを示すが、身舎桁行長が同一であることや、東西面柱穴に柱根が残存していることから建物跡と認定した。南北主軸方向は、磁北を基準としてN-18°-Wである。

柱穴掘り方は、直径25cm~35cm、検出面からの深さ20cm~35cmの円形ないし隅丸方形を呈する。柱は東面桁行部EB112・113柱穴、西面桁行EB121柱穴で、径18cmの柱根が残存している。その他の柱穴には抜きとられたり、朽ちて残っているものはないが、柱のアタリ部などから直径21cm前後の円柱を利用した可能性がある。

柱穴掘り方の埋土はほぼ3層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アタリ部の埋土は炭化物粒子を多く含む暗灰褐色粘質土である。

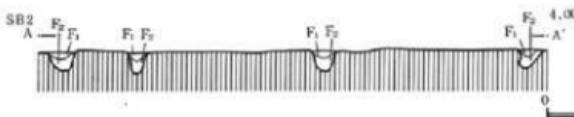
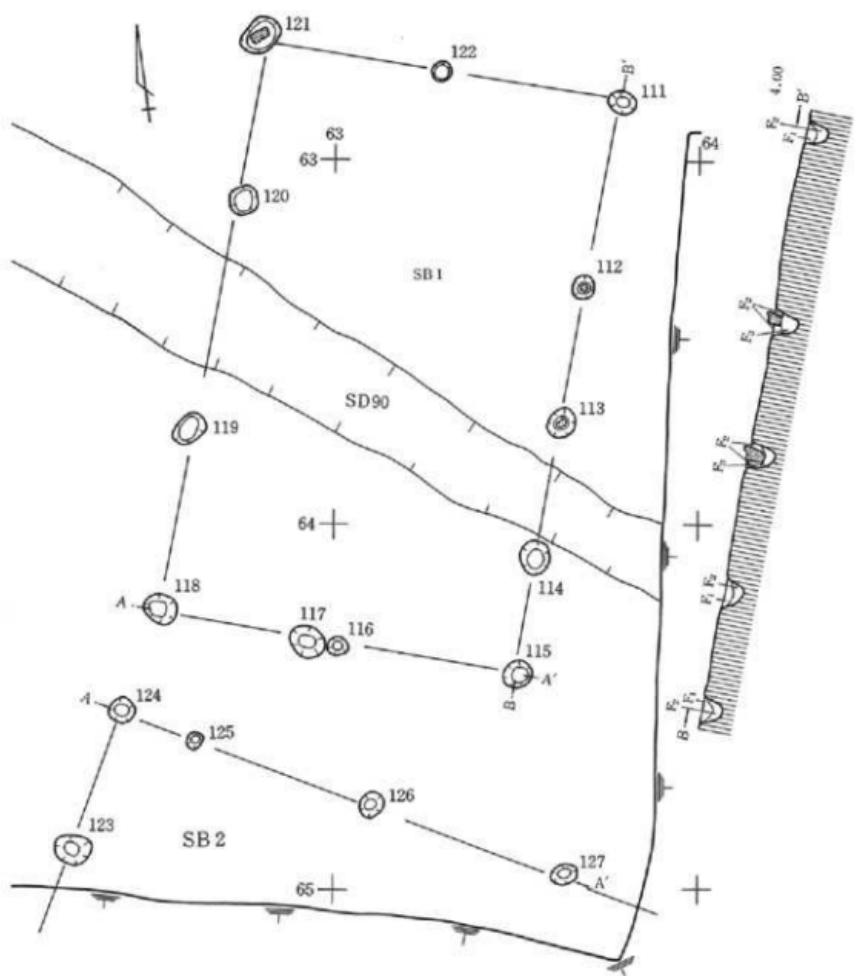
本建物跡柱穴のうち5ヵ所から土器片が出土している。土器には赤焼土器(第29図10)甕片・須恵器が出土したがその他は細片で図示出来なかった。総数11片を数える。また残存した柱根は周囲を丁寧に手斧削りが施され、底面も面取りされた痕跡を残している。土器の形態や調整手法などから時期は平安時代10世紀中葉から後葉に推定される。

SB 2 建物跡(第6図、図版5)

SB 1 建物跡のすぐ南側に隣接した62・63-65グリッド第III層上面で確認された梁行2間以上、桁行4間以上の東西棟を構成する掘立柱建物跡である。建物跡北西部分の検出のため全体の規模は不明である。確認出来た身舎の検出規模は北面桁行EB124~127柱穴で西から1.1m(約4尺)、2.6m(約8尺)、2.8m(約9尺)を測り、桁行長6.5m以上の桁行となる。西面梁行EB124・123柱穴は2m(約7尺)で検出されたが、それ以上の梁行は未調査区域に入るため確認出来なかつた。北面桁行部での西側EB124・125柱穴間が1.1mの柱間距離から考えて、西面に庇ないし縁東が付く建物と考えられる。N-30°-Eを測る。

柱穴掘り方は、径20~30cm、深さ26~30cmの円形を呈し、柱は抜き取られたり、朽ちて柱根が残っていないが、柱のアタリなどから径15cm前後の円柱を呈しているものと考える。

柱穴掘り方内からは須恵器片、赤焼土器片が計3片出土したが、細片のため図示出来るものはなかつた。土器片の特徴から時期は平安時代後半と推測出来る。



SB1 柱穴土層註記

F₁ 青灰色粘質土

F₂ 青灰色砂質土

SB2 柱穴土層註記

F₁ 青灰色粘質土

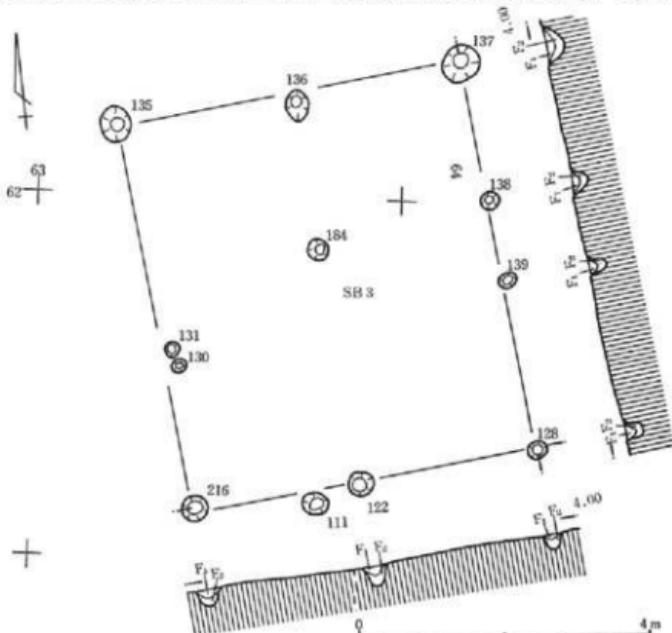
F₂ 青灰色砂質土

SB 3 建物跡(第 7 図、図版 5)

精査 A 区南部 63・64-62・63 グリッド III 層土面で確認された梁行二間、桁行二間の南北棟の建物跡である。身舎の梁行長は 4.8m、桁行長は 5.1m を測る。柱間距離は、身舎北面梁行 EB135・136・137 柱穴で、西から 2.4m(約 8 尺) 等間、南西梁行 EB216・122・128 柱穴でも同様な柱間距離を測るが中間に存在する EB122 柱穴の西隣りに EB111 柱穴が存在する。EB122 柱穴の控え柱と推測したが、EB122 柱穴が、北西梁行の EB136 柱穴と相対することから本建物跡に伴う柱穴としては認めがたい。桁行での柱間距離は西面 EB135・130・131・216 柱穴間は北より 3m(10 尺)、2.1m(7 尺)、東面では EB137・138・139・128 柱穴間は北より 1.8m(6 尺)、1m(約 3 尺)、2.3m(約 7 尺) を測る。西面桁行の EB130 と 131 柱穴は身舎の補強に用いられた柱穴と考えられる。身舎の南北主軸方向は、磁北を基準として N-2°-W を測る。

柱穴掘り方は、直径 25~46cm、検出面からの深さ 20~28cm の円形ないし隅丸方形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちて残存しているものはないが、柱のアタリ部などから直径 21cm 前後の円柱を利用した可能性がある。

柱穴掘り方の埋土はほぼ 2 層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アタリ



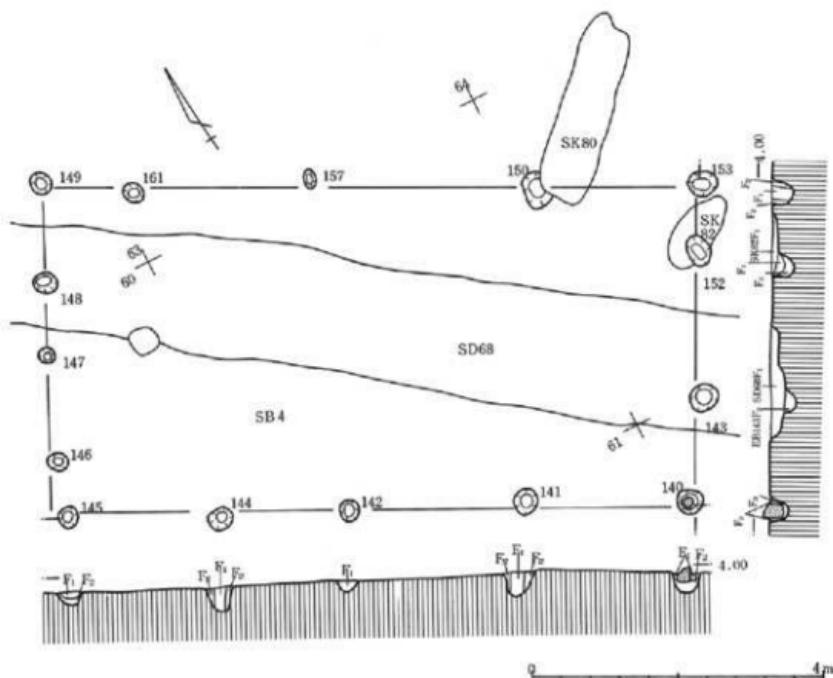
第 7 図 SB 3 建物跡

部の埋土は炭化物粒子を多く含む暗灰褐色粘質土である。

本建物跡柱穴のうち4ヶ所から土器片が出土している。土器には須恵器・赤焼土器の壊・甕片であるが細片のため図示出来るものがない。しかし特徴や調整法などから平安時代10世紀中葉と考えられる。また本建物跡がSB1建物跡の北東隅で重複があり、SB1建物跡のうちに本建物跡が営なまれたものと考えられる。

SB4建物跡(第8図、図版5)

SB3建物跡の北側に隣接した62~64-60~62グリッド第III層上面で確認された梁行3間、桁行4間の東西棟の建物跡である。身舎の梁行長4.4m、桁行長9mを測る。柱間距離は身舎北面桁行EB149・161・157・150・153柱穴で西から1.2m(4尺)、2.4m(8尺)、3m(10尺)、2.1m(7尺)、南面桁行EB145・144・142・141・140柱穴で西から2.1m(7尺)、1.8m(6尺)、2.4m、2.1m(7尺)を測る。各梁行、桁行面それぞれ柱間距離や位置が違うが柱根が残存していたEB140柱穴を基点にして建物跡として構成出来る柱穴を組み合せた建物跡である。身舎の南北主軸方向は、磁北を基準としてN-23°-Wを測る。



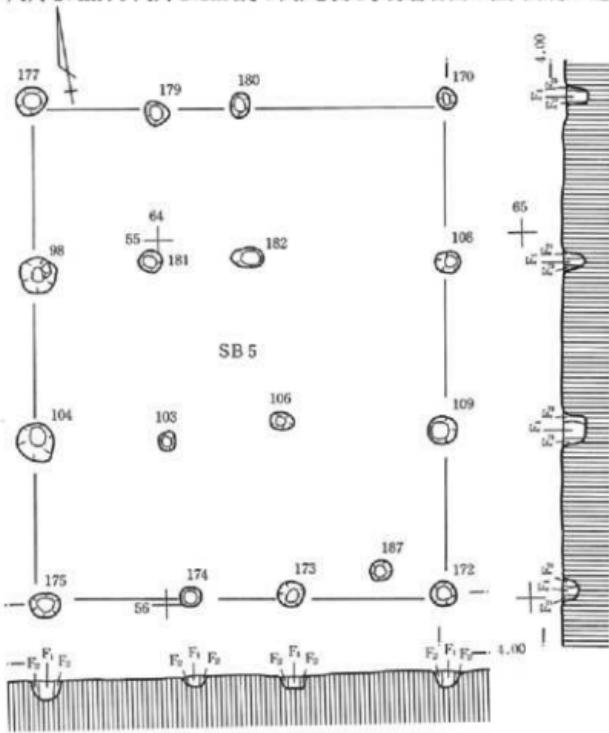
柱穴掘り方は、直径22~38cm、検出面からの深さ20~34cmの円形ないし隋円形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちて残存しているものはEB140柱穴の柱根だけであり、他は柱のアタリ部などから直径20cm前後の円柱と考えられる。EB140柱根は径18cmの円柱である。

柱穴掘り方の埋土はほぼ2層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アタリ部の埋土は炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土である。建物跡柱穴のうちEB141と142柱穴より須恵器片、赤焼土器片が出土したがいずれも細片で図示出来なかった。時期は不明である。

SB 5 建物跡(第9図、図版5・10)

A精査区北側中央63・64・55・56グリッドIII層上面で確認された梁行三間、桁行三間の南北棟である。身舎の梁行長5.7m、桁行長6.6mを測る。柱間距離は身舎北面梁行EB170・180・179・177柱で西から1.8m(6尺)、1.2m(4尺)、2.8m(約9尺)、南面梁行EB172・173・174・175柱穴で西から1.8(6尺)、1.4m(約5尺)、2.1m(7尺)を測り、西面桁行EB177・98・104・175柱穴で2.4m(8尺)、2.2m(約7尺)、2.2m(約7尺)、東面桁行170・108・109・172柱穴で2.2m(約7尺)、2.4m(8尺)、2.2m(約7尺)を測る。身舎各面の柱間距離が違うが、柱穴掘り方

の覆土状態が同様な柱穴を組み合せた結果、建物跡として構成されるものと考えたものである。覆土は2層に分かれ、埋土となるF₁は赤褐色粘質土を基調にし、炭化物粒子や土器片を含む。柱穴掘り方は直径25~45cm、検出面からの深さ20~40cmの円形ないし不整円形

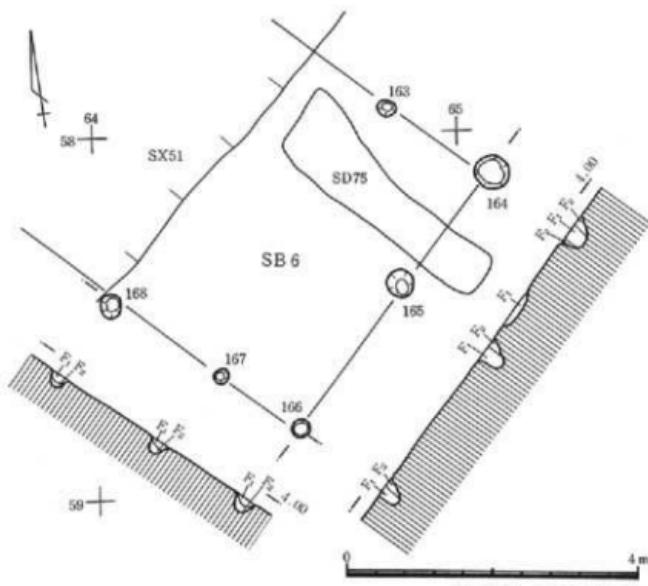


を呈する。柱は抜きとられたり、朽ちて残存しているものはないが、柱のアクリ部などから直径18~25cmの円形と考えられる。建物跡の内側にはEB181・182・103・106の柱穴があり、建物跡梁行の置柱的な配置がなされている。N-36°-Eを測る。本建物跡のEB98・104・108・109・170・180・181柱穴より須恵器・赤焼土器、内黒土器片計25点が出土している。第29図1は、EB181柱穴掘り方覆土内より出土した赤焼土器片である。他の土器は細片で図示出来るものはなかった。建物跡の時期は平安時代11世紀前半が推測される。

SB 6 建物跡(第10図)

精査A区ほぼ中央部64・65・58・59のG第三層上面で確認された梁行2間、桁行2間以上の東西棟である。身舎の梁行長4.2m、桁行長3m以上を測る。柱間距離は身舎北面梁行EB164・165・166柱穴で、2.1m(7尺)、2.4m(8尺)、南面桁行EB166・167・168柱穴で1.2m(4尺)、1.8m(6尺)となり、更に西へ続くものと考えられるが、SX51性格不明の遺構により柱穴が破壊を受けたものと考えられる。N-43°-Wを測る。柱穴掘り方の覆土は2層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アクリ部の埋土は炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土である。EB169柱穴掘り方内より赤焼土器の細片2点が出土したが、図示出来なかった。

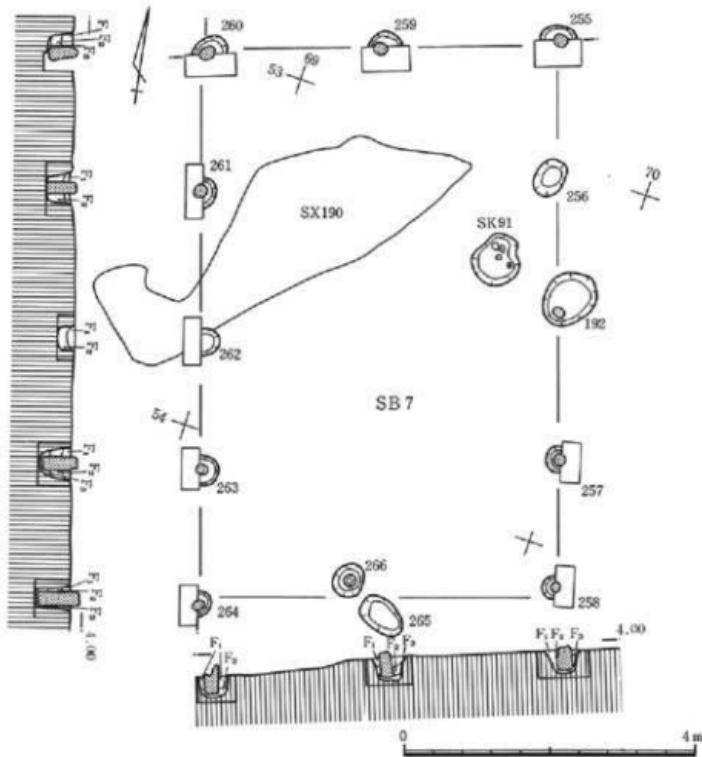
本建物跡の時期は不明である。



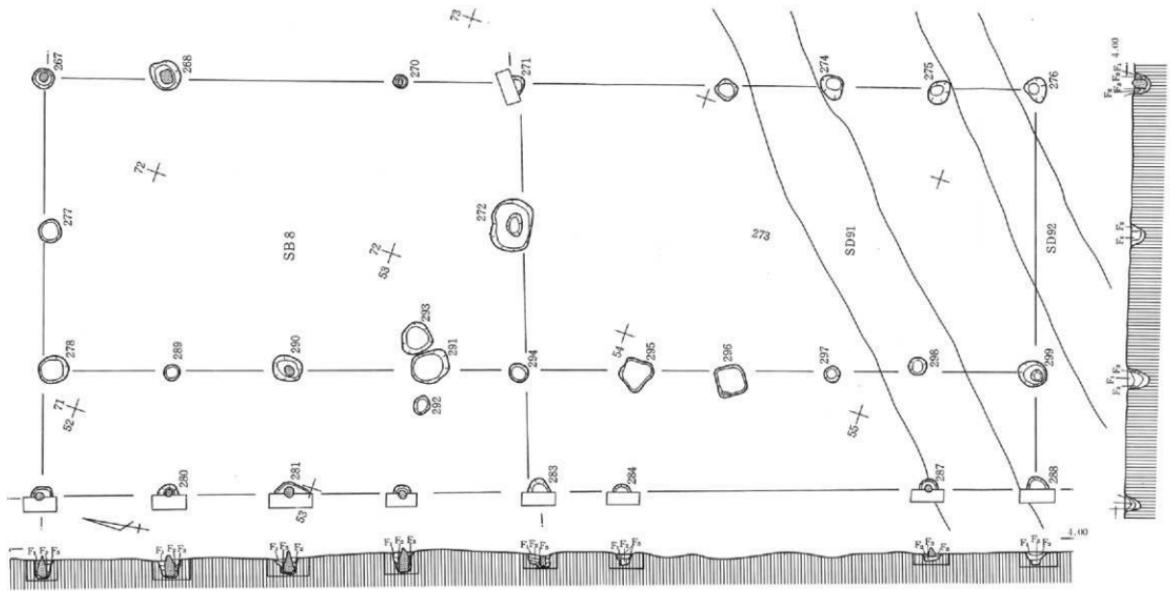
第10図 SB 6 建物跡

SB 7 建物跡(第11図、図版 7・11・12)

精査B区西側やや中央68・69—52~54Gで確認された梁行2間、桁行4間の南北棟の掘立柱建物跡である。身舎の規模は梁行長4.8m、桁行長7.8mを測る。柱間距離は、身舎北面梁行EB255・259・260柱穴で2.4m(8尺)等間、南面梁行EB264・266・265・258柱穴で北面と同様に8尺等間となるが、中間の柱に位置するEB266とEB265柱穴が近接しており、EB265柱穴の控え柱としてEB266柱穴が存在したものと考えられる。西面桁行部の柱間距離はEB260~264柱穴が2.1m(7尺)、2.1m(7尺)、1.8m(6尺)、1.8m(6尺)の7.6mを測る。東面桁行EB255~258柱穴では、1.8m(6尺)、1.8m(6尺)、2m(約7尺)、1.8m(6尺)の7.4mを測る。西面と東面の桁行長が約20cmの違いがあり、東面桁行部が短かい。しかし、本建物が組み合わさる柱穴の中には、柱根がほとんど残存しており、約7寸の柱間が



第11図 SB 7 建物跡



第12図 SB8 線物語

短かいことは、EB264柱根とEB258柱根が直角にならないため推測ではあるがEB258柱根が曲り柱(踊柱)を使用していたことも考えられる。建物跡の南北主軸方向は磁北を基準としてN-11°-Eである。

柱穴掘り方の埋土は、3層に分けられ、F₁層茶褐色粘質土、F₂層濁青灰色粘砂土、F₃層青灰色砂質土である。残存している柱根は、本建物跡を構成する13柱穴中9柱根である。柱根は、径18~21cmの円柱で、長さ40~60cmに残っている。柱根の周囲は手斧等できれいに面取りされ、底面は斧等で水平にしているものが多い。比較的垂直に置かれている。柱穴の掘り方内からは柱根と共に須恵器、内黒土器・赤焼土器片が計46片が出土している。

本建物跡の時期は出土土器により10世紀後葉に推測される。

SB 8 建物跡(第12図、図版10・13~16)

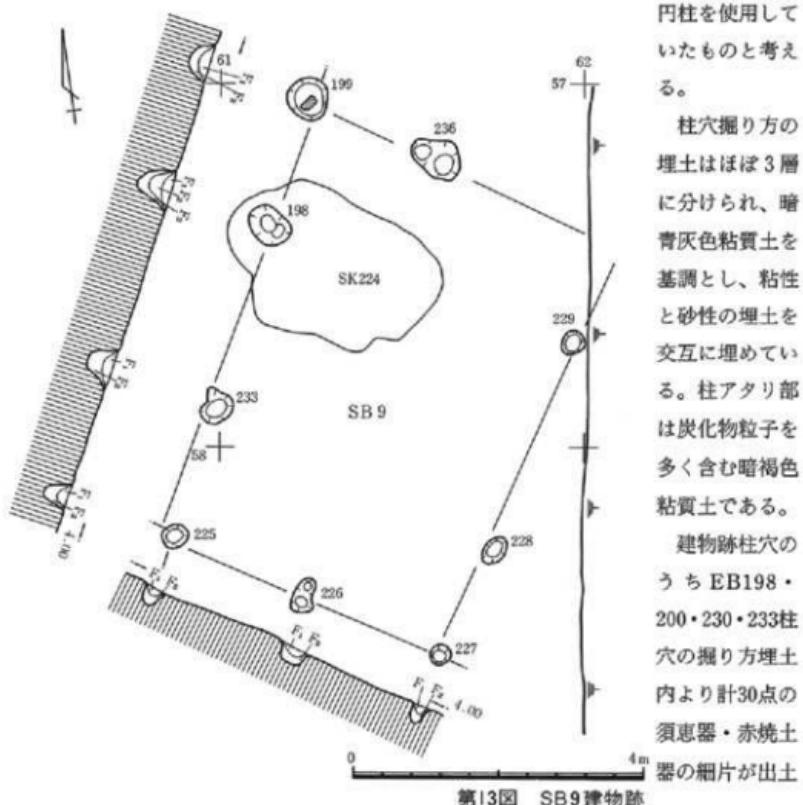
精査B区中央52~56-70~73G III層上面で確認された梁行二間、桁行九間に西面庇ないし縁東を持つ南北棟である。本遺跡の中心となる建物跡である。柱間距離は北面梁行EB278・277・267柱穴で西より2.7m(9尺)、3.3m(11尺)に2.4m(8尺)の底部となる。南面梁行299・276柱穴では6m(20尺)を測る。南面梁行部中央に柱が存在するものと考えられるが、SD92溝状造構により破壊を受けたものと考える。西面桁行部での柱間距離は北よりEB278・289・290・291・294・295・296・297・298・299柱穴で2.4m(8尺)、2.4m(8尺)、2.7m(9尺)、2.1m(7尺)、2.4m(8尺)、1.8m(6尺)、2.1m(7尺)、1.8m(6尺)、2.4m(8尺)という規則的な配置がなされていない。東面桁行EB267・268・270・271・273・274・275・276柱穴では2.4m(8尺)、4.8m、2.3m(約8尺)、4.2m(13尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)を測り、西面桁行部に比べて規則的な配置がなされている。しかし、EB268とEB270柱穴間、EB271とEB273柱穴間に柱穴の存在がない。16尺及び13尺の桁間を持つことが建物跡としてどのような機能を持つか不明である。西面桁行部に付隨する庇部の柱間は桁行部と同様な柱間を測る。しかしこの庇部のEB284と287柱穴間に柱穴が検出されなかった。身舎の中央部EB271と294柱穴間にEB272柱穴が存在し、身舎の間仕切り柱として存在していたものと考えられる。身舎を4間と5間に分けたものと思われる。

柱穴掘り方は、径30~60cm、掘り込み面からの深さ25~45cmを測り、平面形は円形、不整円形方形とあり、規則性がない。確認された28個の柱穴のうち、柱根が残存しているのが9個あり、その他は抜き取られたり朽ちて残存していない。残存している柱根の観察では、径24~27cmの円柱を使用しており、周辺を丁寧に面取りされている。底面は斧や手斧により水平にしている。本建物跡柱穴掘り方内より土器片が出土した柱穴は13個で、総数333片を数える。EB295・296柱穴から多量の土器片が出土し、第29図に示した1・10以外は本建物跡出土の遺物である。時期は10世紀後葉に推測される。

SB 9 建物跡(第13図、図版10)

精査A区西側、60・61-57~59G、III層上面で確認された梁行2間、桁行3間の南北棟である。身舎の梁行長4.2m、桁行長6mを測る。柱間距離は身舎北面EB199・236柱穴間が1.8m(6尺)となり、更に2.4m離れた未掘地区へ柱穴が存在するものと考えられる。南面桁行EB255・226・227柱穴間は2.1m(7尺)等間となる。西面桁行EB199・198・233・225柱穴は北より1.8m(6尺)、2.4m(8尺)、1.8m(6尺)、東面桁行南よりEB227・228・229柱穴は1.8m(6尺)、2.7m(9尺)となり、北面梁行部からつながる柱穴へと続くものと考えられる。

柱穴掘り方は、径25~55cm、検出面からの深さ30~45cmの円形ないし不整円形を呈する。EB199柱穴には径約15cmの円柱が斜めにおかれている。その他の柱穴には柱は残存していない。抜き取られたり、朽ちたものと考えられる。柱のアタリ部などから直径20cm前後の



している。いずれも細片で図示出来るものはなかったが、調整技法や、器形から建物跡の時期は平安時代11世紀前半と考える。主軸方向は磁北を基準としてN-29°-Eである。

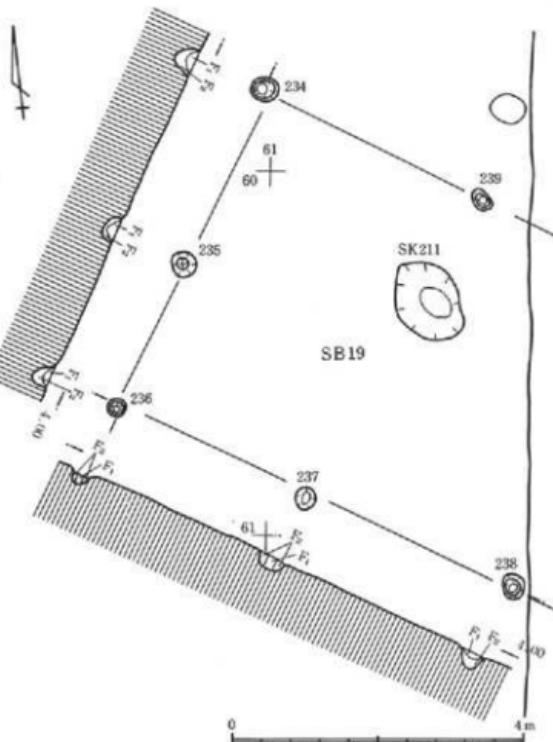
SB19建物跡(第14図)

精査A区中央やや西側、60・61-60~62G第III層上面で確認された梁行2間、桁行2間以上の東西棟である。身舎の梁行長4.8m、桁行長6m以上を測る。桁間は2間までは確認出来たが、それ以上は未掘部分となることで不明であるが、2間四方となる建物跡と考えられる。

柱間距離は身舎西面梁行EB234・235・236柱穴で北より2.7m(9尺)、2.1m(7尺)を測る。東面梁行部は未掘なため不明であるが梁行長は4.8m(16尺)と推測出来る。南面桁行EB236・237・238柱穴で西より3m(10尺)等間となり、北面も同様な柱間を呈するものと考えられる。主軸方向は磁北を基準としてN-31°-Eである。

柱穴掘り方は、径25~35cm、検出面からの深さ20~35cmの円形ないし不整円形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちて残存する柱根はなかったが、柱のアタリ部などから直径20cm前後の円柱を使用していたものと考えられる。

柱穴掘り方の埋土はほぼ2層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アタリ部は炭化物粒子を多く含み、暗褐色粘質土である。建物跡柱穴からは土器片等の出土は検出されなかった。本建物跡の時期は不明であるが主軸方向が同一であり、東西棟となるSB1建物跡又はSB6建物跡と同時期かそれに近い時期が当てられる。



第14図 SB19建物跡

3 板塀列・柱穴列

本遺構は精査A区で確認されたものである。一つは4つの柱列が連なる柱穴列、一つは精査南辺に南北に矢板列が連なる列である。ここでは築造方法が違う列を並記して記述する。

SA11板塀列(第15図、巻頭図版1・2、図版8・9)

本板塀列は、SB8建物跡が大きく広がったことや、SE203井戸跡が本遺跡の中央を通る市道際で検出されたことにより、更に南へ拡張した地区で検出された板塀列である。検出区は70~74-55~61G III層上面に矢板が37.2mの長さで確認された。矢板列の掘り方は幅40~45cm、深さ35~45cmの掘り方に矢板が打ち込まれた状態で検出されたものである。矢板は幅10~25cm、厚さ2~3cmで打ち込まれた先端を尖らせたものや、斜めに削り切った矢板である。横一列に打ち込まれた矢板は、北端部の板が直角となり、28m南で同様に矢板が直角になる。更に5.3mと7.3mで同様に直角となり、その部分の掘り方は直線となる掘り方より大きくふくらんだ掘り方を呈しており、板塀が倒壊しない施しと考えられる。掘り方の埋土は2層に分かれ、F₁は濁青灰色粘質土、F₂は青灰色粘砂土となる。

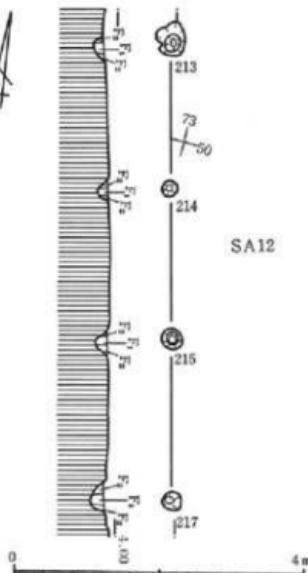
本板塀列掘り方内からの出土土器は検出できなかった。しかし、北西側に主軸方向はちがうがSB7・8建物跡があり、これら建物跡に伴う塀列と考えられ、時期も建物跡と同様と推測出来る。

SA12柱穴列(第16図、図版17)

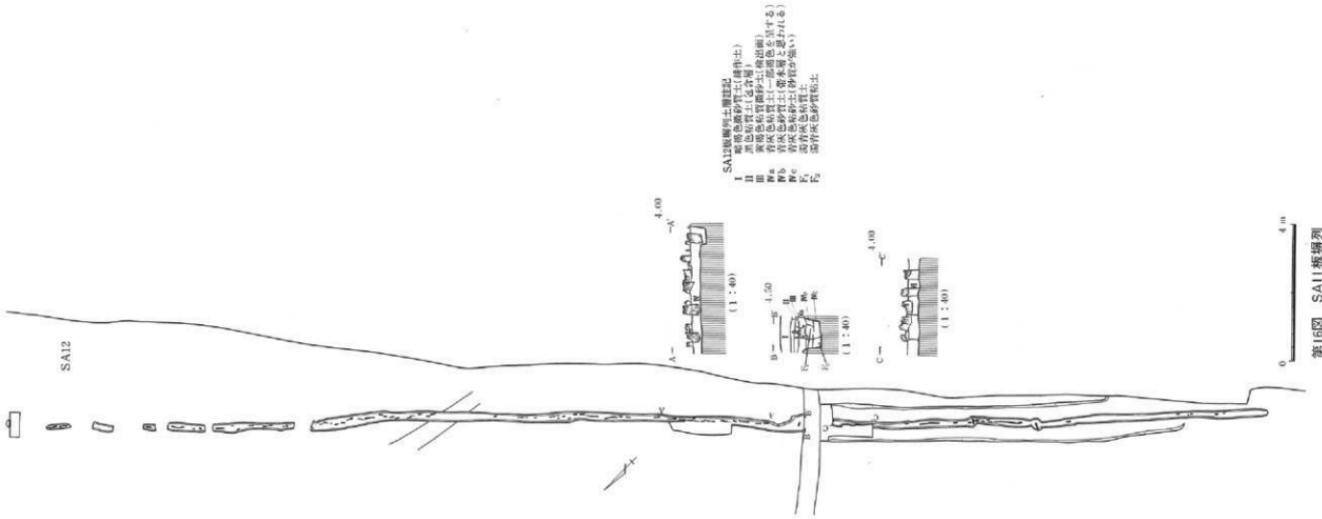
精査B区72・73-50・51G III層上面で確認された南北3間の柱穴列である。柱間距離は2.1m(7尺)等間である。

柱穴掘り方は20~25cm、検出面からの深さ18~22cmの円形ないし不整円形を呈する。各柱穴には柱根は残存していない。抜き取られたり、朽ちていたものと考えられるが、柱のアタリ部の観察から直径16~18cmの円柱を利用した可能性がある。柱穴掘り方の埋土は2層に分かれ、暗青灰色粘質を基調としている。柱アタリ部は暗灰色粘質土である。

すべての柱穴より須恵器、黒色土器、赤焼土器の細片が出土したが図示出来なかった。調整技法から時期は平安時代10世紀後葉と考える。



第15図 SA12柱穴列



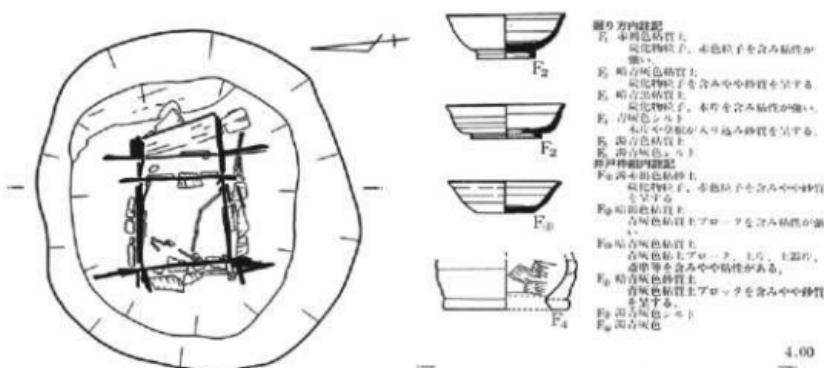
第16图 SAI11板梁列

4 井戸跡

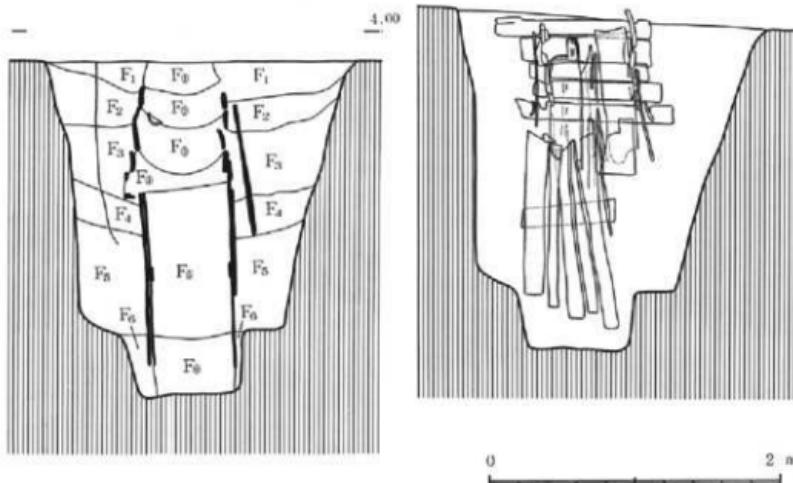
今回の調査で検出された井戸跡は4基を数える。精査A区で3基、精査B区で1基である。精査A区の井戸跡は井桁に組まれた井側の周囲を縦板が打ち込んでいるものと、井戸枠組が取りはずされ、不用となった板材を投げ捨てているものがある。B区の井戸跡は、丸木舟の舟首と舟尾を切りおとし、半分にしたものを作らせたものである。

以下に各井戸跡毎に記述する。

SE54井戸跡(第17図、巻頭図版3・4、図版18~22)



4.00



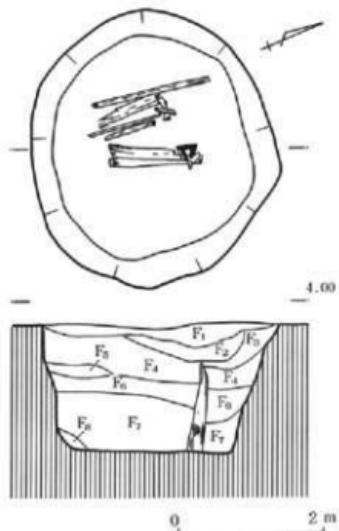
第17図 SE54井戸跡

井戸跡は精査A区北東部66—57G第IV層上面でその掘り方の掘り込みが始まる井戸跡である。井戸跡掘り方は、東西2.35m、南北2.15mの隅丸方形を呈している。掘り込まれた深さは最深部で掘り方上面より228cmである。掘り方は6層に分かれ、粘性の強い青灰色粘質土と、暗青灰色砂質土を交互に埋めこんでいる。2層や4層には木片や土器片が多く含み、やや粘性が強い。

掘り方の中心には遺存状態の良好な井戸枠組(井側)を方形(井桁・校倉)に組み込んでいる。井側は幅12~18cm、長さ82~108cm、厚さ2~3cmの柾目(ひのき)の板材が井桁(校倉)式に組み入れ、下段から4段に垂直な積み上げを行なっている。またその井桁に組まれた外側には、幅7~23cm、長さ64~98cm、厚さ2~3cmの板が縦位に打ち込まれ、先端部の片面を片刃状に削られているものや、尖らしている板材もある。これらの井側は、その下部に更に縦板(よこいたん)・横棟(よこむき)で組み合わさる井側の上に乗り、井戸組中位の井側となっている。更にこれらの上部の井側を支えるように、中位の縦板の最下部には上部の井側の組み方に菱形に交差した形状で、更に下部に向かって幅8~12cm、長さ53~60cm、厚さ1~2cmの板材が打ち込まれている。本井戸跡井側の設置方法については、従来庄内地方で検出されている井戸枠組の中で特異な方法を示している。本井戸跡は井側内部や掘り方内からの出土土器により、平安時代9世紀後半から10世紀初頭に推定される。

SE61井戸跡(第18図、図版25)

精査A区東側中央付近、66—60グリッドIV層上面で確認された井戸跡である。掘り方は東西1.8m、南北1.7mの不整の隋円形を呈し、深さ85cmの掘り込みをもつ。内部には井戸枠組材と考えられる板材が投げ捨てられた状態のものと、三枚の板材各辺を三角形に組み合させ突き刺した状態の枠組材が出土した。投げ込まれた板は、端部を尖らしているものや、片面を削り取った板がある。三角形に突き刺した板は先端を尖らしており、突き刺し用に施した板である。これら板材は、井戸枠組の中で縦板として使用されたものと考えられ、三角形に組み突き刺す状態は、井戸廃棄の際何らかの行事を行なったものと考える。井戸内部からは総類、42点の土器片が出土し、時期は平安時代10世紀中葉と考える。



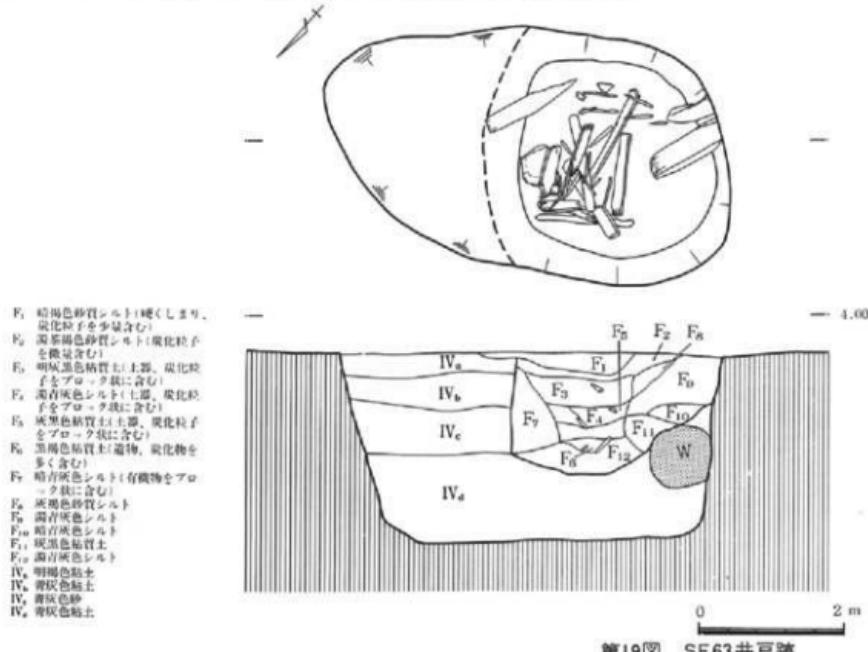
F₁ 明褐色砂質シルト(炭化物を微量含む)
暗青褐色砂質シルト(炭化物を多く含む)
暗青褐色砂質シルト(炭化物をアーロック状に含む)
明褐色粘質土(炭化物をアーロック状に含む)
明褐色粘質土
暗褐色シルト(泥炭色粘質土をアーロック状に含む、主部を含む)
黒褐色シルト(炭化物、主部を含む)
暗青褐色シルト

SE63井戸跡(第19図、図版25)

精査A区東側中央付近、66・67—60グリッドIV層上面、SE61井戸跡のすぐ南側で確認された井戸跡である。掘り方は、東西2m、南北1.8mのやや円形を呈していたものと考えられるが、掘り方西側の辺が崩れており、明確な状態を呈していない。深さは85cmを測り、内部南側に自然木の埋れ木が横たわっている。内部からは、井戸枠組と考えられる板材が投げ込まれた状態で検出された。板材は幅18~26cm、厚さ8~15mm/m、長さ60~70cmを測り、先端を尖らしたものは少ない。これら板材は、井桁に組み込むための板材と考えられ、一部底面に近い部分から出土した板材は井形に置かれたものもある。しかし上部にある板材は投げ捨てた状態を呈している。又、断面の観察では、F₁・F₂・F₃・F₄・F₅・F₆・F₇・F₁₂が黒色炭化物を含むやや黒褐色粘質土を呈し、本来の井戸跡内部の層序と近似している。又、F₉~F₁₁までの土質は、掘り方の埋土と同様な性質を呈している。

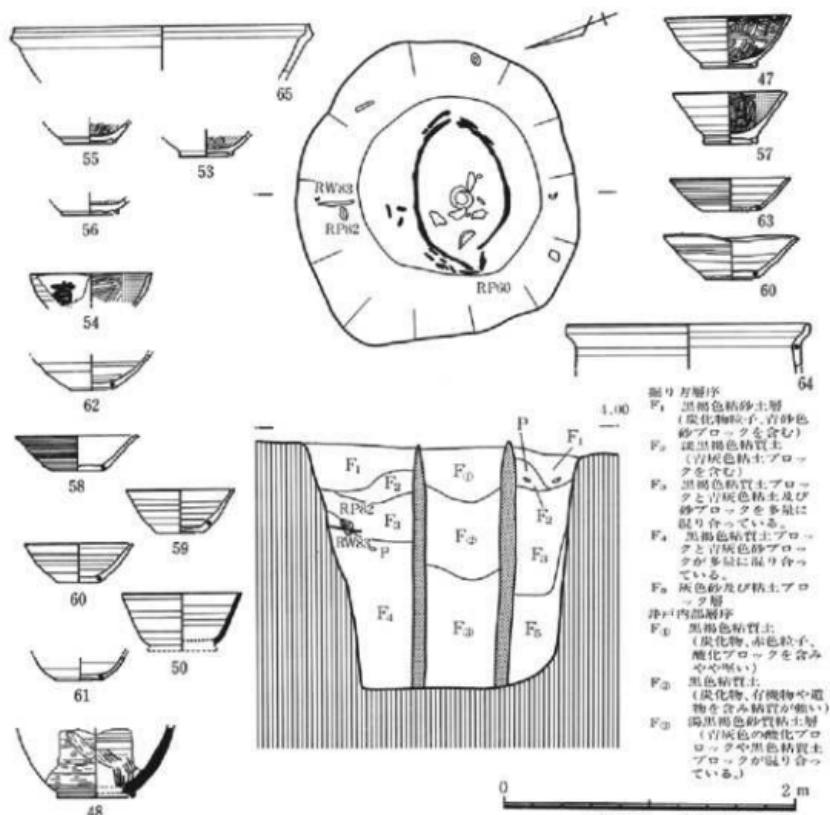
本井戸跡各層内より須恵器・土師器・内黒土師器・赤焼土器片総計60片出土している。また土器片の他、投げ込まれた板材とともに、遺物番号35~46の斎串が多量に出土した。

出土した土器で図示出来たものは第31図30~33の4点であり、その他は図示出来なかつた。これらにより本井戸跡の時期は平安時代10世紀後半に推定される。



SE203井戸跡(第20図、巻頭図版5・6、図版23・24)

精査B区東縁中央、75—54G第IV層上面でその掘り込みが始まる井戸跡である。井戸跡掘り方は、東西2m、南北1.9mの不整円形を呈している。掘り込まれた深さは最深部で掘り方上面より166cmを測る。掘り方は4層に分かれ、黒褐色粘砂土と粘質土及び青灰色粘土ブロックを混り合せた土質の土砂を交互に埋め込んでいる。堀り方の中央部には遺存状態の良好な大木を半截し、削りぬいた状態で検出されている。丸木舟の舟首と舟尾を切りおとし、半分にしたものを合わせて井戸組としたものである。舟の廃棄後利用したものと考えられ、舟の観察では左舷又は右舷の3分の1位を切りおとしたのち合せたものである。水抜き穴も明瞭に残り、一辺4cm角の栓が打ち込まれていた。本井戸跡の堀り方内や枠組内からの出土土器により10世紀後葉の時期と考えられる。



第20図 SE203井戸跡

5 土 壤

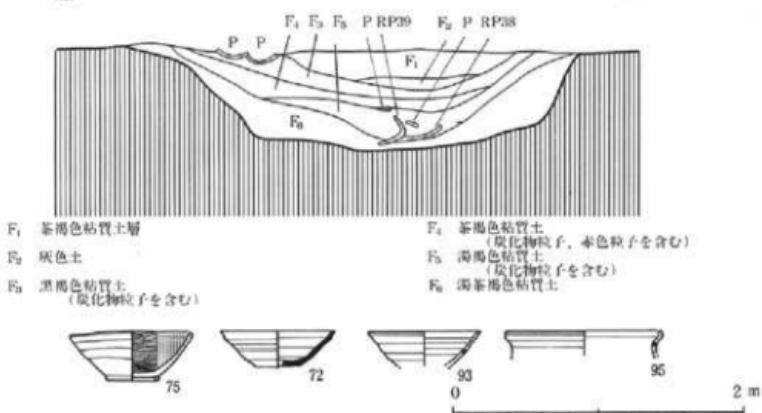
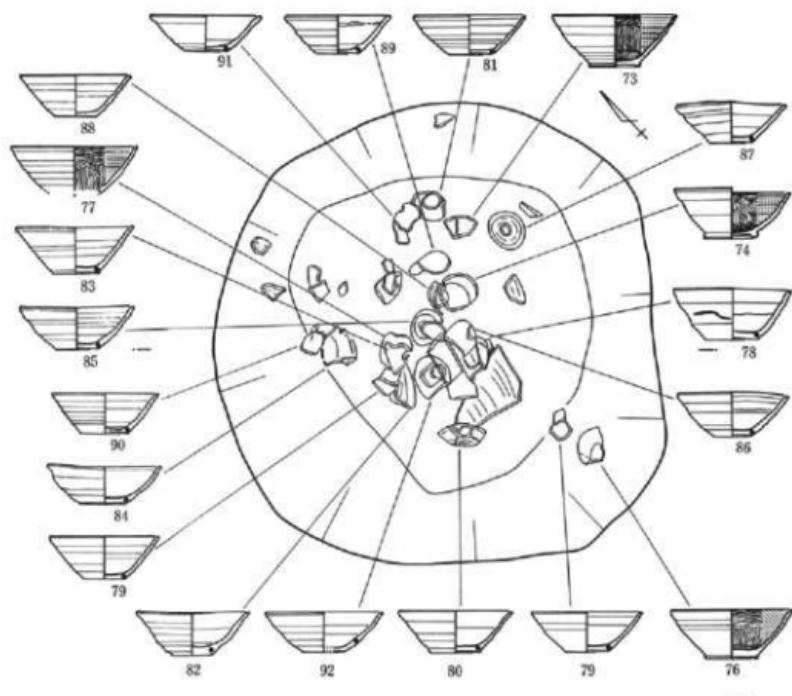
調査で土壤と確認され、遺構登録された数は92基を数える。これらは平面形から円形・不整円形・方形・不整方形・隅丸方形・長方形・隋円形など、形状を決められるものや、前述の形に決めることが難しい形状を呈するものがある。しかしこれらの土壤を形状、断面形、覆土の堆積や層観察によりいくつかの形態に分類することが出来る。第25~27図に示した土壤はある程度分類を試みたものを各図にまとめたものである。ここでは土壤内部に完形又はそれに近い土器を多量に出土する土壤を先に記述し、のちに分類で示した土壤をまとめる。

SK100土壤(第21図、巻頭図版2、図版26)

SB 8 建物跡南面梁行部より南方7m、SA11板塀列中央西へ2m、72-58グリッドIII層上面で確認された隅丸方形を呈する土壤である。規模は南西163cm、南北165cmの不整円形を呈し、最深部は掘り込み面より35cmを測る。層序は比較的自然堆積を示しているがF₂層の灰色土層がレンズ状に堆積している。覆土は6層に分かれ、黒褐色粘質土を基調としているが、基本的には上部の堆積層と下部の推積層では若干の差異が生じている。これは土壤中位上部に灰色土が厚さ10cmにレンズ状に堆積していることから2回利用された土壤と考えられるが、出土土器の観察からはその差がない。近い時期での連続利用と考えられる。断面形は船底形を呈し、西側がやや大きく広がり段がつく。底面は凹凸があるものの、ほぼ平坦である。壁面は、底面より急激に立ち上がり、掘り込み部の北面側では、緩やかに大きく広がる。

本土壤内からの出土遺物は、土器片だけである。層の観察中に出土し、Fとしてとり上げた土器片は83片である。須恵器・赤焼土器片で下層に掘り進めると完形又はそれに近い土器が多量に出土してきた。このため、作業は各土器を柱状に残し、土壤の半截を行ない、層序毎の掘り下げを行なった。層は6層に分かれ、F₁層からは完形土器や半完形土器をのぞいて5点、F₂層から同じく2点、F₃層から同じく3点、F₄層で2点という少數の出土量である。遺物番号を登録して取り上げた土器は総数26点で、その内訳は須恵器3点、内黒土器5点、赤燒土器18点である(第35図72~77、第42図78~94、第42図96)。層序内での出土状況はF₃層中からの出土量が多く、壤底面には、96の須恵器片が敷いた状態で出土している。

本土壤の時期は出土土器により10世紀後半に位置付けされる。



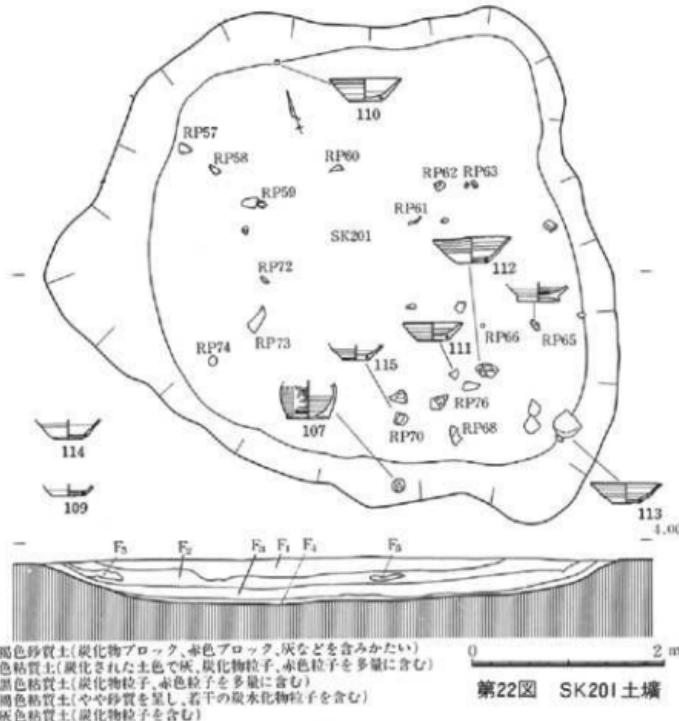
第21図 SK100土壤

SK201土壤(第22圖、圖版27)

精査B区やや中央北寄り、SB 8 建物跡の北方約10m70・71-49・50G 第III層上面で検出された土壌である。平面形は不整方形を呈し、断面形は船底形となる。本土壌の規模は、東西5mで、南北5.3m、掘り込み面からの深さ約45cmを測る。周壁はゆるやかに掘り込まれているが、西側でやや大きく広がる。底面はやや平坦である。

覆土は5層に分かれ、黒褐色粘質土を基調としており、本土壌確認時では周囲の第IV層青灰色粘質土層と明確に判別出来た。また各覆土層中には炭化物粒子や炭化物片が多量に含まれている。またF2層は黒色粘質土で、平面ではドーナツ状となり、炭化物粒子・灰・赤色粒子が多く含まれ、粘性が強い。

本土墳出土の遺物は土器だけである。遺物登録出来たものは図示したが(第43・44図)、その他は破片で出土している。総数307片を数え、その内訳は須恵器29片、黒色土器3片、内黒土師器29片、赤焼土器246片である。特徴的な土器を示せば、第44図107として図示した内外面に黑色化処理が施された小型の壺である。時期は他の土器とも対比して10世紀後半頃に比定される。



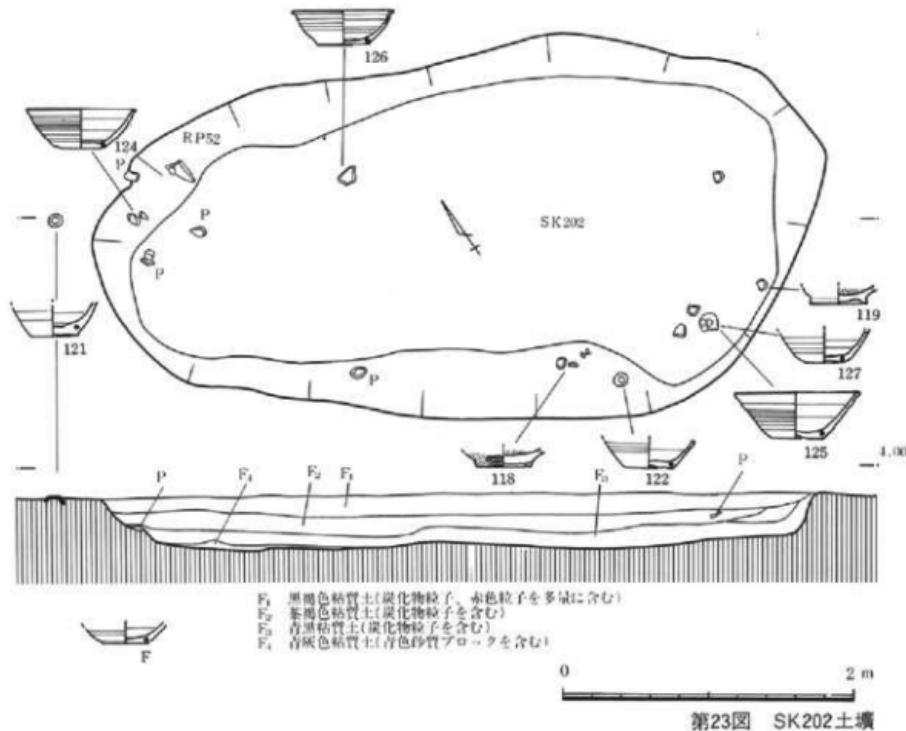
第22図 SK201 土壌

SK202土壤(第23・45図、図版29)

精査B区北部、SK201土壤の北側4m71・72-48G III層上面で検出された土壤である。平面形は東西に長い隋円形を呈し、断面形は船底形となる。本土壤の規模は、東西5.1m、南北2.5m、掘り込み面からの深さ約35cmを測る。周壁は急激に掘り込まれ、西半部ややすぼまる。底面は多少の起伏はあるがほぼ平坦といえる。

覆土は4層に分かれ、黒褐色粘質土を基調としている。覆土上層のF₁・F₂層中には炭化物粒子が多く含み、粘性が強い。

本土壤出土の遺物は土器だけである。遺物登録出来たものは図示したが(第45図)、その他は破片で出土している。総数299片を数え、その内訳は須恵器23片、黒色土器3片、内黒土師器14片、赤焼土器259片である。第45図に示したRP47の赤焼土器は塙底面密着で検出され、二個体重なって出土した。本土壤の時期は他の土器とも対比して平安時代10世紀後半頃に比定される。



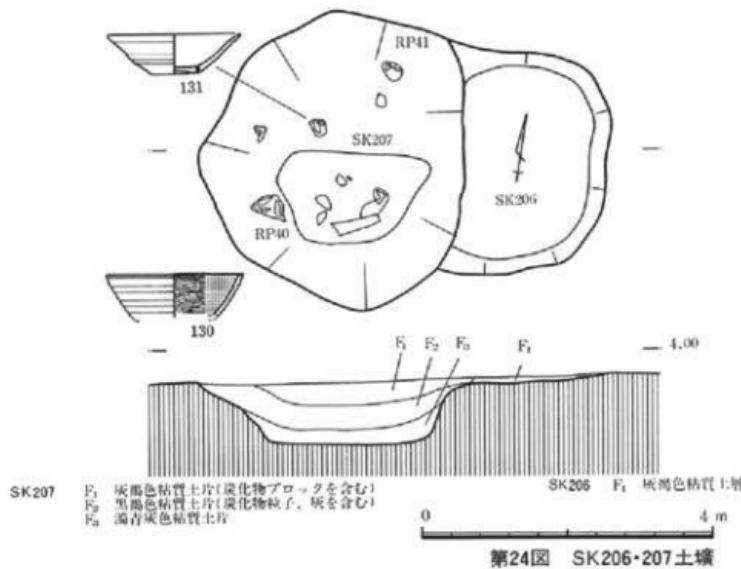
SK206・207土壤(第24図・図版206)

精査B区北部西側74-46・47G III層上面で検出された土壤である。両者は重複しておりSK207がSK206を切っている。

両者ともに平面形は不整の円形を呈する。ここではSK207から先に記述する。

SK207土壤は長径3.8m、短径3.6mを測るが、平面形では凹凸が多い不整の円形を呈している。断面形は台形を呈し、東側では急激に立ち上がり、西側ではややゆるやかに立ち上がり、中間で段を作る。底面は比較的平坦である。

覆土は褐色粘質土を基調とし、3層に分かれる。2層は炭化物粒子を含み、黒色に近く灰等を含んでいる。本土壤出土の遺物は土器だけである。破片資料のみで、図示出来たのは5片のみである。総数は12点である。本土壤の時期は出土土器により、10C後半に比定される。SK206土壤は、長径3m、約2.4mと考えられるが、西側をSK207によって切られている。平面形は方形に近い隅丸を呈している。断面形は深さ10cm程度の皿形を呈するが東側はゆるやかに立ち上がる。底面はやや起伏があるが平坦に近い。覆土の堆積は灰褐色粘質土の単一層である。覆土中より赤焼土器片8片が出土したが、いずれも細片で図示出来るものはない。時期は、本土壤をSK207が切っていることからSK207土壤より若干古い時期を当たられるが、平安時代10世紀後半でも古い時期としておきたい。



その他の土壙(第25～27図、図版30・31)

登録した土壙は92基を数え、登録遺物のある土壙については先述した。ここでは、それ以外の土壙のうち主なものについて、平面形、断面形、覆土の状況から分類し、順に記述する。

SK67土壙(第25図)

A区中央やや南西部、64・65—61G II層下部よりその掘り込みが始まる土壙である。平面形はヒョウタン形をした不整隋円形である。断面形は船底を呈するが、底面は起伏が激しい。覆土は単一層で出土遺物は須恵器20片、内黒土師器4片、赤焼土器20片である。いずれも細片で実測不能である。時期は不明である。

SK175土壙(第25図)

A区北西方58—57G III層上面で検出された不整方形を呈する土壙である。断面形はやや台形を呈する。覆土は2層に分かれるが、F₂は、東半部壁面に添って堆積している。底面はやや平坦である。土壙南西部壁面上部より須恵器坏が出土。時期は平安時代11世紀前半頃と考えられる。

SK25・28・44・58・60・76・78・84・85・89土壙(第26図)

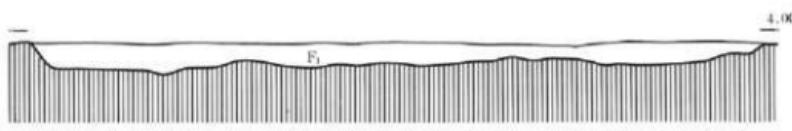
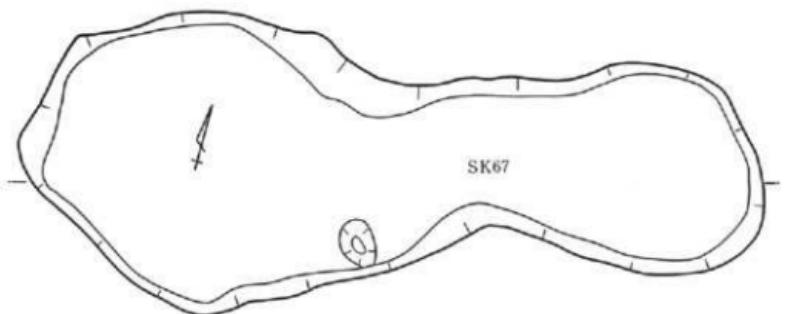
平面形が円形を呈す土壙はSK25・60である。SK25は径55cm、深さ30cm、断面形が台形、SK60は径90cm、深さ10cm、断面形が皿形を呈する土壙である。覆土は2層に分かれ、各層に青灰色粘土ブロックを含む。覆土中からの土器片は少ない。時期は不明である。

平面形が隅丸形を呈する土壙はSK78・85・58・44である。SK44は径1.1m、深さ30cm、断面形がカマボコ形を呈する。覆土は3層に分かれ、層中より5点の土器片が出土したが時期を断定出来るものは第35図70の須恵器坏である。平安時代9世紀後半に比定出来る。SK58は径約2m、深さ7cm、断面形が皿形を呈する。覆土は単一層であるが57片の土器片が出土している。しかし細片で時期を限定出来なかった。SK85は径1.2m、深さ18cm、断面形は船底形を呈する。覆土は単一層で土器細片が出土しただけである。SK78土壙は径1.2m、深さ15cm、断面形は船底形で覆土は単一層である。出土遺物はない。

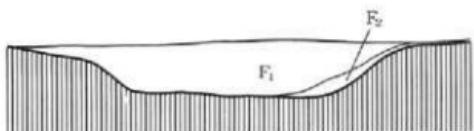
平面形が隋円形を呈するものはSK76土壙である。長径1.2m、短径65cm、深さ10cmを測る。断面形は船底形を呈し、覆土は単一層で土器片の出土はない。

平面形が長方形を呈するものはSK89土壙である。長辺1.1m、短辺70cm、深さ45cmを測る。断面形は台形である。覆土は3層に分れ、青灰色土を基調している。出土遺物はない。

以上土壙について述べたが、概略的に言えば、平面形・断面形は多種多様に存在する。しかし、覆土の観察から一概に平安時代として限定出来る土壙は少ない。更に検討が必要と考える。



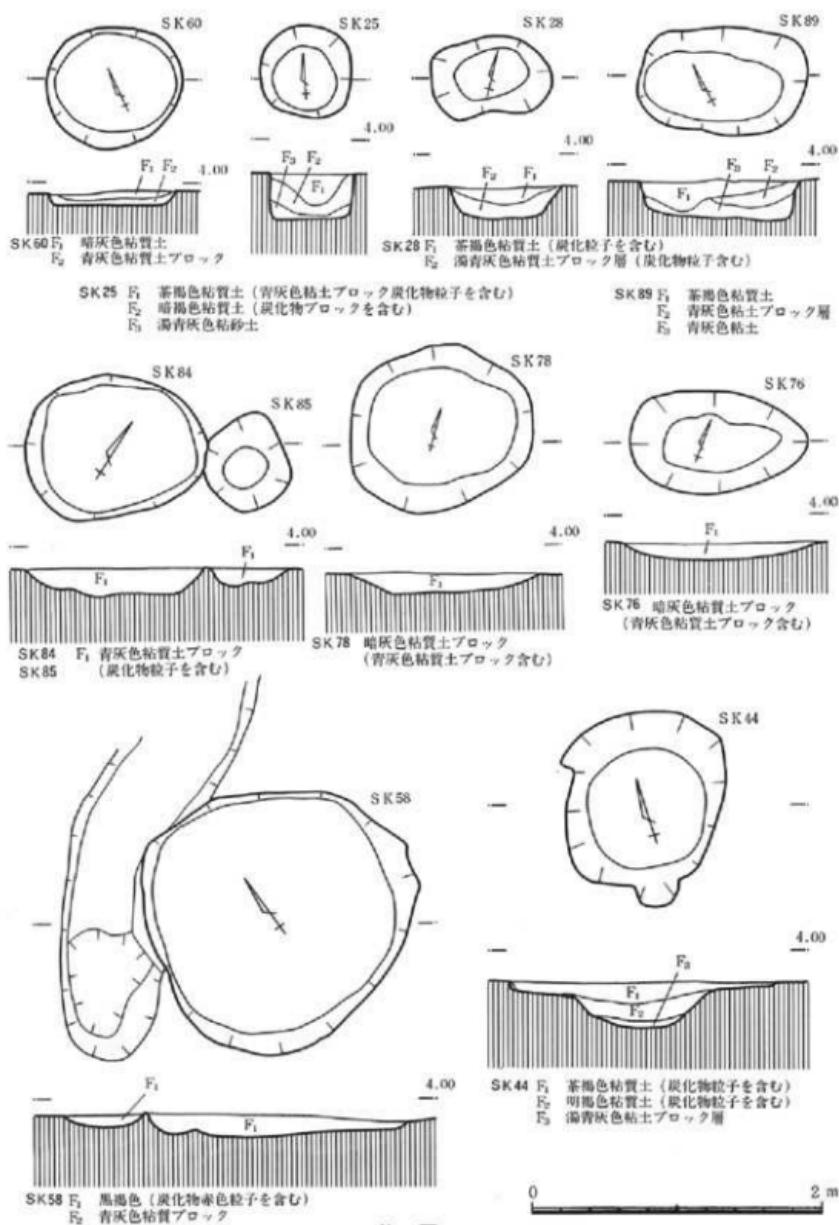
SK67 暗灰色粘質土ブロック
(青灰色粘質土ブロックを含む)



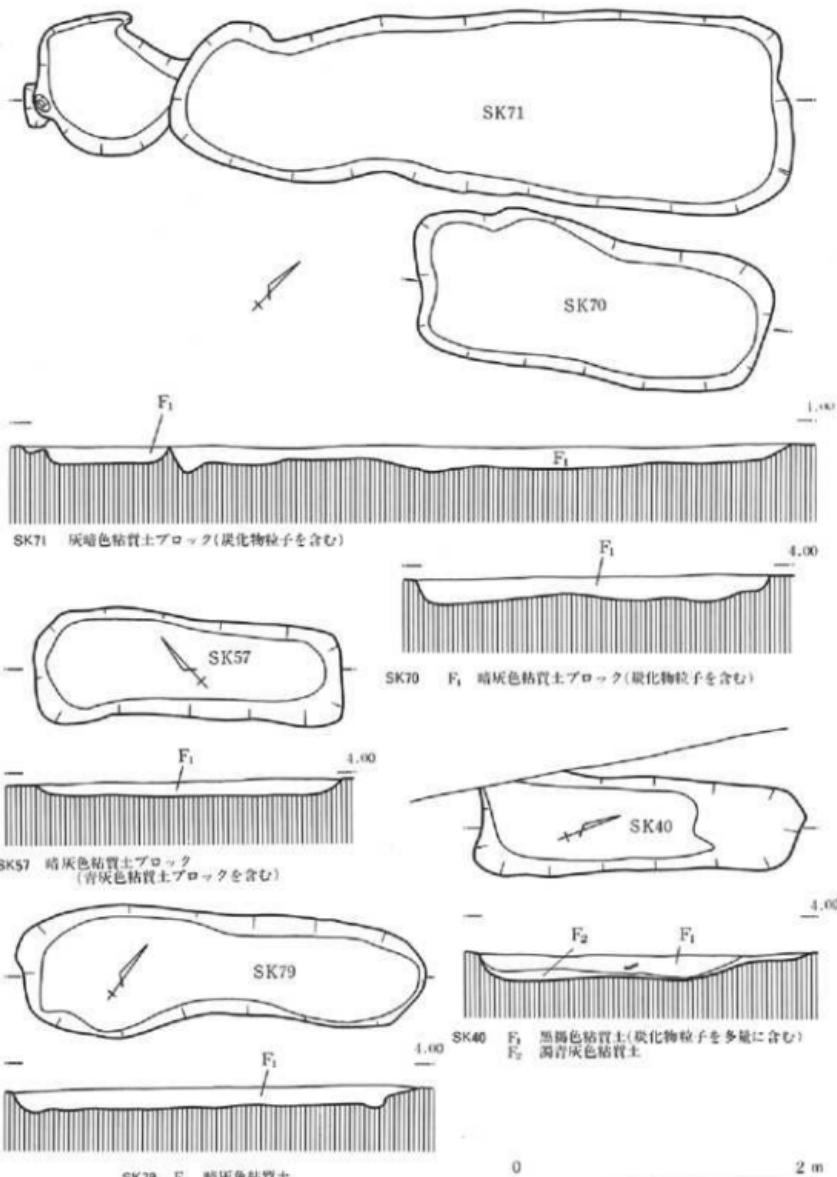
SK195 F₁ 黒色炭化粘質土塊ブロックを含む
F₂ 灰褐色粘質土

0 2 m

第25図 SK67・195土壤



第26図 SK 25・28・44・58・60・76・78・84・85・89土壤



第27図 SK40-57-70-71-79土壤

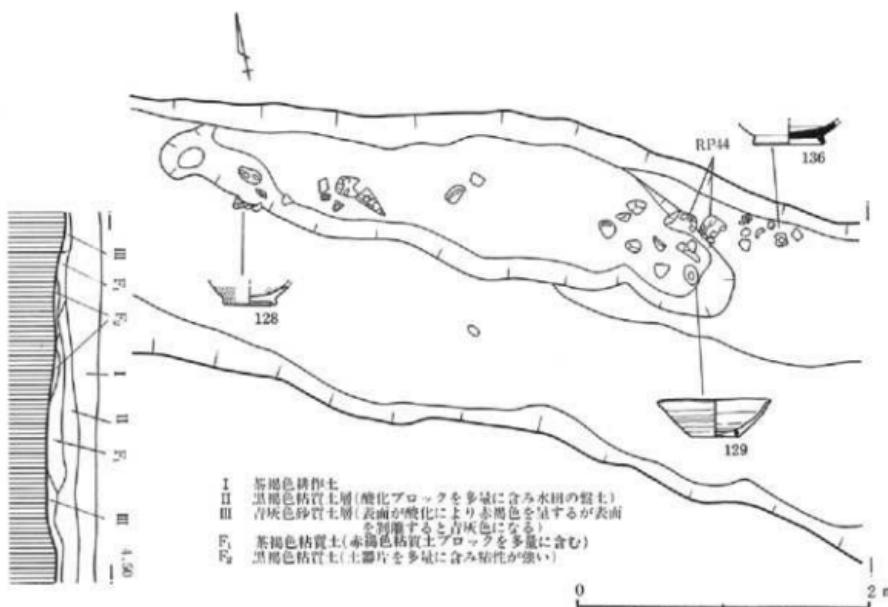
6 溝状遺構(第5・28図)

本遺跡で確認された溝状遺構は14条が遺構として記載登録された。主軸方向によって2つに分けることが出来る。一つは東西に走る溝状遺構と、南北に走る溝状遺構である。しかし磁北に合わせて掘り込まれたものではなく、旧地形という立地環境に合わせた溝状遺構である。このため主軸方向の計測は東西が左側で、南北が右側で測った。

SD205溝状遺構(第28図、図版32)

精査B区北東部73~75-48・49G III層上面で確認された東西に走る溝状遺構である。規模は、最大幅2m、最小幅1.5m、深さ10cmを測る。検出された長さは、精査区東端部から16mで、西端部に進むに従い徐々に立ち上がり、西端部では大きく広がる。壁面はIII層上面からゆるやかに掘り込まれ、底面は凹凸が激しい。主軸方向はN-65°-Wである。検出された東半部では底面が二段となり、部分的に深くなる。覆土は2層に分かれ、茶褐色粘質土を基調としている。

本溝状遺構からの出土遺物は土器片だけである。東半部で一部分二段となる部分からの出土が多く、第28図には主な土器の出土地点を記した。土器は、須恵器・内外面黒色土器、内黒土師器、赤焼土器である。総数170点で、測図出来た土器を第28図に示した。本遺構の時期は出土土器により、平安時代10世紀後葉に比定出来る。



SD91・92溝状遺構(第5図)

精査A・B区東端側に二条並行した状態で検出された南北に走る溝状遺構である。SD91は西側、SD92は東側で、約1.5～2m程離れて並行している。SD91の上端幅1.4～1.8m、深さ45cm、検出長67m、SD92は上端部1.2～1.8m、深さ40cm、検出長65mを測る。

覆土は3層に分かれ、F₁層が明褐色粘質土、F₂層茶褐色粘質土、F₃層が濁青灰色粘質土である。断面形は船底形を呈するが、SD91はやや底面が広くなる。壁面は凹凸が激しく、一部分広くなる部分もある。主軸方向はN-48°-Eを測り、第II章で述べた南西方向に延びる自然堤防の方向と一致する。本溝状遺構は後述するSD31・32溝状遺構が70-57・58G付近で直角に曲がり続く溝状遺構と考えられたが、この地域は後世に天地返し等の破壊を受けており、明確に判断することが出来なかつた。出土遺物は、SD91の底面より第46図135の須恵器蓋が出土している。本遺構の時期は平安時代10世紀後葉と考える。

SD90・98溝状遺構(第5図、図版32)

精査A区南部、59～63-62～65G IV層上面で確認された東西に走る溝状遺構である。SD90・98共に重複関係にあり、その覆土の観察からSD98が切っていることが判断された。SD90の上端幅は1～1.5m、深さ15cm、SD98は上端部25～35cm、深さ25cm、両者の検出長26mを測る。主軸方向はN-58°-Wである。

覆土はSD90が茶褐色粘質土の単一層で、SD98は3層に分かれ。断面形はSD90が船底形、SD90がU字形を呈している。SD98のF₁層は炭化物粒子を含む茶褐色粘質土、F₂層が黒褐色粘質土で土器の細片を含む。F₃層は濁青灰色砂質土である。SD90からの出土遺物はなく、SD98の出土土器も細片のため測図出来なかつた。土器片の観察では、内黒土器の高台付坏片が出土しており、時期は平安時代11世紀前半頃と考えられる。

SD216溝状遺構(第5図)

精査B区中央部、SAに柱穴列と、SB 8 建物跡の中間に検出された東西に走る溝状遺構である。上端部幅40cm、深さ25cm、検出長21mを測る。主軸方向はN-50°-Wである。覆土は2層に分かれ、F₁層は茶褐色粘質土、F₂層は明褐色粘質土である。断面形はU字形を呈し、底面は比較的平坦である。出土遺物は検出されなかつた。時期は不明である。

SD31・32溝状遺跡(第5図、図版32)

精査A・B区に統いて検出された東西に走る溝状遺構である。断面形は船底形を呈し、底面は凸凹が激しい。共に重複関係があり、その覆土の観察からSD31がやや新しい。SD31の上端部幅1.4m、深さ10cm、SD32の上端部幅1.2m、深さ7cm、主軸方向をN-52°-Wを測る。覆土は明褐色粘質土の単一層で、SD32には炭化物粒子を含む。SD31底面より、赤焼土器壺片(第48図138)、土鍾(同143・144)が出土した。時期は平安時代11世紀前半頃である。

IV 出土遺物

1 遺物の分布

南興野遺跡で出土した遺物は土器が整理箱にして48箱、木製品が5箱、井戸枠組44枚、土製品・金属製品などである。遺物はA区精査区域から多く出土しており、遺構の分布状況と軌を一にする。本章では遺構内出土の遺物を中心に記述し、包含層出土のものについては特異な須恵器の硯、土罐、鉄滓を図化し第47図にあげた。その他のものについては点数を数えただけで、大部分は割愛した。

調査で発見された土器片は総計14,668片を数え、その内訳は土師器6片、須恵器3,713片、黒色土器69片、内黒土器502片、赤焼土器10,017片、中近世陶磁器245片、土製品・石製品・金属製品29点、その他自然遺物である。出土土器の時期的な特徴として古代期の出土量が圧倒的に多い。しかし検出遺構では古代と中世期の遺構の判別が土色や覆土の状態では困難であった。器種では古代期を示す土器が壺・壺・壺であり、中・近世期では、壺・天目茶碗等である。

遺跡全体における分布状況では、遺跡南半部に集中する傾向を示し、精査A区とした地区である。遺構の集中度と軌を一にするが、精査区域の北東部でも出土量は多い。しかし北東部では遺構の分布が確認出来なかった。耕作整理で遺構が破壊を受けていることもあり、土器片が散乱したものと考えられる。木製品では井戸跡内より出土した斎串や、包含層出土の漆塗り化粧箱がある。金属製品では鉄滓の他、古銭・鉢等がある。その他では植物の種子類も出土しており、古代の生活を考える資料になる。

表2 出土遺物点数表

| 出土地点 (遺構内) | 土師器 | 須恵器 | 黑色土器 | 内黒土器 | 赤焼土器 | 磁器 | 中世陶器 | 中磁器 | 近世陶器 | 近世磁器 | 土製品 | 石製品 | 木製品 | 金属製品 | 自然遺物 | その他 | 計 |
|---------------|-----|-------|------|------|--------|----|------|-----|------|------|-----|-----|-----|------|------|-----|--------|
| S B | | 48 | 6 | 28 | 433 | | | | | | | | | | 1 | | 516 |
| S A | | 2 | 1 | | 31 | | | | | | | | | | | | 34 |
| S E | 3 | 127 | 15 | 42 | 841 | | | | | | | | | 1 | | | 1,029 |
| S K | 1 | 326 | 10 | 92 | 1,405 | | 5 | 1 | 1 | 2 | | 1 | 1 | | | 3 | 1,848 |
| S D | | 408 | 11 | 74 | 1,073 | | 7 | | 5 | 5 | | | | 2 | | 3 | 1,588 |
| S X | | 164 | | 11 | 421 | | | | | | | | | | | | 596 |
| 小計 | 4 | 1,075 | 43 | 247 | 4,304 | | 12 | 1 | 6 | 7 | | 1 | 2 | 3 | | 6 | 5,611 |
| 包含層(Ⅱ層) | | 478 | 3 | 53 | 860 | 2 | 14 | 3 | 6 | 4 | 1 | | 1 | 1 | 2 | 1 | 1,429 |
| 包含層(Ⅲ層) | 1 | 1,458 | 17 | 145 | 3,302 | 2 | 40 | 2 | 31 | 24 | 5 | 1 | 2 | 2 | 10 | 2 | 4,989 |
| TP1~350 | | 562 | 4 | 37 | 1,255 | 2 | 13 | 8 | 22 | 21 | | 1 | 1 | 3 | 48 | 5 | 2,052 |
| X-O | 1 | 140 | 2 | 20 | 426 | | 11 | 8 | 1 | 5 | | 2 | 2 | 1 | 12 | 1 | 632 |
| 小計 | 2 | 2,638 | 26 | 255 | 5,813 | 6 | 78 | 21 | 60 | 54 | 6 | 4 | 6 | 7 | 72 | 9 | 9,057 |
| 合計 | 6 | 3,713 | 69 | 502 | 10,817 | 6 | 90 | 22 | 66 | 61 | 6 | 5 | 8 | 10 | 72 | 15 | 14,668 |

2 遺構内出土遺物

南興野遺跡の今次の調査では、SB 8 建物跡と 4 基の井戸跡・SK201等の土壌および SD205 から遺物が多く出土した。以下遺構毎にその概要と推定時期について述べる。

(1) 建物跡出土遺物(第29図、図版34・35、表3)

10棟の建物跡のうち、SB19建物跡を除く9棟の建物跡の柱穴掘り方の埋土から、遺物が出土している。ほとんどが土器であるが、SB 8 建物跡EB295柱穴から鉄製鉗が1点出土している。

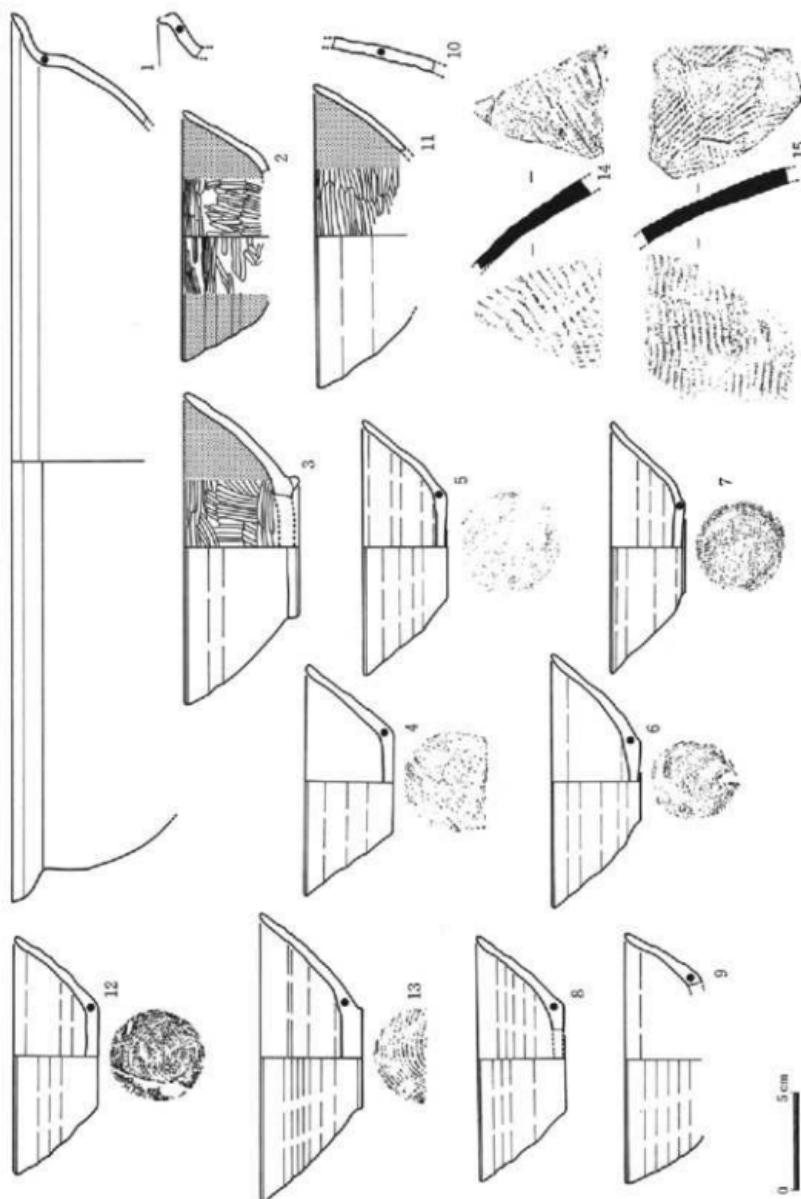
SB 8 建物跡からは、総計333片ともっとも多く土器が出土している。赤焼土器の壺(29図4～9・12・13)と甕が大半を占め、これに少量の黒色処理を施した土師器壺(2・3・11)と須恵器が伴出する。赤焼土器壺は底径の小さいものが多く、これに軽い台の付く土師器壺が伴うことなどから、後述するSE203井戸跡出土の土器群と共通する。時期は、平安時代10世紀後葉頃と推定される。SB 3・5・7 建物跡もほぼ同時期である。

SB 1 建物跡からは、赤焼土器壺(10)・壺と須恵器壺・甕などが出土している。口縁端がやや内傾する壺などの存在から、時期は平安時代9世紀後半頃と推定される。SB 9 建物跡もこれに類似した壺やヘラ切りの須恵器壺が出ており、ほぼ同時期と考えられる。

SB 2・4・6 建物跡は、出土土器が2～3片と極端に少ないため、時期を明確に限定することは困難である。ただし須恵器壺の存在などから平安時代9～10世紀に属することは確かで、第29図1の赤焼土器壺などは9世紀前半まで遡り得る。

表3 建物跡出土土器観察表

| 序号 | 遺物番号 | 器種 | 計測値(cm/m) | | | 色調 | 胎土 | 施成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土位置 |
|----|------|----------------------|-----------|----|--------|-----------------------|-----|----|-------|------------------------|---------|
| | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | |
| 29 | 1 | 赤燒土器 壺 | (45) | | | Hue 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | EB181 F |
| | 2 | 黑色土器 高台 付 壺 | (110) | | 46 | 5Y3/1 オーブル黒色 | 緻密 | 良 | | 内外面→ミガキ後 黒色化 | EB295 F |
| | 3 | 内墨土器 高台 付 壺 | (100) | 76 | 59 | 5Y8/4 淡緑色 | 粗砂混 | 良 | | 内面ミガキ→黒色化 | EB295 F |
| | 4 | 壺 | 119 | 52 | | Hue 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EB295 F |
| | 5 | 壺 | (122) | 56 | 43 | Hue 10YR8/1 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EB295 F |
| | 6 | 赤燒土器 壺 | 130 | 42 | 46 | Hue 7.5YR8/3 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ナデ | EB295 F |
| | 7 | 壺 | (110) | 40 | 48 | Hue 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EB295 F |
| | 8 | 壺 | (125) | 56 | 44 | Hue 7.5YR8/4 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EB295 F |
| | 9 | 壺 | 128 | | 48 | 7.5YR8/3 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | EB295 F |
| | 10 | 甕 | | | | Hue 7.5YR8/4 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | | タタキ | EB111 F |
| 30 | 11 | 内墨土器 壺 | 156 | | (46.5) | 5YR7/4 に赤い緑色 | 粗砂混 | 良 | | 内面ミガキ→黒色化 | EB296 F |
| | 12 | 赤燒土器 壺 | (127) | 52 | 43 | 7.5YR7/3 に赤い緑色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | EB296 F |
| | 13 | 壺 | 149 | 52 | 52 | Hue 7.5YR8/4 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EB296 F |
| | 14 | 須恵器 甕 | | | | 2.5Y7/ 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 外側 素継状叩き 内面 同タケ | EB299 F |
| | 15 | 甕 | | | | Hue 5Y5/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 内外面 格子目状叩き | EB272 F |
| 31 | 16 | 赤燒土器 甕 | | | | Hue 7.5YR8/4 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | | 外側 斧子目状叩き 内面 素継状アゲ瓶 | EB98 F |
| | 17 | 壺 | (133) | 51 | 46.5 | Hue 7.5YMR8/3 淡黄緑色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | EP36 F |



井戸跡出土の遺物(第30図～第39図、表4・5、図版35～40)

南興野遺跡の今次の調査では、井戸跡が精査区中央から3基、同東端から1基の計4基が検出されている。いづれも重複関係は認められず、単独で検出されたものである。本節では、各井戸跡出土の遺物を順に記述する。

SE54井戸跡(第30図) 本井戸跡の埋土は、掘り方部も含めて12層に分けられる。うち埋土1～6層が掘り方に伴うもので、①～⑥層が井枠内の覆土である。

遺物はF1～4およびF②・④層から計134点出土している。内訳は須恵器68点、赤焼土器53点、内面黒色化処理の土師器7点、製塙土器1点で、その他に斎串4点と加工を施した桜皮1点がある。

第30図18はF②層から出土した須恵器高台付坏で、坏部下半が丸味を有し、底部は回転切り離しのち墨書きが施されている。19はF④層出土の須恵器坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切り手法による。20はF2層出土の須恵器高台坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。F④層からはこの他須恵器坏と赤焼土器壺の破片が少量出土している。

井戸跡の時期は、20が古い様相を示すものの、掘り方およびF④層の土器群全体としては平安時代9世紀後半頃と想定される。

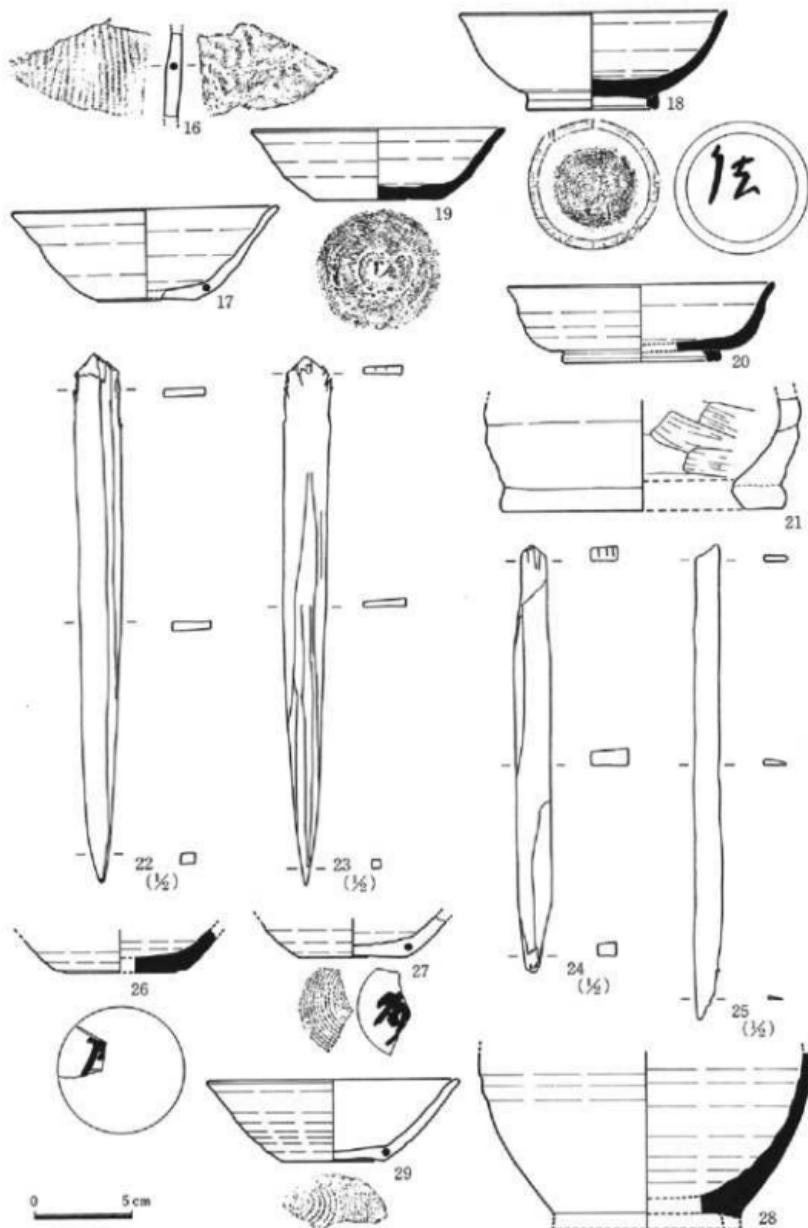
21はF4層出土の製塙土器下端部で、輪積み痕が明瞭に認められる。もう一つ注目されるものは、F④およびF4層から出土した4点の斎串である。大きさは幅1.5cm、長さ18cm前後の中形のもので、2点の主頭部に縦方向からの切り込みが認められる。特に掘り方F4層から出土した23～25の斎串は、井戸に係る祭祀が井戸構築中に行なわれたことを示唆するもので貴重である。

SE61井戸跡(第30図) 本井戸跡は井枠がほとんど取り除かれているもので、埋土は8層に分けられる。掘り方と井枠内の埋土の区別はなしえなかった。

遺物はF1・3・4・7層および底面から42点出土している。内訳は須恵器19点、赤焼土器21点、土師器2点である。

第30図26はF4層から出土した須恵器坏で、底部はヘラ切り離しによる。また底部に墨書きが一部認められる。27は同じF4層出土の赤焼土器坏で、回転糸切り離しの底部に墨書きが一部認められる。28はF3層出土の須恵器壺、29は底面出土の赤焼土器坏で、共に底部切り離し後の再調整はみられない。

本井戸跡の時期は、出土遺物が少なく断定できないが、底面出土の他の土器片も加味して、平安時代10世紀中葉頃と推定される。



第30図 井戸跡出土土器・斎串(1)

SE63井戸跡(第31～33図) 本井戸跡の埋土は、掘り方部も含めて12層に分けられる。うちF 1～F 6層が井枠内の覆土、F 7～F 12層が掘り方に伴うと思われるものである。

遺物は、F 1～3・5・6・10層から計72点出土している。内訳は須恵器17点、赤焼土器41点、土師器2点、斎串12点となる。

第31図31は、F 2層から出土した赤焼土器壺で、口径に比し底径が小さく、底部は回転糸切り無調整である。32はF 6層出土の赤焼土器甕で、口縁部端がほぼ垂直に立ち上がる。33は同じF 6層出土の赤焼土器壺で、器壁が厚みを有し、口縁端がほぼ垂直に立ち上がる。F 6層からは、この他に、須恵器壺・壺・甕も出土しており、壺の底部切り離しは回転糸切りとヘラ切りの二種がみられる。

井戸跡の時期は、F 6層出土の土器群からみて、平安時代10世紀中葉頃と推定され、SE61井戸跡とほぼ同時期にあたる。

なお、本井戸跡からは斎串が12点出土している(35～46)。すべて井枠内の覆土から出土したもので、層位は38がF 4層、37・39・40がF 5層、その他がF 6層である。特にF 6層出土の斎串9点は密集した状態で検出されている。

大きさは、長さが140cm前後のものと220cm前後のものの2種があり、肩部にくびれを有するものも2点認められる。また主頭部にはほとんど縦方向からの切り込みがみられる。これらの斎串は、出土層位からみて井戸の使用中ないし廃絶直前の時期に祓いに係る祭祀に用いられたものであろう。

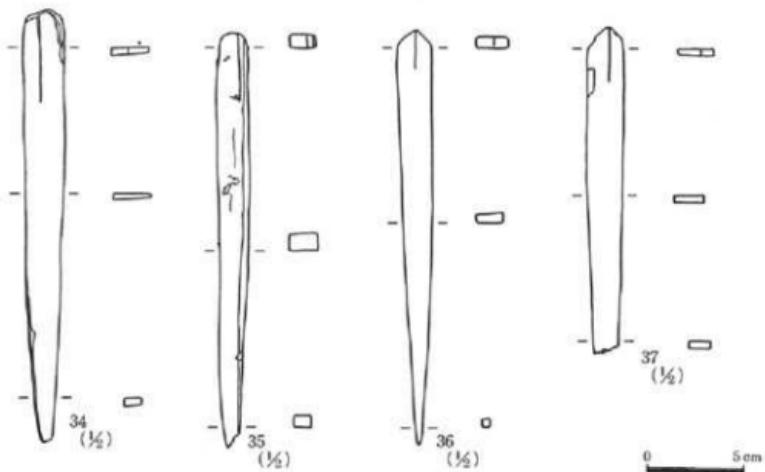
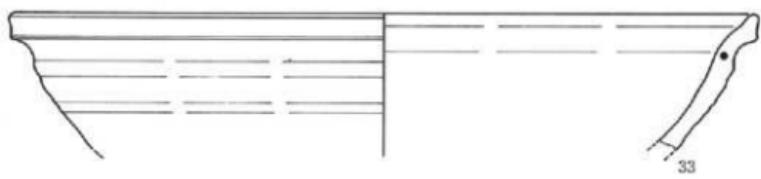
SE203井戸跡(第33～35図) 本井戸跡の埋土は、掘り方も含めて8層に分けられる。うちF 1～F 5層が掘り方に伴うもので、F ①～F ③層が井戸枠内の覆土である。

遺物は、F 1・F 4およびF ①～F ③層から計699点出土しており、4基の井戸跡の中ではもっとも出土量が多い。内訳は、須恵器21点、黒色処理を施した土師器壺44点、赤焼土器630点で、その他に斎串が3点と種子が1点出土している。

第34図53・55・56は、F 1層から出土した内黒の土師器壺で、低い台を有する。57はF ②層出土の内黒土師器壺で、体部外面に「有」の墨書銘を有する。第33図47は、井枠内底面から60の赤焼土器壺と共に出土した内黒土師器壺で、底部は回転糸切り離しのち軽いナデ調整が施されている。第34図57は、F 4層出土の内黒土師器壺で、底部は回転糸切り離しによる。

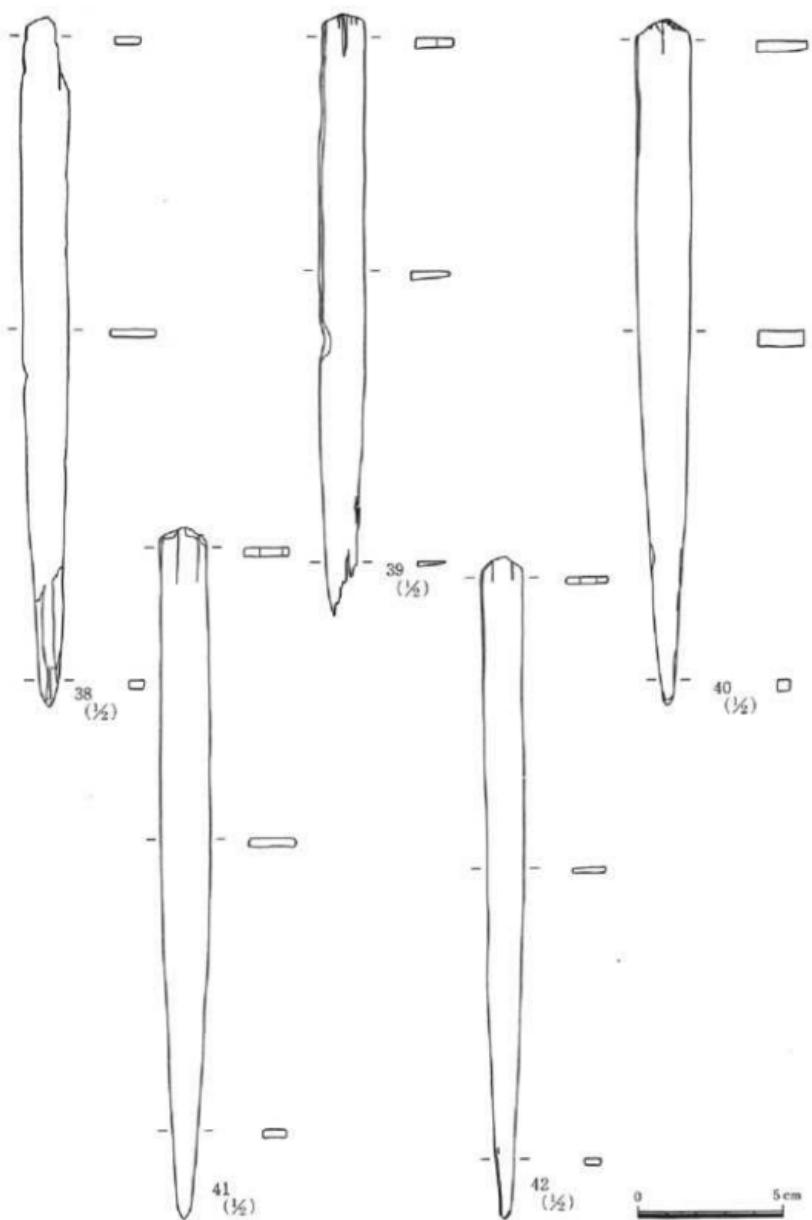
第33図50は、F 4層出土の高台が付くと思われる須恵器壺で、口径に比して器高が高い。須恵器にはこの他壺(第33図48、第34図52)・甕(第33図51)・蓋などの器種がある。

第34図58～63は赤焼土器壺で、出土層位は、62・63がF 2層、59がF 4層、58・61がF

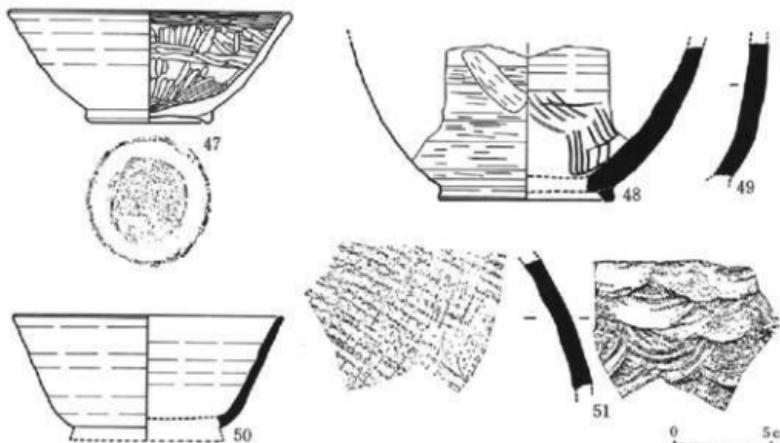
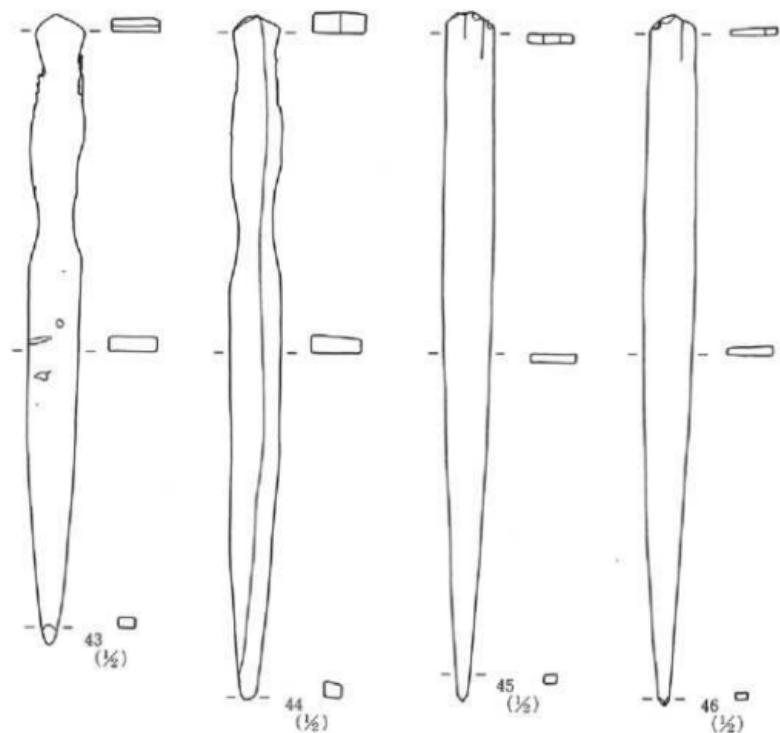


0 5 cm

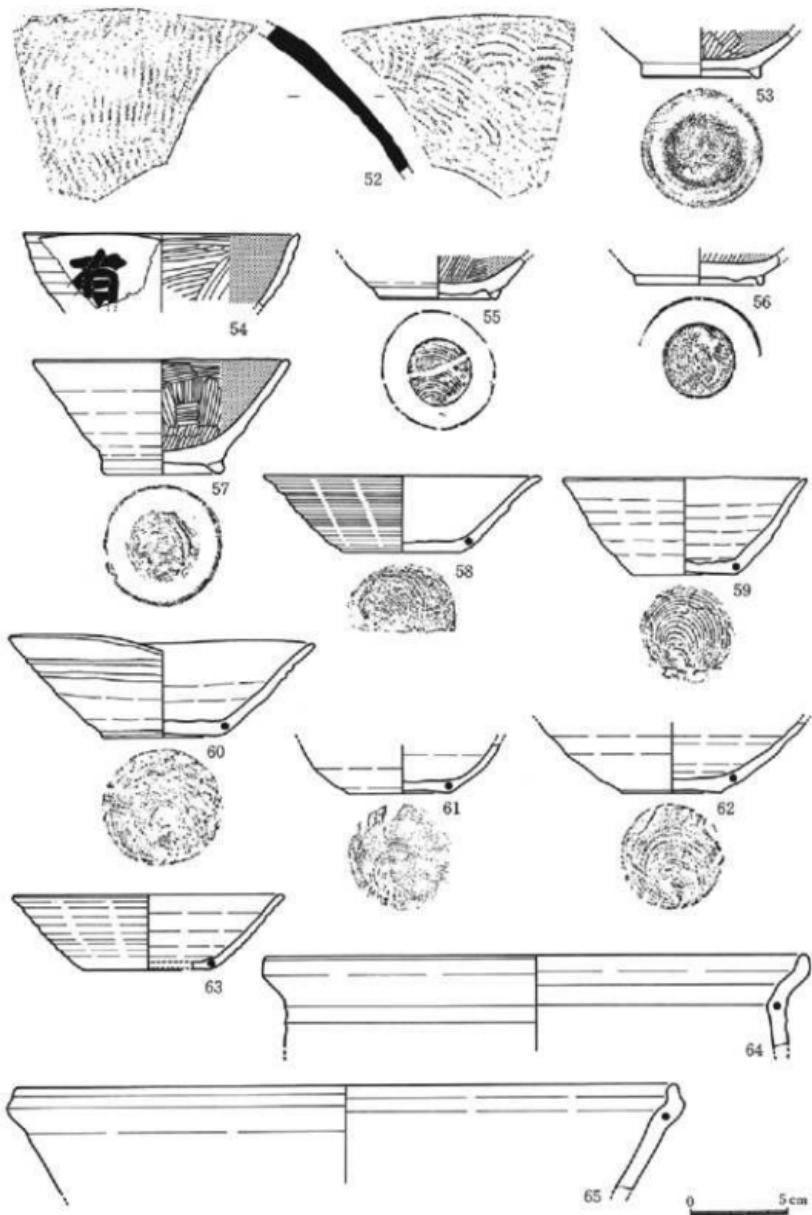
第31図 井戸跡出土土器・斎率(2)



第32図 井戸跡出土斎串



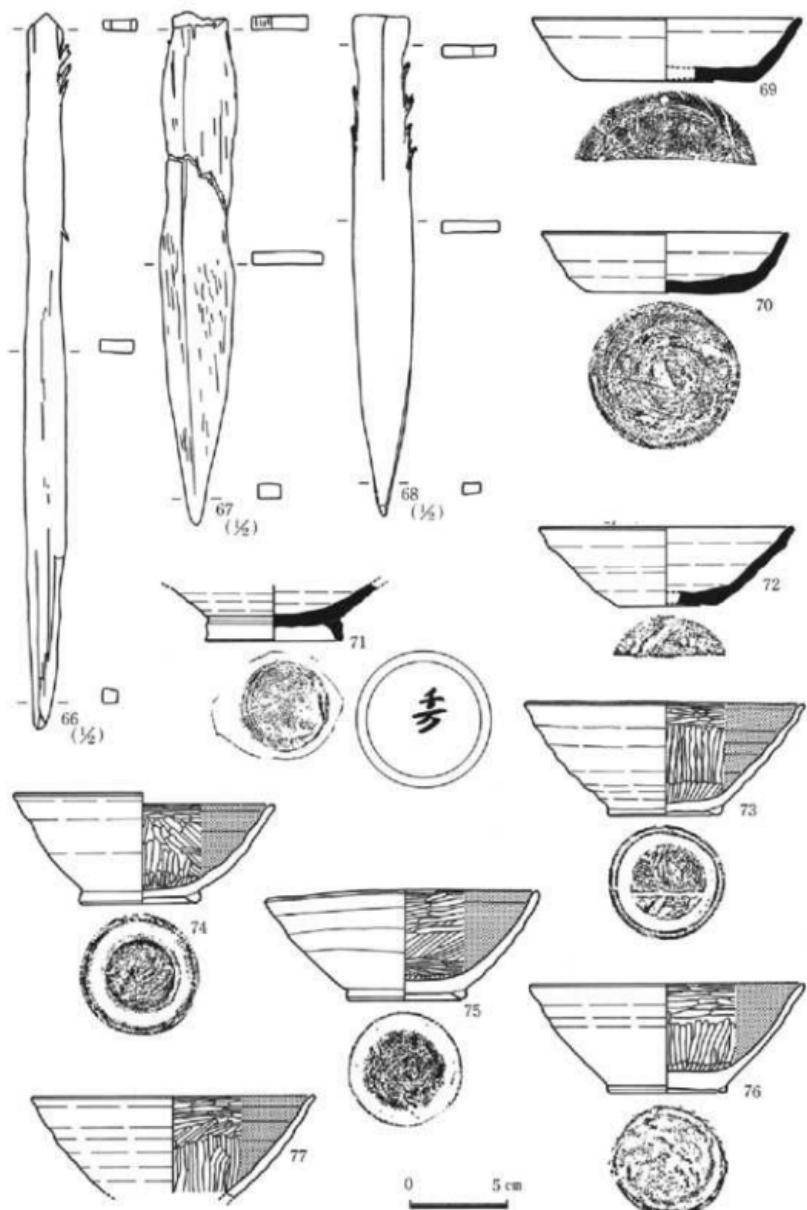
第33図 井戸跡出土土器・斎串(3)



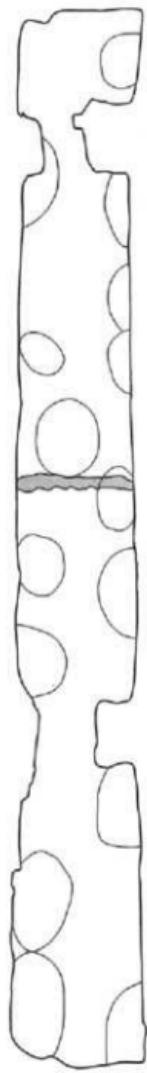
第34図 井戸跡出土土器

表4 井戸跡出土遺物観察表(1)

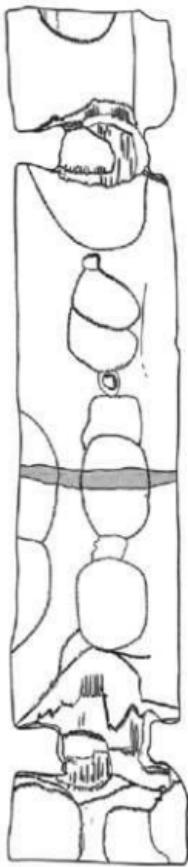
| 埠固 | 遺物 番号 | 器種 | 計測値(cm/m) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土地点 層 | |
|-----|----------|-------------|------------------|-----------------------|------------|-----------------------|-------------------------------------|----------------------------------|------------------|-------------------------|-----------------------------|----------------------|
| | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | |
| 第1回 | 18 | 須恵器 製塙土器 | 高台付 付 | 137 | 68 | 49 | 10Y8/1 灰白色 | 粗砂混 | 魚 | 回転糸切り | 無審土器 銘不明 ロクロ ナデ | SE54 F ₂ |
| | 19 | | 坪 | (130) | (50) | 37 | 5G8/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | ヘラ切り | ロクロ | SE54 F ₂ |
| | 20 | | 高台付 付 | (130) | (50) | 39 | Hue N6/ 灰色 | 粗砂混 | 堅 | 回転ヘラ切り | ロクロ 付高台 | SE54 F ₂ |
| | 21 | | バタフ 形容器 | (140) | (50) | 5YR8/4 | 粗砂混 | 良 | | | 粘土埴横上げナデ 内面 ヘラナデ | SE54 F ₂ |
| | 22 | | 壺 | (幅×奥幅×高さ) 182×15×3 | | | 完形 | 圭頭状で左右に削り切れがある。削先状である。 切り込みなし | | | | SE54 F ₂ |
| 第2回 | 23 | 木製品 | 壺 | 180×15×2 | 完形 | | 削先状で切り込み15mm左右に削り切りあり | | | | SE54 F ₂ | |
| | 24 | | 壺 | 145×12×5 | 完形 | | 削先状で切り込みなし | | | | SE54 F ₂ | |
| | 25 | | 壺 | 162×8×2 | 上端欠 側面欠 | | 左右側面を欠損 肅作時削り残りか | | | | SE54 F ₂ | |
| | 26 | | 坪 | (50) | (20) | 10Y8/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | 回転ヘラ切り | 墨書き土器 銘不明 | SE61 F ₂ | |
| | 27 | | 赤燒土器 | 坪 | (50) | 7.5YR8/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | 墨書き土器 銘不明 | SE61 F ₂ | |
| 第3回 | 28 | 須恵器 赤燒土器 | 壺 | | | Hue N6/ 灰色 | 緻密 | 堅 | | ロクロ痕 | SE61 F ₂ | |
| | 29 | | JF | 130 | 52 | 41.5 | Hue 2.5 8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE61 蔵下層 |
| | 30 | | 須恵器 | 壺 | | | N7/0 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 格子目風アテ 格子目たたき | SE62 蔵下層 |
| | 31 | | 壺 | (130) | (50) | 52 | Hue 5YR7/6 淡褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE63 F ₂ |
| | 32 | | 壺 | 182 | | | Hue 2.5Y8/3 淡黄色 | 緻密 | 堅 | | ロクロ 有段 | SE63 F ₂ |
| 第4回 | 33 | 赤燒土器 | 壺 | (200) | (50) | | Hue 2.5YR6/6 | 粗砂混 | 堅 | | ロクロ | SE63 F ₂ |
| | 34 | | 壺 | (幅×奥幅×高さ) 148×14×2 | | | 完形 | 削先状で切り込み28mm | | | | SE64 F ₂ |
| | 35 | | 壺 | 142×11×5 | 完形 | | 削先状で切り込み29mm | | | | SE63 F ₂ RW19 | |
| | 36 | | 壺 | 141×12×3 | 完形 | | 削先状で切り込み19mm先端をするとぐるる | | | | SE63 F ₂ RW23 | |
| | 37 | | 壺 | 110×12×3 | 下端欠 | | 削先状で切り込み28mm下端部欠損 | | | | SE63 F ₂ RW5 | |
| 第5回 | 38 | 本製品 | 壺 | 237×16×2 | 上端欠 | | 削先状で切り込み55mm | | | | SE63 F ₂ RW4 | |
| | 39 | | 壺 | 206×16×3 | 下端欠 | | 削先状で切り込み27mm | | | | SE63 F ₂ RW7 | |
| | 40 | | 壺 | 235×18×5 | 完形 | | 削先状で削り切り142mm切り込み22mm | | | | SE63 F ₂ RW6 | |
| | 41 | | 壺 | 236×17×3 | 完形 | | 削先状で先端に2ヶ所切り込みがある。切り込み 18mmと15mm | | | | SE63 F ₂ RW17 | |
| | 42 | | 壺 | 228×14×2 | 完形 | | 削先状で先端に2ヶ所切り込みがある。切り込み 6mmと7mm | | | | SE63 F ₂ RW18 | |
| 第6回 | 43 | 本製品 | 壺 | 218×18×5 | 完形 | | 圭頭状で削り切り129mmに削り切れ | | | | SE63 F ₂ RW20 | |
| | 44 | | 壺 | 235×17×6 | 完形 | | 削先状で削り切り102mm | | | | SE63 F ₂ RW21 | |
| | 45 | | 壺 | 226×17×3 | 完形 | | 削先状で2本の切り込み9mmと14mm | | | | SE63 F ₂ RW22 | |
| | 46 | | 壺 | 237×17×3 | 完形 | | 削先状で切り込み18mm | | | | SE63 F ₂ RW26 | |
| | 47 | | 土師器 高台付 | 146 | 65 | 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ ナデスス付 1寸キ 黒色處理なし | SE203 No21 | |
| 第7回 | 48 | 須恵器 | 壺 | | | Hue 10YR7/3 にぼい黄褐色 | | 堅 | | ロクロ 内面ヘラ削り | SE203 F ₂ | |
| | 49 | | 壺 | | | Hue 5R6/1 赤灰色 | 緻密 | 堅 | | ロクロ 内面 | SE203 No11 | |
| | 50 | | 高台付 | (130) | | Hue 7.5YR6/1 褐灰色 | 緻密 | 堅 | | ロクロ | SE203 F ₂ | |
| | 51 | | 壺 | | | 7/ 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 外壁 格子目状 明き 内壁 黄褐色アテ | SE203 No7 | |
| | 52 | | 須恵器 土師器 内黑 | 壺 | | 2.5YR5/2 灰褐色 | 緻密 | 堅 | | 外壁 格子目状 明き 内壁 黑色處理アテ | SE203 F ₂ | |
| 第8回 | 53 | 内黒土器 | 高台付 | | 60 | Hue 10Y6/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 切削し不明 内面付付1寸キ | ロクロ ミガキ 黑色處理 | SE203 F ₂ | |
| | 54 | | 壺 | (10) | | | 粗砂混 | 堅 | | ロクロ ミガキ 黑色處理 晶面跡「有」カ | SE203 F ₂ | |
| | 55 | | 高台付 | | 60 | (20) | 10YR8/1 灰白色 | 緻密 | 良 | 内面刮痕 1寸キ 回転糸切り | 付高台ナデ | SE203 F ₁ |
| | 56 | | 土師器 内黒 高台付 | | 60 | Hue 7.5YR7/3 にぼい褐色 | 緻密 | 堅 | 回転糸切り | 付高台 ナデ | SE203 F ₁ | |



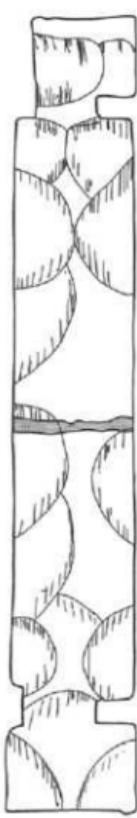
第35図 井戸跡出土斎奉・土壙出土土器(1)
— 55 —



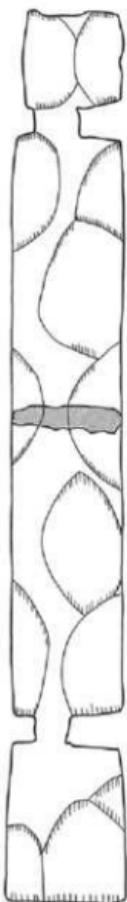
西上段井筋一段目



西上段井筋二段目



西上段井筋三段目

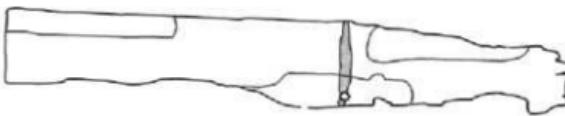


西上段井筋四段目

西段井中②

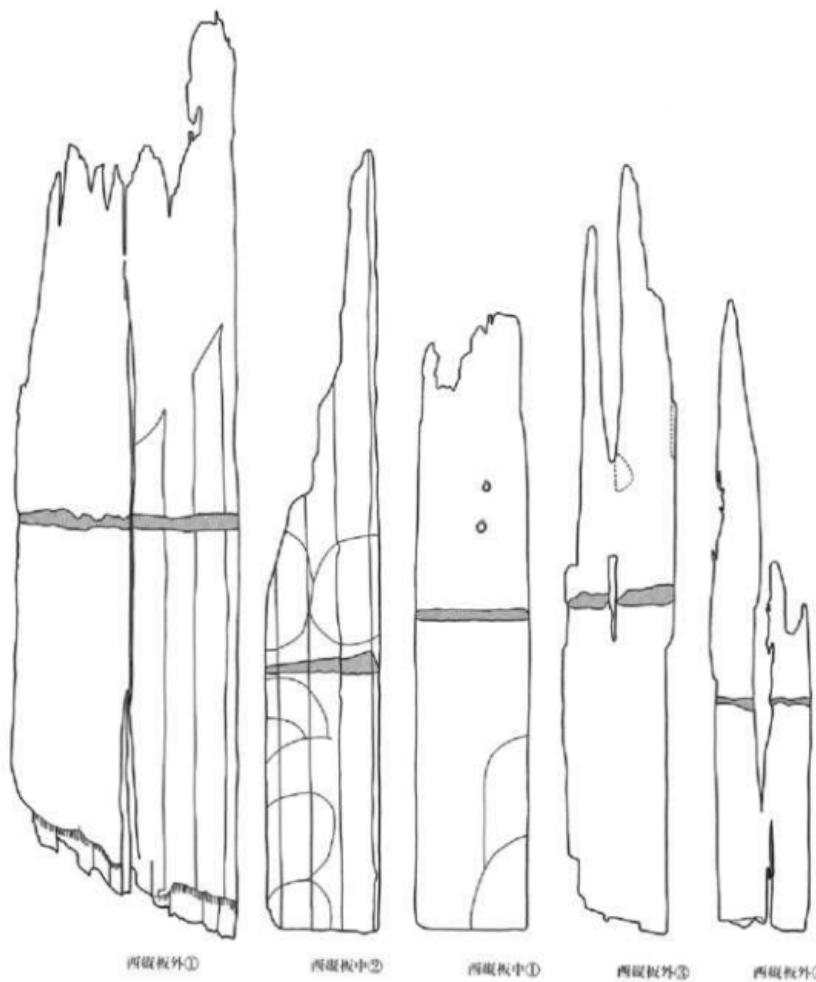


西段井中③



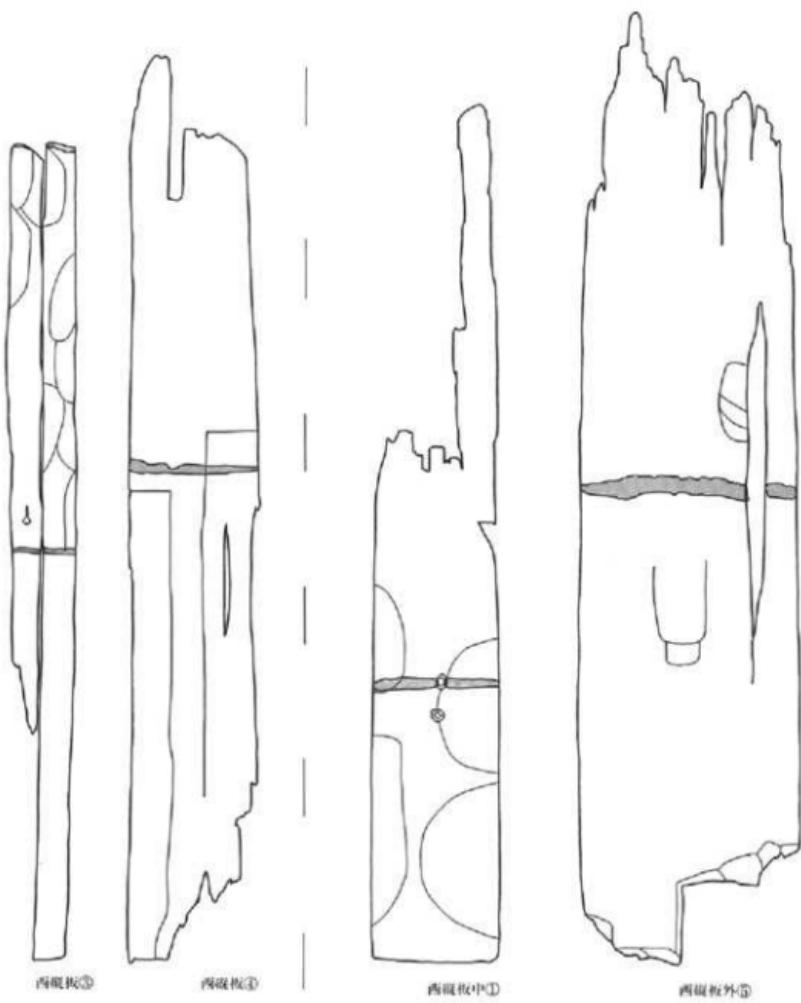
西段井中④

第36図 SE54井戸跡・井戸枠・矢板(1)
0 20cm



0 20cm

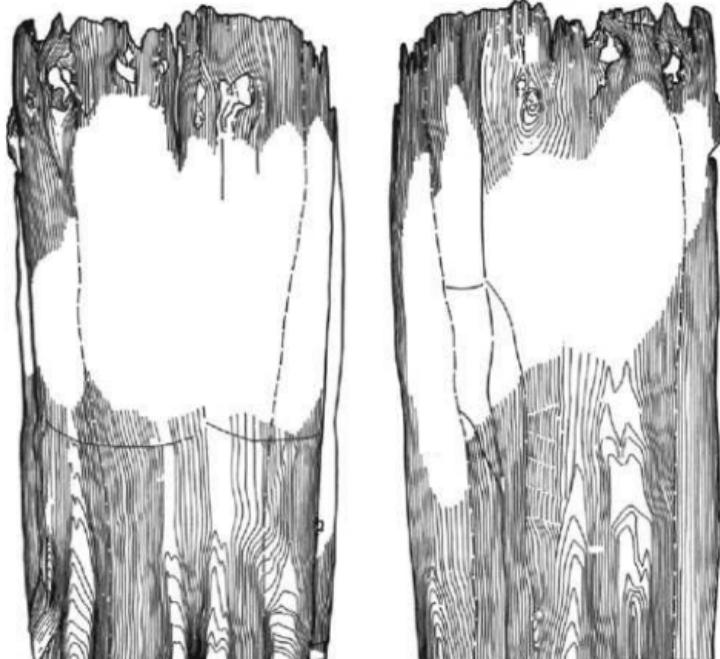
第37図 SE54井戸跡・矢板(1)



第38図 SE 54井戸跡・矢板(2)

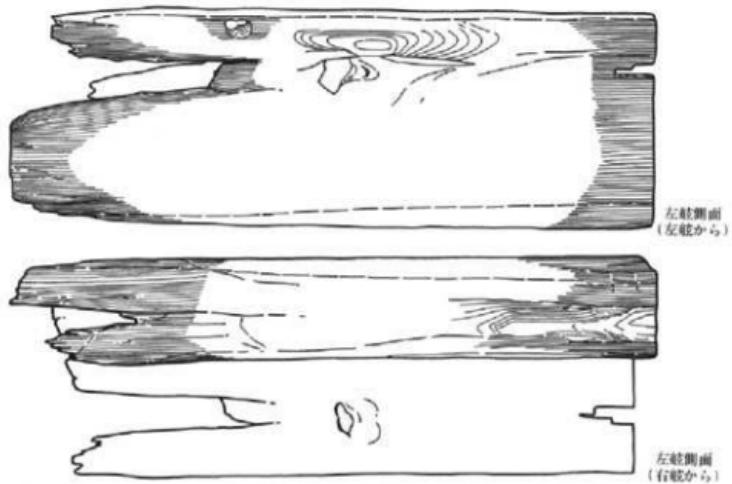


第39図 SE54井戸跡・井戸枠・矢板(2)



南錦丸木柱内側

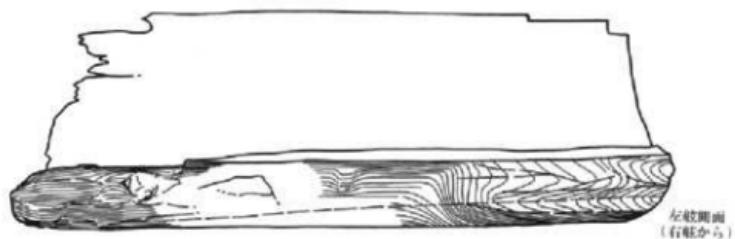
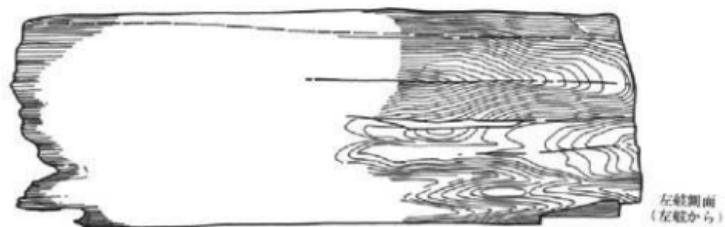
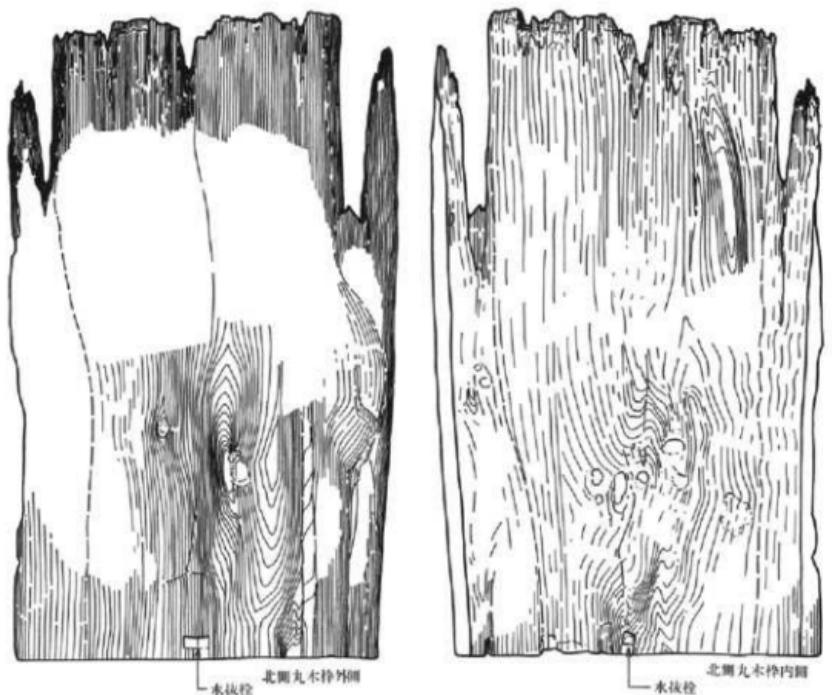
南錦丸木柱外側



左舷端面
(左舷から)

右舷端面
(右舷から)

0 1 m



③層、60がF③層最下面である。赤焼土器壺の底部切り離しはすべて回転糸切りによるもので、ヘラ削りなどの再調整は認められない。器形は、底径に比して口径が小さく器高が高いもの(59)と、底径に比して口径が大きく器高が低いもの(58・60・63)とに分けられる。後者は概してロクロ目の顯著なものが多い。

第34図64は、F4層出土の赤焼土器壺で、口縁部が外反し、口唇部が丸味を持って内傾している。65は、F①層出土の赤焼土器壺で、口唇部が軽く内傾する。

本井戸跡の時期は、井枡内最下層の土器および掘り方のF1・F4層の土器が基準となる。ただし掘り方部の土器には、一部井戸跡構築時以前の土器も入り得ることを考慮に入れなければならない。その意味では、第33図50の須恵器壺は9世紀後半を遡ることが想定されるものの、井戸跡の構築時を示す資料としては不適当と思われる。

井枡内F③層および最下層の土器群のうち、低い台の付く内黒土師器壺やロクロ目の顯著な赤焼土器壺は、余目町上台遺跡ST2住居跡の土器群と類似し、赤焼土器壺や壺の口縁部形態も共通点が多い。また土器群全体の比率において、赤焼土器が圧倒的に多く、次いで内黒土師器壺となり、須恵器がもっとも少なくなる点も、庄内地方の平安時代の土器編年では新しい時期に特徴的なものである。したがって、SE203井戸跡の時期は、上台ST2土器群とほぼ同じ時期、即ち平安時代10世紀後葉頃と推定しておきたい。

なお、本井戸跡からも斎串が3点出土している(第35図66~68)。すべて掘り方F4層上面から出土したもので、SE54井戸跡出土の斎串と同様に、井戸に係る祭祀が井戸構築中に行なわれたことを示唆するものである。斎串の形態は、肩部に片面ないし両側面からの連続した切り込みを持つもので、SE54・63井戸跡出土の斎串とはやや異なる。これが単なる遺構の違いによるものか、時期差に起因するものかが今後の検討課題である。

表5 井戸跡出土遺物観察表(2)

| 掘出 場所 | 器種 | 計測値(cm/m) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土地位 |
|----------|------|--------------------------|---------------------|----|---------------------|-------------------------|----|------------------|--------------|----------------------|
| | | 口径 | 底径 | 厚さ | | | | | | |
| 第34 回 | 赤焼土器 | 57 土器壺 高台付 (12) | 63 | 58 | 2.5YR8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切離 内側剥離とびき | ロクロ ミガキ 黒色處理 | SE203 No1 |
| | | 58 壺 | | 50 | Hue 5 YR8/4 淡褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 F ₂ |
| | | 59 (15) | 55 | 51 | 7.5YR7/3 にぼい褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 F ₄ |
| | | 60 (15) | 62 | 44 | 7.5YR7/3 にぼい褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 No26 |
| | | 61 (15) | 59 | | Hue 7.5YR8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 F ₂ |
| | | 62 壺 | | 55 | 5YR8/3 淡褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 F ₂ |
| | | 63 (16) | 64 | 38 | Hue 7.5YR8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SE203 No14 |
| 第25 回 | 本製品 | 64 壺 | | | Hue 7.5YR7/2 明褐色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | SE203 F ₄ |
| | | 65 壺 | (16) | | Hue 7.5YR8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 不良 | | ロクロ | SE203 No17 |
| | | 66 斎串 | (幅×高×厚) 245×15×4 | | 完 形 | 劍先状で2つの切り込み10m/m左右に削り切れ | | | | SE203 No2 |
| | | 67 斎串 | 174×23×4 | | 上端欠 | | | | | SE203 No16 |
| | | 68 斎串 | 170×22×4 | | 完 形 | 主頭状で切り込み55m/m左右に削り切れがある | | | | SE203 No16 |

土壙内出土遺物(第35・42~45図、図版40~48、表6・7)

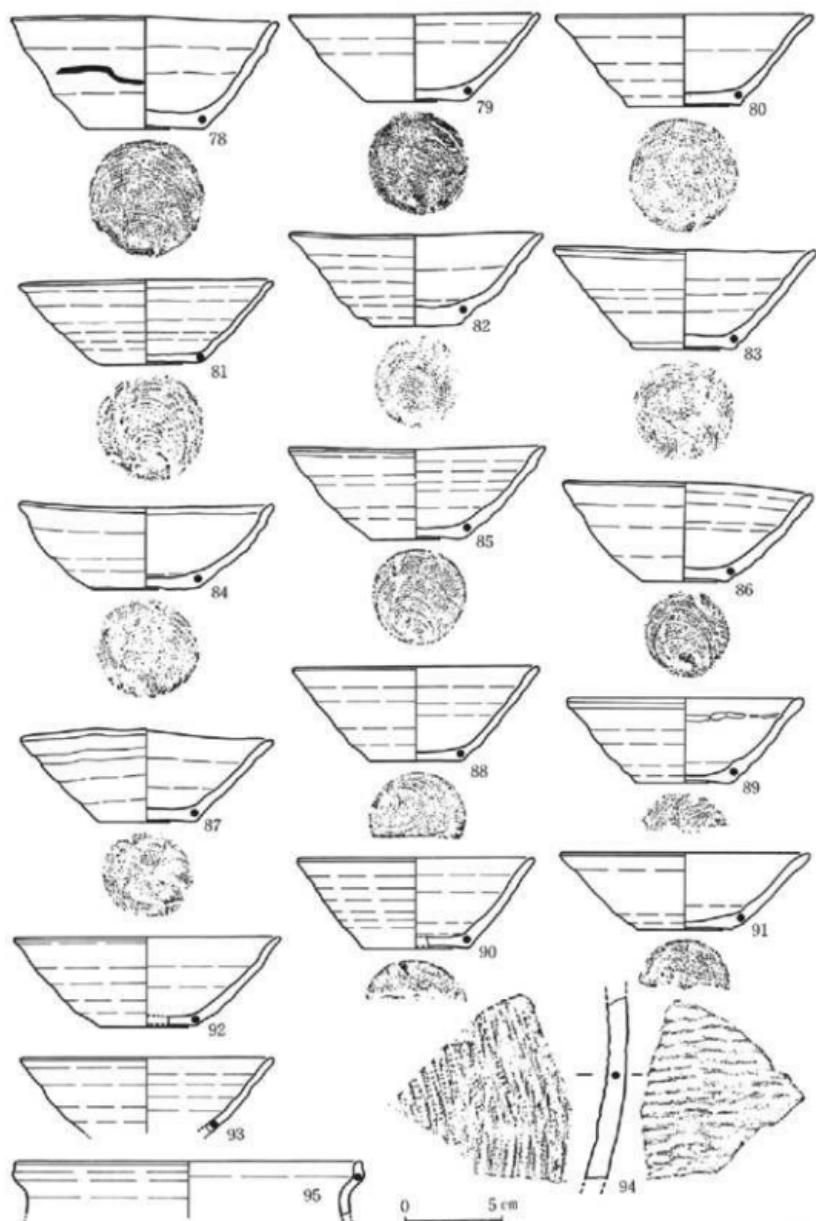
調査で確認された土壙は92基を数える。各土壙から多数を問わず土器、木製品、石製品が出土している。その総数は木製品をのぞき土器1,843片、砥石である。土器の内訳では、土師器1点、須恵器326点、内外黒色土器10点、内黒土器92点、赤焼土器1,405点、中近世陶磁器9点である。ここでは土壙内出土遺物のなかで、土壙が営なまれた時期を示す土器を測図し、第41~45図に示した。なかでもSK100・191・201・202・205・207の各土壙からは、一括した状態で完形またはそれに近い形で出土し、時期や性格等を決定する好資料として検出している。器種別にその特徴を明示し、以下に記述する。

土師器はSK96土壙出土の1点のみである。壺形土器の破片と思われるが細片のため測図出来なかった。胴部片でかすかに外面に右さがりのハケ目が判る。

須恵器は壺・甕片である。出土土壙は、SK40・44・61・100・201・202土壙である。壺はSK40・44・61土壙から出土し、底部切り離しが回転ヘラ切り(69・70)、回転糸切りで高台が付くもの(71)の3点である。96・70共に器面にロクロ痕・ナデを明瞭に残し、70ではへらおこし痕が深く残っている。底面はやや丸味をもち、体部はナデ痕を残しながら急激に立ち上がる。71は高台付壺である。底面から口縁にかけて大きな角度をもちらがらゆるやかに外反し、付高台は垂直に立つ。底部には「秀」の墨書銘が読みとれる。

須恵器甕は、SK100・201・202土壙より出土している。96はSK100土壙の底面に敷かれた状態で出土し、その上に第42図80・92の赤焼土器壺が乗った状態で検出された。96は40cm四方、厚さ2cmの大きな破片で、内面を上にして出土。表面を格子目状の叩き、内面に青海波文のアテののち、条線状アテで再度の痕跡を残している。99~106はSK201土壙出土の須恵器甕片である。表面を条線状叩き痕、内面を青海波アテ痕を残すもの(99)、条線状アテ痕を残すもの(102・103・105)、格子目状アテ痕を残すもの(100・102)である。102は、格子目風にした条線状のアテ痕を平行してアテしている。100は、内面の格子目状叩き目を利用して、再利用の観転用としている。時期は不明であるが、同時出土の土器と同様と考える。

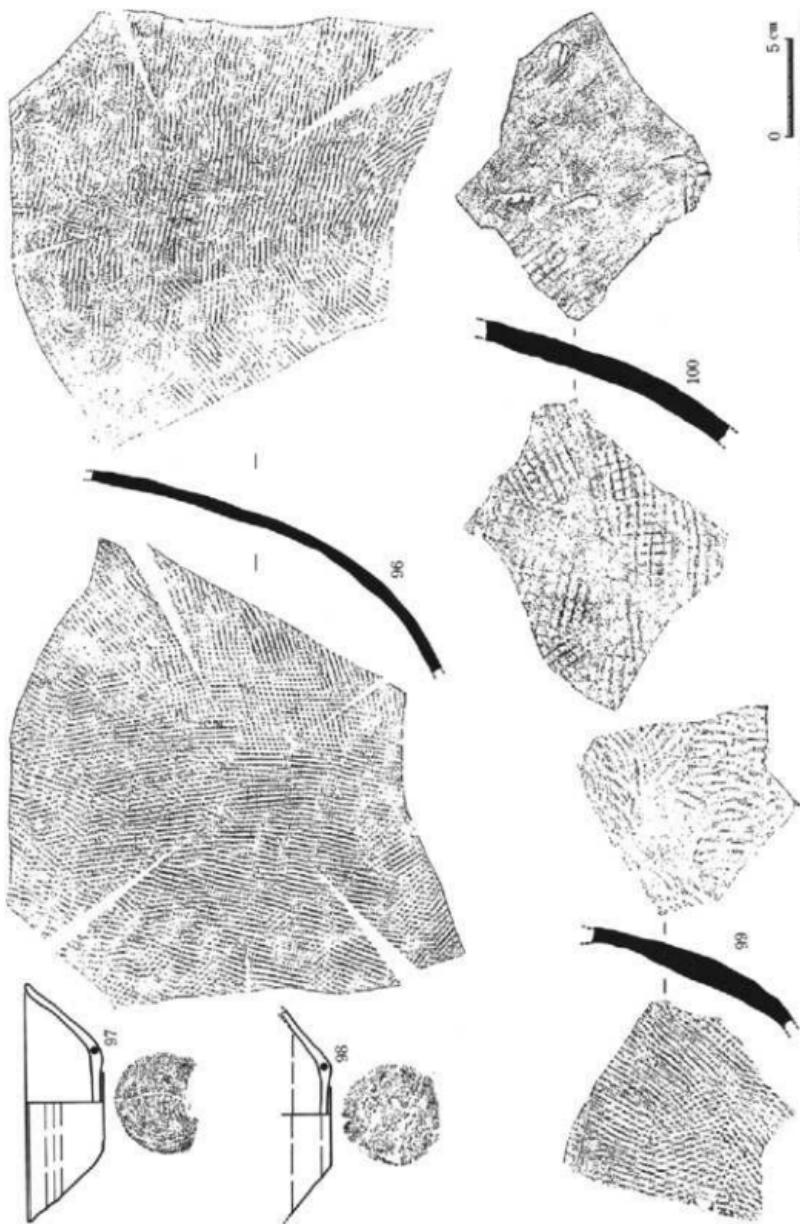
黒色土器は3点出土している。SK201・202・207土壙から1点ずつの出土で、107はSK201出土の壺形を呈する土器片である。現存長12cm、肩部より底部までの破片で、内外面を篦状工具によるナデ後ミガキを入れ、黒色化処理を施している。内面にはロクロによる段を付している。底部は回転糸切り後高さ5mmの高台を付けている。118はSK202土壙出土の高台付壺である。底部片であるが、内外面共にミガキ後黒色化処理を施している。134はSK207土壙出土である。高台付壺を思われるが高台が欠損している。両者共に底部を回転糸切り離しである。時期は平安時代10世紀後葉と考える。

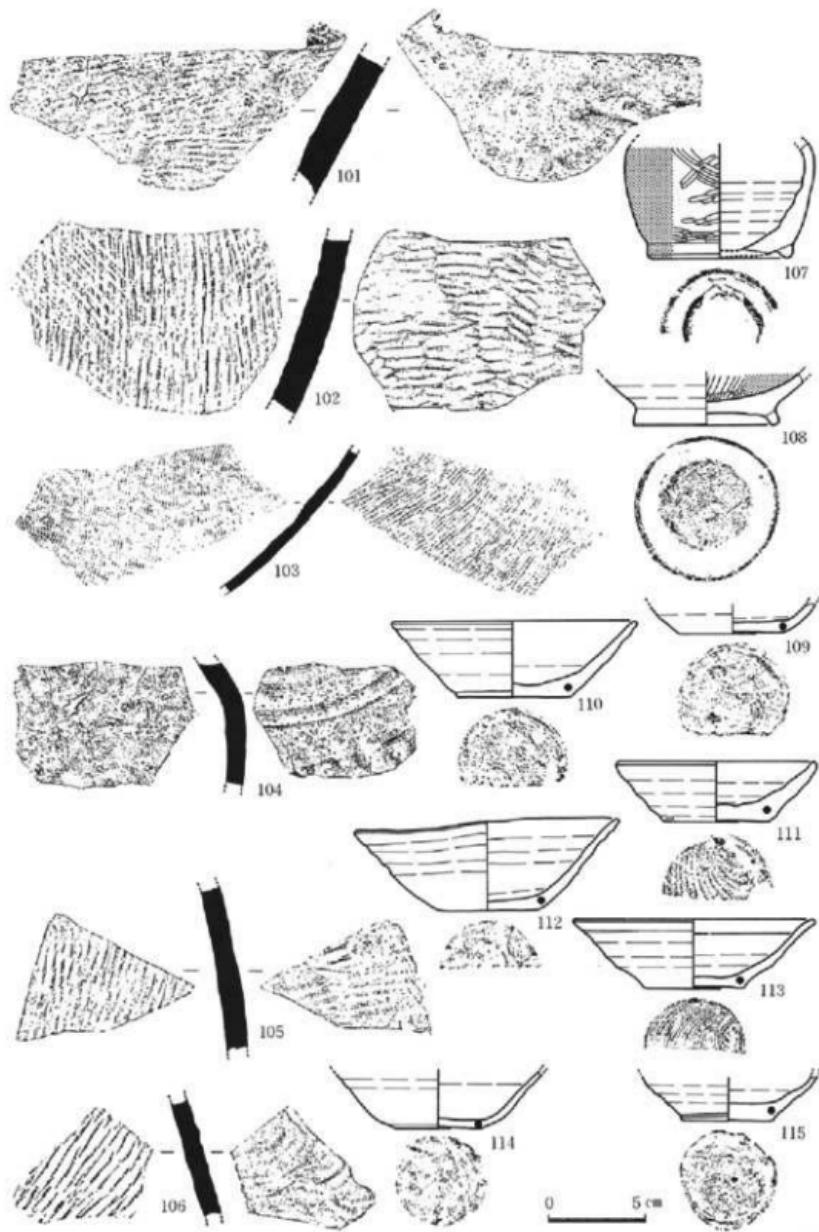


第42図 土壤出土土器(2)

第43圖 土壞出土土器(3)

0 5 cm





第44図 土壌出土土器(4)

内黒土器は各土壤から多少を問わず出土している。総数164片を数え、図化したものは、各壙内の一括土器として取り上げたものである。

SK100土壤からは5点が図示出来た(第41図73~77)。すべてが高台を付すもので、内面をヘラミガキ後炭素吸着による黒色化処理を施している。内面底部付近は放射状に、体部は直線的にみがかれたもの(73・76・77)や、斜目にミガキを施しているもの(74・75)があり、口唇部は横位にミガキを施しているものに分けられる。底部は77をのぞきすべて回転糸切りで、高台を付したのち布ナデで調整が施されている。器形は、底部から直線的に立ち上がる73・76と、やや丸味をもち立ち上がる74・75・77である。

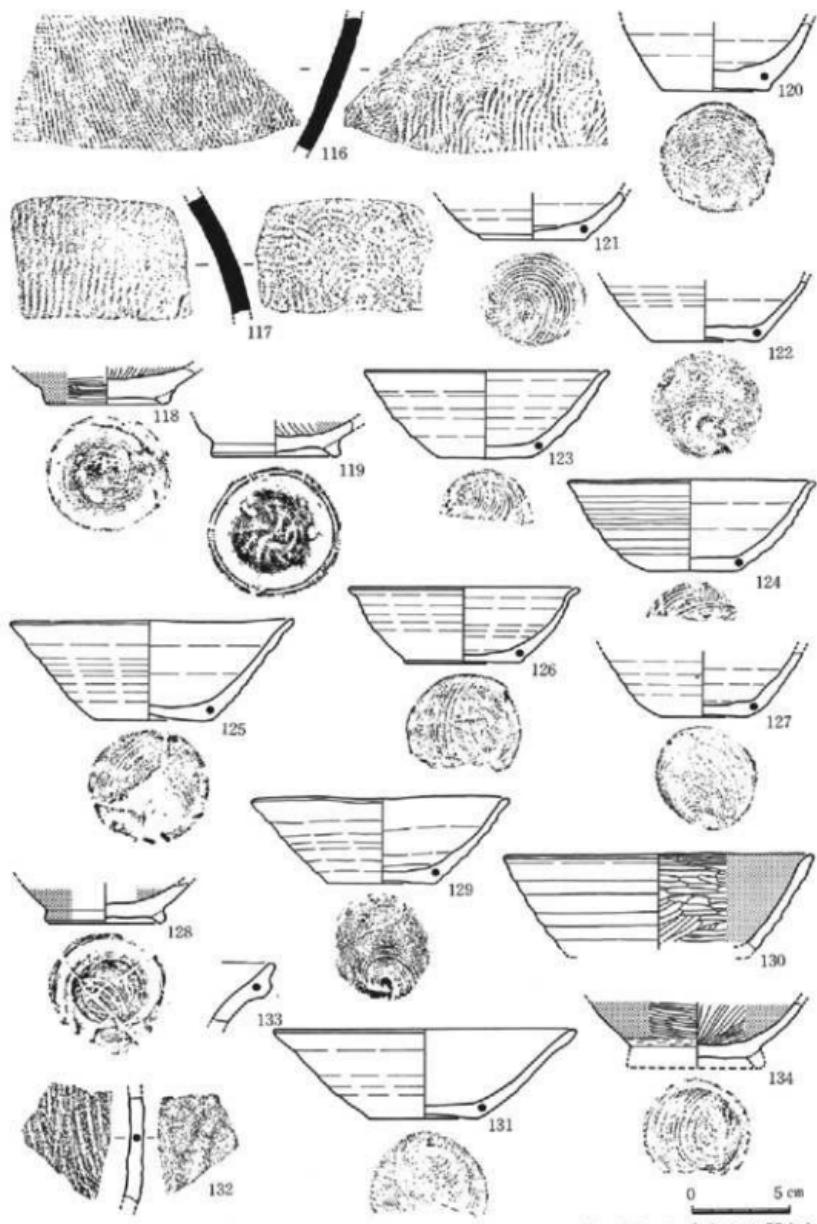
SK207土壤からは1点出土している。SK100土壤出土の内黒土器と同様で、底部から口唇にかけて直線的に立ち上がる土器である。体部から口唇にかけての破片である。いずれも時期は平安時代10世紀後半頃に比定出来る。

赤焼土器は各土壤中より最多の出土で、総数1,405片を数える。器形では、甕・壇・坏で、坏が大部分である。甕は外面に格子目状叩き(94)、条線状叩き(132)、内面を条線状アテ痕が施されたものと、口縁部片(95)の3点である。95は、体部からゆるやかに「くの字状」に広がり口唇部へ垂直に立ち上がる。口唇部は布ナデによる丸味をもち、口唇直下でロクロナデによる段を有している。SK100土壤出土である。

第45図132はSK207出土の赤焼土器場の口縁部片である。ロクロ使用で、口縁部がぬるやかに短く立ち上がる。口唇部下が肥厚しロクロ痕を明瞭に残している。

赤焼土器坏は、図化出来たもので34個体である。底部はすべて回転糸切り離しによる技法で、底部から急激に立ち上がるるもの(79・80・81・83・87・88・89・90・93・110・112・113・121・122・125・129・131)、丸味をもしながら立ち上がるもの(78・82・84・85・86・91・92・97・114・115・123・124・126・127)、器内が厚く、やや小形の杯状の土器(111)がある。111をのぞけば器形が歪なのが多く、器外面に明瞭なロクロ痕で段をつけたものが多い。口径と底径との比は2:1、3:1の割り合いのものや、その中間の比率を表わす土器がある。器高も底径に対して、同数なものや、それに近い器高をもつものが多い。胎土中には粗砂を混入し、焼成は良好である。色調は灰白色や、にぶい橙色、明褐灰色を呈し、焼成時で変化したものと考える。第44図の111は、SK201土壤底面から出土した土器で、他の土壤内出土の坏形土器と違う形を呈している。境興野遺跡SK26土壤(註1)より出土した小形の皿状土器と類似しているが、胎土や焼成に若干の違いが生じている。今後の検討としたい。坏形土器の中には1点の墨書き土器がみられる。SK100土坏F₅層中より出土したもので体部に「～」の墨痕が横位に描かれている。字の解説は不明である。時期は概略的にとらえて平安時代10世紀後葉と推測される。

註1 川崎利央他「境興野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第46集 1981



第45図 土壤出土土器(5)

表 6 土地内出土土器観察表(1)

| 編目 | 器種 | 寸法(cm/cm) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土地点 |
|------------------|-----------|------------|------|---------------------|---------------------|-----|--------|---------------------------|-----------------------|------------------------------|
| | | 口径 | 底径 | 厚さ | | | | | | |
| 第70 類忠器 | 坪(130) | 50 | 42.5 | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転ヘラ切り | ロクロ ナデ | SK40 F ₁ | |
| | 坪(127) | 80 | 32 | N7 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転ヘラ切り | ロクロ ガザ ロクロ ボ | SK44 F ₁ | |
| | 高台付盤 | | 70 | N6 灰色 | 緻密 | 良 | 回転糸切り | ロクロ 無害土器 鈍「瓦」 | SK61 F ₃ | |
| | 坪(112) | 50 | 41 | 10YR8/1 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 F ₃ | |
| 内黒土器 四 | 高台付坪 | 144 | 59 | 58 | 10YR8/1 灰白色 | 緻密 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ミガキ 黒色處理 RP65 | SK100 RP65 |
| | 高台付坪 | 135 | 62 | 58 | 7.5YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ ミガキ 黑色處理 青苔白ナデ | SK100 RP56 |
| | 高台付坪 | 141 | 60 | 515 | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ミガキ-黑色化 色斑 鮎状 | SK100 |
| | 坪 | 142 | 60 | 56 | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ミガキ 黑色處理 RP57 | SK100 RP50 |
| | 坪(16) | | 53 | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ ミガキ 黑色處理 RP59 | SK100 RP59 | |
| | 坪 | 137 | 60 | 57 | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ 黒害有 銛不明 | SK100 RP59 |
| | 坪(125) | 52 | 44.5 | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP56 | |
| 第82 赤燒土器 四 | 坪(126) | 56 | 47 | Hue 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 不具 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP55 | |
| | 坪 | 130 | 50 | 44 | 10YR8/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP52 |
| | 坪 | 131 | 48 | 48 | 7.5YR8/2 灰白色 | 緻密 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP54 |
| | 坪(127) | 55 | 52 | 7.5YR7/3 にいき褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | | SK100 RP79 | |
| | 坪(128) | 55 | 43 | 7.5YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ナデ | SK100 RP24 | |
| | 坪 | 132 | 50 | 46.5 | 7.5YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP31 |
| | 坪 | 129 | 45 | 52 | 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP32 |
| | 坪 | 130 | 50 | 42~47 | 10YR7/2 にいき黃褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ スス付着 | SK100 RP27 |
| | 坪 | 127 | 46 | 47 | Hue 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP78 F ₃ |
| | 坪(129) | 46 | 43 | 7.5YR7/3 にいき褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP28 | |
| 第91 赤燒土器 四 | 坪(130) | 50 | 43 | 7.5YR7/3 にいき褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | | SK100 RP23 | |
| | 坪(129) | 50 | 40 | 7.5YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 RP25 | |
| | 坪(130) | 50 | 45 | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK100 PR31, 33 | |
| | 坪 | 130 | | 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | SK100 F ₃ | |
| | 甕 | | | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 良 | | 桔子目状 呼き 条縞状 あて | SK100 RP25 | |
| | 甕(125) | | | Hue 5YR7/3 にいき褐色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | SK100 F ₃ | |
| | 甕 | | | 7.5Y7/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 桔子目状 呼き 条縞状 アテ痕 | SK100 V PR38 | |
| | 甕 | | | | | | | | | |
| | 甕 | | | | | | | | | |
| | 甕 | | | | | | | | | |
| 第97 赤燒土器 四 | 坪(120) | 46 | 49.5 | Hue 5YR7/6 褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ロクロ ナデ | SK191 F ₁ | |
| | 坪 | | 52 | | 7.5YR7/2 明褐色灰 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK191 F |
| | 甕 | | | N6/0 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 条縞状 タタキ痕 青苔痕 アテ痕 | SK201 Y | |
| | 甕 | | | N7 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 桔子目状 呼き 桔子目状 あて痕 | SK201 RP68 | |
| 第100 類忠器 四 | 甕 | | | N6 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | 条縞状 | SK201 RP66 | |
| | 甕 | | | 7.5Y7/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 条縞状 呼き 桔子目状 条縞状 あて痕 平行 | SK201 SP70 | |
| | 甕 | | | N7 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | 条縞状 呼き 条縞状 アテ痕 | SK201 PR73 | |
| | 甕 | | | N7 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | ロクロ | SK201 RP74 | |
| | 甕 | | | Hue 7.5Y5/1 灰白色 | 緻密 | 堅 | | 条縞状 呼き 条縞状 アテ | SK201 F ₃ | |
| | 甕 | | | 5PB7/1 明褐色灰 | 緻密 | 堅 | | 条縞状 | SK201 Y | |
| | 甕 | | | 5PB4/1 暗青灰 | 緻密 | 堅 | | 付高台 ナデ ロクロ ミガキ 黑色處理 | SK201 RP69 | |
| 107 | 黑色土器 甕 | | | 60 | 5PB4/1 暗青灰 | 緻密 | | | | |

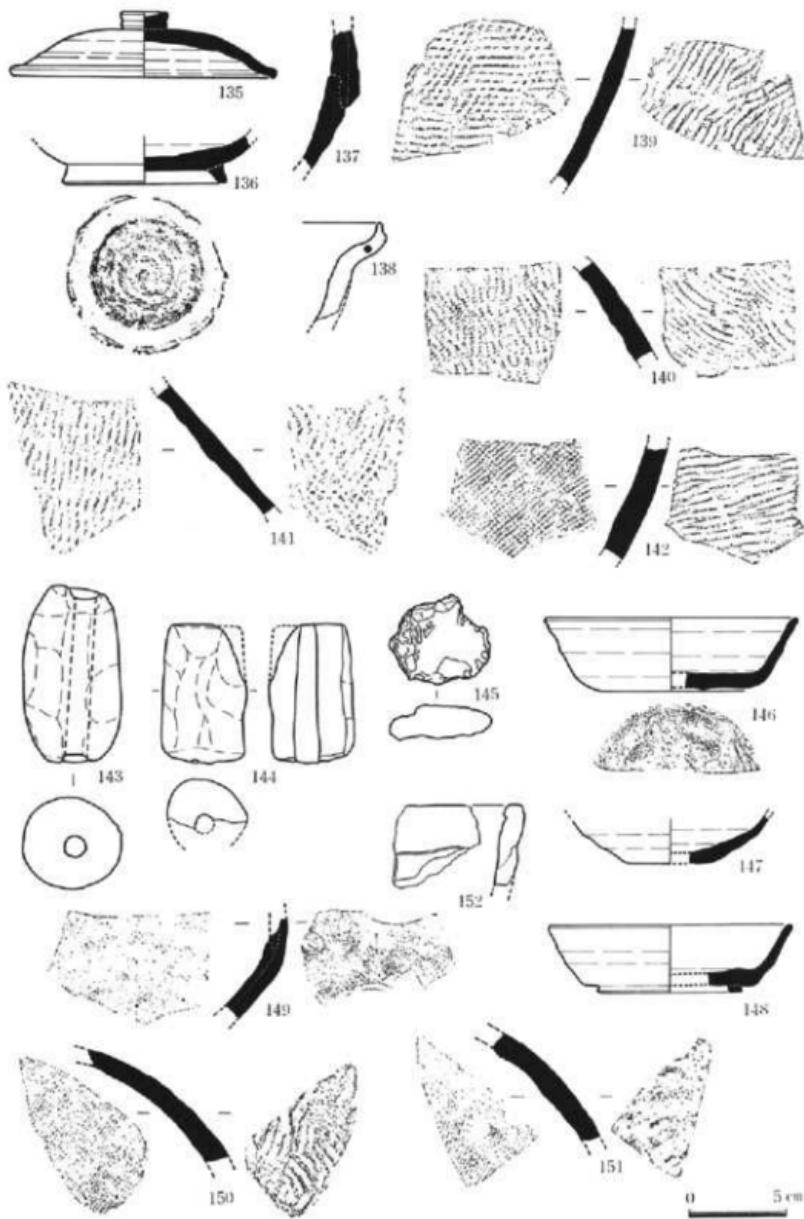
表7 土壌内出土土器観察表(2)

| 測定番号 | 器種 | 計測値(cm/m) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土地点 | | |
|------|-----------------------------|------------------|---------|--------|------------------------|---------------------------|-----------------|-------|-------------------------|----------------------|---------------|---------------|
| | | 口幅 | 底深 | 側高 | | | | | | | | |
| 第1群 | 内黒土器 赤焼土器 | 108 高台付环 | 74 | | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 付高台 周辺ナデ | SK201 RP65 | | |
| | | 109 环 | 55 | 05 | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP75 | | |
| | | 110 环 (1.25) | 58 | 39 | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP56 | | |
| | | 111 环 (10.4) | 60 | 30.5 | 7.5YR7/4 にじみ 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP77 | | |
| | | 112 环 (1.2) | 50 | 45 | 7.5Y8/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP67 | | |
| | | 113 环 (1.2) | 52 | 35 | 7.5YR8/3 淡黄色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP71 | | |
| | | 114 环 | 45 | 00 | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | | ロクロ | SK201 F ₁ | | |
| | | 115 环 | 48 | (31.5) | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK201 RP76 | | |
| 第2群 | 須恵器 黑色土器 内黒土器 赤焼土器 | 116 葫芦 | | | 10Y8/1 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | 朱線状印き 青海波文 | SK202 RP52 | | |
| | | 117 瓢 | | | Hue 2.5Y8/1 灰白色 | 磁 密 | 堅 | | 格子状印き 青海波 | SK202 F ₁ | | |
| | | 118 黒色土器 高台付环 | 62 | 09 | 7.5YR2/1 黑色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ミガキ | SK202 RP49 | | |
| | | 119 内黒土器 高台付环 | 65 | (31.5) | | 磁 密 | 良 | | ヘラミガキ 黑色化處理 菊花紋ナダツク | SK202 RP54 | | |
| | | 120 瓢 | 55 | (36.5) | 7.5VR7/2 明海灰色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ スス付着 | SK202 RP51 | | |
| | | 121 环 | 55 | 25 | 7.5YR8/3 淡黄色 | | 良 | 回転糸切り | 糸切りのやがまきつ いた跡跡を残す | SK202 F | | |
| | | 122 环 | 55 | 09 | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ痕 | SK202 RP48 | | |
| | | 123 瓢 (1.25) | 58 | | | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ瓶 | SK202 F ₁ | | |
| | | 124 环 (1.2) | 58 | 46 | 8YR8/3 淡褐色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SK202 RP50 | | |
| | | 125 环 | 146 | 60 | 52 | 10YR8/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ ナデ | SK202 RP47 | |
| | | 126 环 (1.10) | 60 | 39 | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | | SK202 RP53 | | |
| | | 127 环 | 48 | 00 | 5YR7/6 褐色 | 磁 密 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ | SK202 RP47 | | |
| | | 128 黒色土器 高台付环 | 58 | | N4 灰色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | 付高台ミガキ見えず | SD205 RP46 | | |
| | | 129 赤焼土器 | 环 | 130 | 55 | 46 | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 回転糸切り | ロクロ | SD205 RP43 |
| | | 130 内黒土器 | 环 (1.0) | | (40) | 10YR8/1 灰白色 | 磁 密 | 良 | ロクロ痕 ミガキ 黑色化 | SK207 F | | |
| | | 131 瓢 | 156 | 58 | 45 | Hue 7.5YR7/3 にじみ 褐色 | | 回転糸切り | ロクロ ナデ | SK207 RP42 | | |
| | | 132 瓢 | | | | 7.5YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 朱線状 四引き 内状 あて | SK207 RP41 | | |
| | | 133 瓢 (1.2) | | | | 10YR8/2 灰白色 | 粗砂混 | 良 | ロクロ | SK207 RP40 | | |
| | | 134 黒色土器 高台付环 | | (70) | (60) | 10YR7/1 黑色 | 粗砂混 | 良 | ミガキ 黑色処理 下部にミガキに露出ナデ | SK311 F | | |

溝状遺構内出土遺物(第45図128・129、第46図135~145、図版48、表8)

調査で検出された溝状遺構は14条を数える。本遺構については磁北に対して東西に走る溝状遺構と、南北に走る溝状遺構に分けて記述した。これはある程度の性格や、時期をも反映しているものと考え、ここでは2つに分けて記述する。

溝状遺構からの出土遺物は総数1,592点を数える。その内訳は、須恵器408点、黒色土器11点、内黒土器74点、赤焼土器1,073点、中世陶器7点、近世陶磁器10点、古銭1点、種子3点、土製品3点、木製品1点、金属品1点である。これらはいずれも細片が多く、図示出来るものは少なかったが、SD205溝状遺構内からは、ある程度まとまって出土しており、



第46図 溝状遺構出土遺物・包含層出土土器
— 71 —

図示出来たものと、特異な遺物を載せた。

東西に走る溝状遺構は、SD205・216・90・98・31・32・74・68である。このうちSD205からは底面密着の土器片が多数出土している。総数170点を数え、その内訳は、須恵器9点、黒色土器2点、内黒土器20点、赤焼土器139点である。そのうち測図可能な土器片を図示した。128は黒色土器底底部である。内外面共にヘラミガキ後、炭素吸着による黒色化処理が施されているが、ミガキが不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切り離しであり、切り離し後に高さ5mmの高台を付している。129は、赤焼土器底である。器面全体に明瞭なロクロ痕を残し、形は壺となる。底部の切り離しは回転糸切り離しで、底部より急激に立ち上がるが、体部でやや丸味をもつ。胎土は粗砂を混入し、焼成は良好である。136は須恵器高台付底の底部片である。底部を回転ヘラ切り離しが施され、胎土に粗砂を混入している。焼成は堅い。ロクロ痕がみられ、高台は底部端から外反する。

SD31溝状遺構からは須恵器153片、黒色土器4片、内黒土器13片、赤焼土器285片、土鍤1、鉄滓1の出土がある。137は、須恵器横断の閉栓部である。同心円状の整形痕がわずかにみられる。138は赤焼土器底片である。口縁部のみで、体部から「くの字状」に立ち上がり、口唇部が直立する。その他SD31からは、143の土鍤や、下駄の木製品の出土がある。覆土上層中からは中近世陶磁器と145の鉄滓が出土した。

SD91溝状遺構は南北に走る溝状遺構である。須恵器103片、黒色土器2片、内黒土器13片、赤焼土器154片の出土があった。第46図135は、底面出土の須恵器蓋である。つまみ部は突出がなく、全体にくぼみ、天井部はほぼ平坦である。体部との境はナデ整形を受けてゆるい丸味を持つ。全体的にナデ整形を受けている。140・141は須恵器底片である。内面を青海波アテ痕、外面に格子目状の叩き痕を施している。その他では土製品の土鍤が出土している。

SD92溝状遺構からは、須恵器48片、黒色土器2片、内黒土器13片、赤焼土器124片の出土である。その他の遺物では古銭1枚出土している。土器片は、いずれも細片で測図に勘えるものはなかった。

SD90・98溝状遺構は、重複した状態で検出され、SD98が断面観察の結果あとからの掘り込みであることが判明したものである。しかし両溝状遺構からの出土はなかった。

以上溝状遺構の出土遺物を記述したが、比較的古代を遡る遺物が見られないことから平安時代の所産と考えられる。しかし、SD91・92には中世に近い土器も出土しており概に古代の溝状遺構とは言えない。

東西に走るSD205・216溝状遺構は平安時代10世紀後葉に当たられるが、その他については不明である。しかし、方向や、規模等から考察すれば、同時期に当たられるが、今後の

表8 溝状遺構出土遺物観察表

| 図面番号 | 遺物種類 | 器種 | 計測値 (mm/mm) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技法・備考 | 出土地点層 |
|------|------|------|-------------|----|------|---------------------|-----|----|--------|--------------|---------------------|
| | | | 口径 | 底径 | 壁高 | | | | | | |
| 第46図 | 須恵器 | 蓋 | 134 | | 32.5 | 2.5Y7/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | 切り離し不明 | ロクロ ロクロナデ | SD91 Y |
| | | 筒瓦片 | | 80 | 09 | 7.5YR7/2 明青灰色 | 粗砂混 | 堅 | 回転ヘラ切り | ロクロ | SD205 RP45 |
| | | 横瓶 | | | | 5PB7/1 明青灰色 | 粗砂混 | 堅 | | | SD31 F ₁ |
| | | 赤燒土器 | 肩 | | | Hue 7.5YR6/1 灰白色 | 粗砂混 | 良 | | | SD91 RP2 |
| | | 更 | | | | Hue 7.5YR6/2 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | | SD92 F ₁ |
| | 須恵器 | 更 | | | | 7.5Y7/1 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | | SD91 F ₁ |
| | | 更 | | | | Hue 5Y6/1 灰色 | 粗砂混 | 堅 | | | SD91 F ₁ |
| | | 更 | | | | Hue 5Y7/1 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | | SD92 F ₁ |
| | 土製品 | 土錐 | | | | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 軟 | | 現存長8.9cm | R ₁ |
| | | 土錐 | | | | 10YR8/3 浅黄褐色 | 粗砂混 | 軟 | | 現存長7.8cm | SD91 Y |
| | | 鉄製品 | 鉄滓 | | | | | | | | SD31 F ₁ |

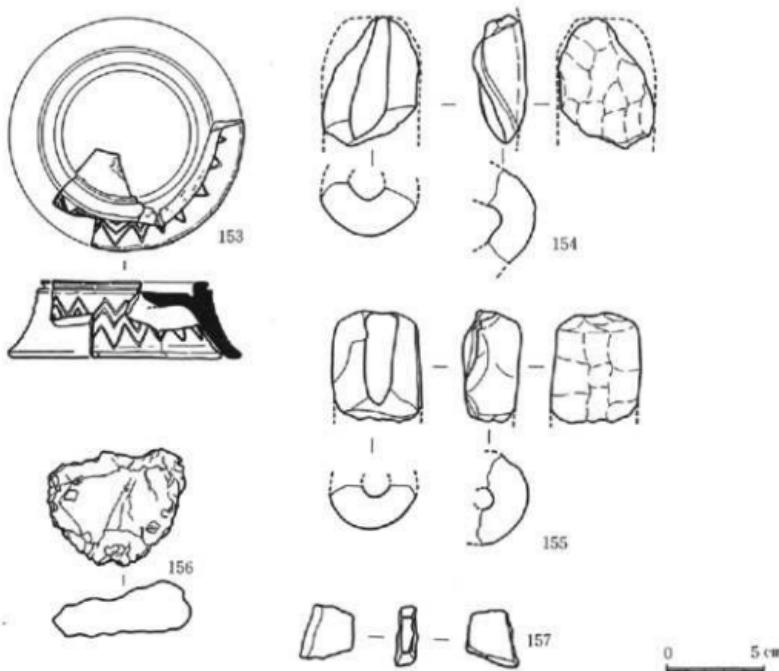
検討を要する。

3 包含層出土遺物(第46・47図、図版48・49、表9)

今次で調査された本遺跡の面積は遺構・遺物の集中地域を探るため設定したトレンチや、決定された精査区域を合せて6,200m²の広さになる。坪堀トレンチ内や、重機拡張で広げた精査区内からは多量の土器片が出土した。遺跡の基本層序に合せて取り上げた数は以下の通りである。表面採集614片、坪堀トレンチ1,994片、包含層第II層1,423片、包含層第III層4,902片、その他21片の合計8,933片の出土である。

ここでは、比較的図示出来、かつ遺跡の時期や特徴を明示出来る遺物を第46・47図にまとめた。以下に記述する。146~151までは須恵器である。器種では壺・甕・横瓶の土器片である。146は包含層II層より出土した壺形土器である。底部切り離しは回転ヘラ切り離しで、底部から急激に立ち上がる。器面にロクロ痕、胎土は緻密で焼成は堅い。150・151は甕片で、外面に条線状の叩き、内面に青海波アテ痕がある。149は横瓶の閉栓部である。接合部が明瞭に判った。153は円面硯である。硯面85mmの径、脚高39mmを測り、脚部に連続山形文が3条引かれている。III層中からの出土で、3グリッドに広がって出土したものである。154・155はII・III層より出土した土錐である。破片資料なため全長は不明であるが、SD91溝状遺構より出土したものより小型のものと思われる。156はIII層出土の鉄滓である。SD31出土のものより一回り大きく重い。157は砥石片で3cm四方の小さなものである。全面に擦り痕があるため完形と思われるが、用途については不明である。

以上包含層出土遺物を記述したが、本遺跡の性格等を考えるうえで貴重な出土遺物である。円面硯を使い、文字を書き、鍛冶場をもち、南方100mに西流する平田川で漁を営むという古代の生活をうかがい知る資料として上げられる。



第47図 包含層出土遺物

表9 包含層出土遺物観察表

| 探査 | 記号 | 器種 | 計測値(cm/m) | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 底部切離 | 調整技術・備考 | 出土点位置 | |
|------|-----|----------------|-----------|-------|----|------|---------------------|-----------|------|---------|--------------------------------|----------------------------|
| | | | 口径 | 幅 | 深さ | | | | | | | |
| 第46回 | 146 | 須恵器 | 环 | (130) | 幅 | 31.5 | 7.5Y6/3 灰色 | 緻密 | 堅 | 回転ヘラ切り | ロクロ窯 ナギリ転用 内面に墨痕有 | 66-54 II |
| | 147 | | 环 | | 幅 | 00 | 5Y7/1 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | | 60-63 III |
| | 148 | | 高台付环 | (122) | 幅 | 31.5 | N4 灰色 | 粗砂混 | 堅 | 回転糸切り | ロクロ窯 灰かぶり | 69-44 II |
| | 149 | | 横腹 | | | | N4 灰色 | 粗砂混 | 堅 | | 灰かぶり | 70-49 II |
| | 150 | | 横腹 | | | | N7 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | 同心円破 青銅鋳版 | 70-49 II |
| | 151 | | 横腹 | | | | N7 灰白色 | 粗砂混 | 堅 | | 同心円破 半球状あて | 69-47 II |
| 第47回 | 152 | 猪塗土器 バケツ形容器 | | | | | 10YR7/3 に5Y3-黄橙色 | 粗砂混 | 軟 | 輪模底 | | 60-57 III |
| | 153 | 須恵器 円面鏡 | 表面 | 85 | 幅 | 120 | 39 | 細砂粒 混入 | 良好 | | 連續山形文 3条 | 53-64, 53-6-5 53-63 III |
| | 154 | 土製品 土鍋 | | | | | 2.5Y6/1 灰白色 | 粗砂混 | 軟 | | 現存長6.7cm | 59-55 III |
| | 155 | 土製品 土鍋 | | | | | 2.5Y8/2 灰白色 | 粗砂混 | 軟 | | 現存長5.6cm | 66-50 II |
| | 156 | 鉄製品 鐵鋤 | | | | | | | | | | 63-56 III |
| 第48回 | 157 | 石製品 砥石 | | | | | 7.5GY8/1 明緑灰色 | 粗砂混 | 堅 | | 現存長2.45cm 底厚1cm 底外輪2.3cm | 66-54 III |

V まとめ

遺構の変遷

今回の発掘調査によって検出された遺構には、掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基、柱穴列1列、板塀列1列、土壙92基、溝状遺構14条の他、建物跡として組み合すことが出来なかつたピットや、性格不明の遺構など数多く検出された。

本遺跡は総面積60,000m²という広大な地域になる。調査前の試掘調査でも全域にわたり、遺構・遺物が検出されている。そのなかでも数多くの遺物が検出されている地域を精査区域として調査を実施したが、ほ場整備事業とのかねあいで、麦転作が全域にかけて実施されていることから調査を二段階に分けて実施した。

A区では掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、土壙64基、溝状遺構8条の他が検出されている。B区では掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、柱穴列1列、板塀列1列、土壙28基、溝状遺構は、A区より続くSD91・92と、SD31・32の他2条が確認されている。

2つの精査区では、確認された遺構の内容や、規模もちがい、時期的な隔りがあることを調査結果で得ている。建物跡は主軸方向が違う4棟と4棟とに分けることが出来る。また出土遺物の検討結果から本遺跡の調査地区は9世紀後半から10世紀後葉にかけて連綿と営なまれていたことが推測出来る。そして建物跡はその他の遺構と密接なつながりをもち、出土遺物や、埋土および遺構の重複関係から建物跡を中心に2つの時期に分け、遺構の変遷について述べる。

1期は建物跡の主軸方向が、磁北に対して18度から43度東へ傾く建物跡群である。SB1・2・4・9・19建物跡がこれにあたる。建物跡以外で明らかに本類にあたると推定出来る遺構ではA区のSE54井戸跡、SD90・91、B区のSD216溝状遺構があげられる。土壙では本期の遺構に含まれるものも存在すると考えられるが、出土遺物や、重複するものが多く土層の観察や、検出位置等、詳略な検討を加える必要がある。現在までの検討では、時期は9世紀代を中心とする遺構群であるが、その中でも、前半の時期と(SB2・4・6)後半の時期に分けられる。(SB1・9・19)

2期とする遺構群は、建物跡の主軸方向が磁北に対して2度～29度西に傾く傾向を示すものである。SB3・7・8建物跡がこれにあたる。そしてこれら建物跡内柱穴出土の土器と同時期の土器が出土したSE63・203井戸跡、SK100・201・202・206・207・220土壙等の精査B区北側で検出された土壙群である。溝状遺構では、B区北東部で東西に検出されたSD205溝状遺構や、A区のSD31・32・90・91・92・98溝状遺構がこの類に入る。時期は10

世紀後半を中心とする遺構群である。

以上建物跡の主軸方向が、西に傾くものと、東に傾くものとがあり、その傾向が時期的な要因又は政治的な要因で成るかについては検討を要するところである。しかし、城輪柵跡周辺の集落遺跡では、城輪柵跡の東半分にあたる各遺跡の掘立柱建物跡の南北軸が西に振れ、西半分にあたる各遺跡の掘立柱建物跡が逆に東に傾くものが多いと指摘している。本遺跡では、I期とした時期の建物跡群は東に傾くもので、前述の傾向を示しているが、II期の建物跡は逆に西へ傾むいている。9世紀代の建物跡は東で、10世紀代の建物跡は西へ傾くことが、時期の中で変化していったものか、あるいは、城輪柵跡に何らかの政治的変動があり変化したものなのについては今後資料を集積して論を進めたい。

最後に城輪柵跡周辺の地割りについて述べる。まず城輪柵跡の政庁東西門を結ぶ線を東へ延ばすと堂の前遺跡、更に八森遺跡南門にたどる。この線上には八幡町市条地区があり、市条=一条とも呼べる。出羽丘陵の西山麓添いには一定の間隔をもって神社が分布し、北平沢付近では「大道東」という地名も残っていることから、一番東側の道(一条)とも考えることが出来る。また反対に西の方にのばすと、豊原遺跡を通り、庭田遺跡に至る。庭田遺跡は、東端の市条地区と同距離に当たり、西側の最初となる可能性がある。そしてこれより西方には平安時代の遺跡の存在がないことにより、西端と考え庭田遺跡より南方へ列を連なる様に遺跡が点在している。本遺跡もこの遺跡に含まれ、城輪柵跡を中心とした地割りの一単位に当たるものと考えられる。

現在、私共では昭和48年から進めてきた城輪柵跡周辺の発掘調査された遺跡について、その検出された建物跡や、塙跡、畝状の遺構等を大縮尺の地図上にプロットする作業を試みたいと考えており、最終的には井戸跡・条里遺構や道路状遺構も含め、城輪柵跡の地割りを復元したいと考えている。

参考文献

- 野尻 侃地 「関B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983
佐藤禎宏 「八森遺跡第1次・第2次発掘調査報告」八幡町教育委員会 1978
尾形與典他 「堂の前遺跡昭和53・54年度調査略報」山形県埋蔵文化財調査報告書第30集 1980
野尻 侃地 「庭田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第65集 1983
安部 實他 「豊原B遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第55集 1982
阿部明彦他 「手藏田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第87集 1985
野尻 侃地 「北田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第48集 1981
野尻 侃地 「沼田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第78集 1984

図 版



遺跡遠景(北より)



遺跡近景(南より)



坪掘り調査状況



A精査区設定



遺跡の層序



A区西半遺構検出状況

A精查区遥感像片情况



图版4



SB 1・2・3・4 建物跡検出状況



SB5 建物跡検出状況

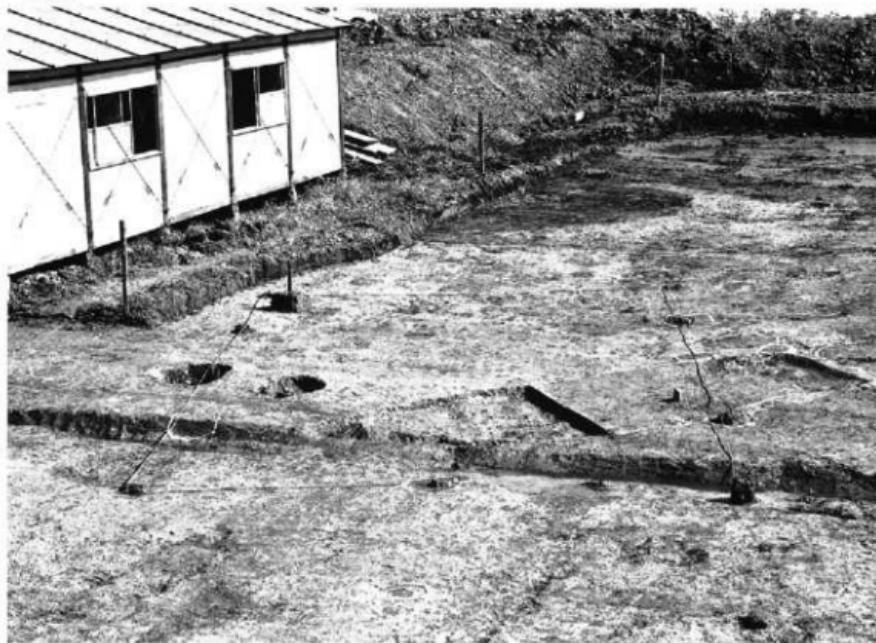


B精査区遺構検出状況(西より)



B区建物跡検出状況(北より)

図版 7



SB7 建物跡検出状況



SB8 建物跡検出状況



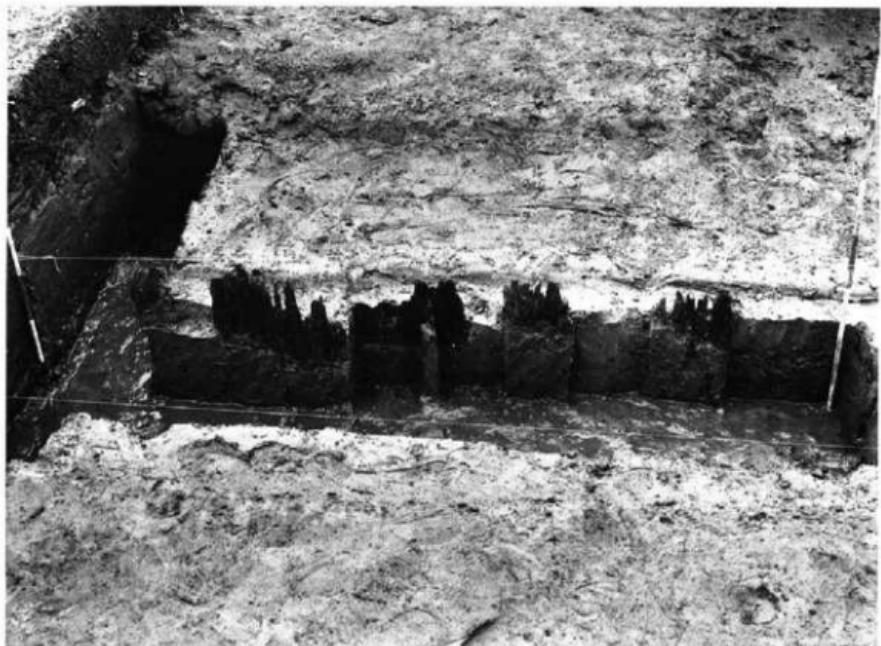
SAI2板堀列全景(北より)



板堀土層断面

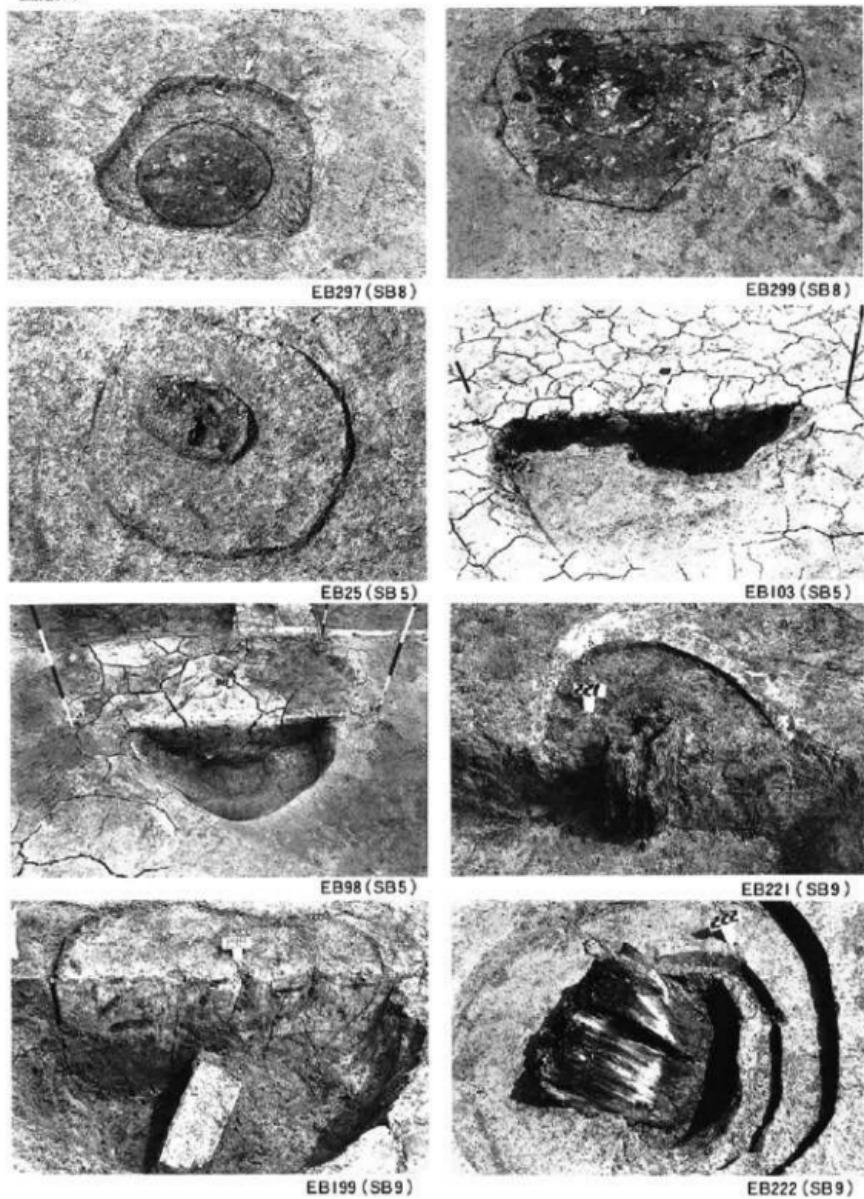


SA12板塁列検出状況



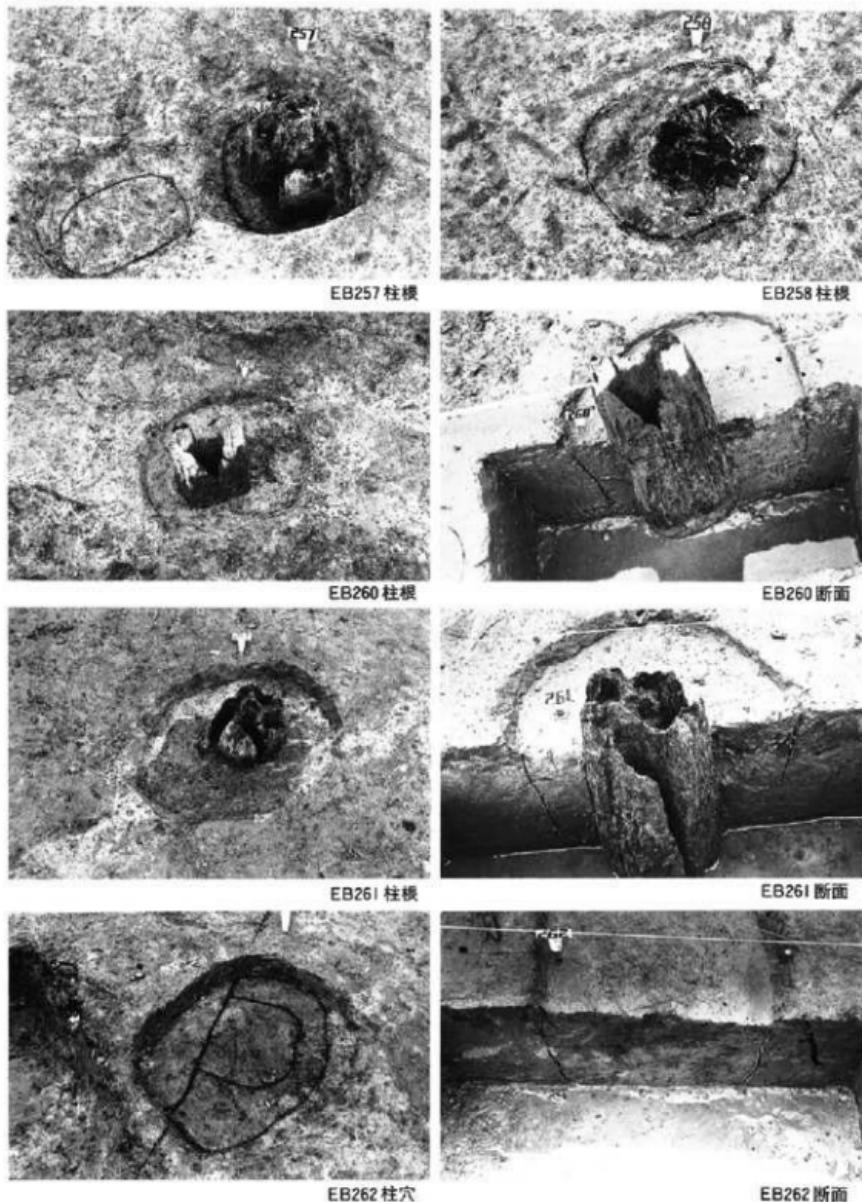
SA12板塁列土層断面

図版10



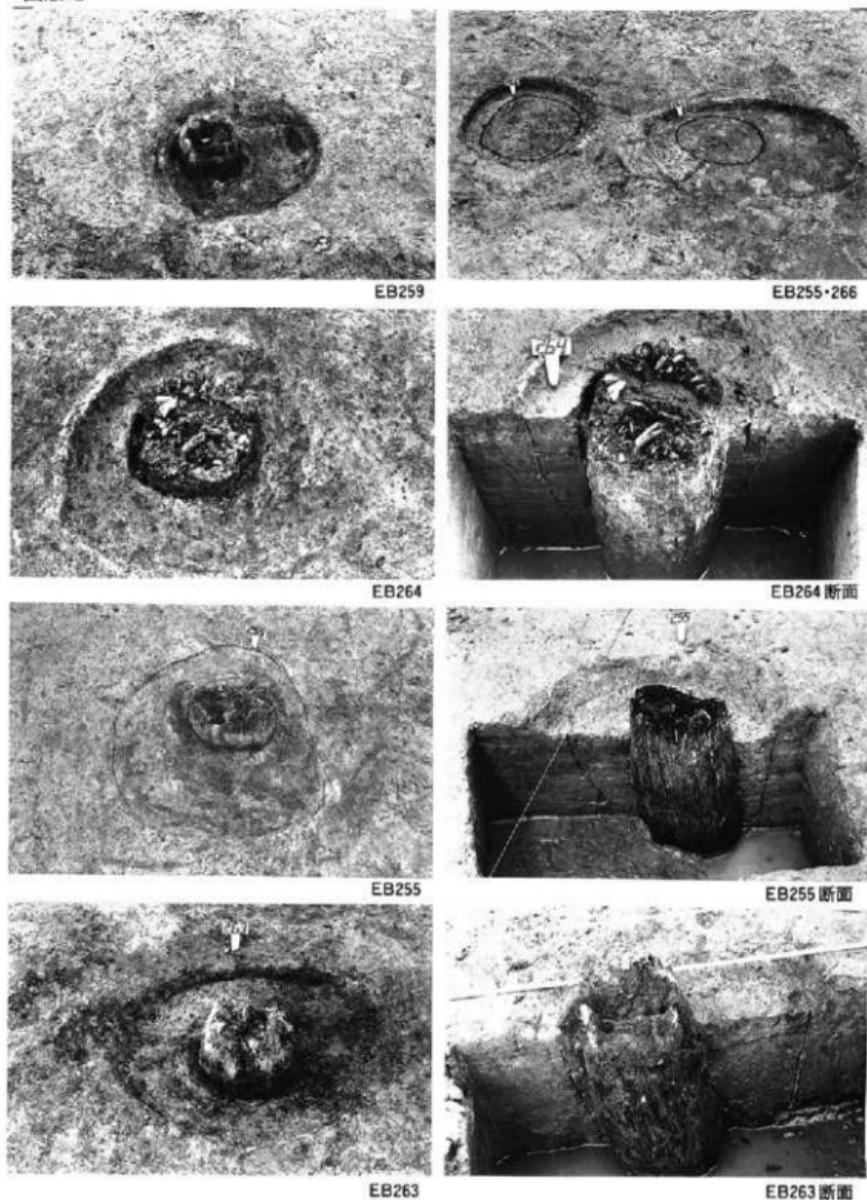
SB 5・8・9 建物跡柱穴検出状況

図版II



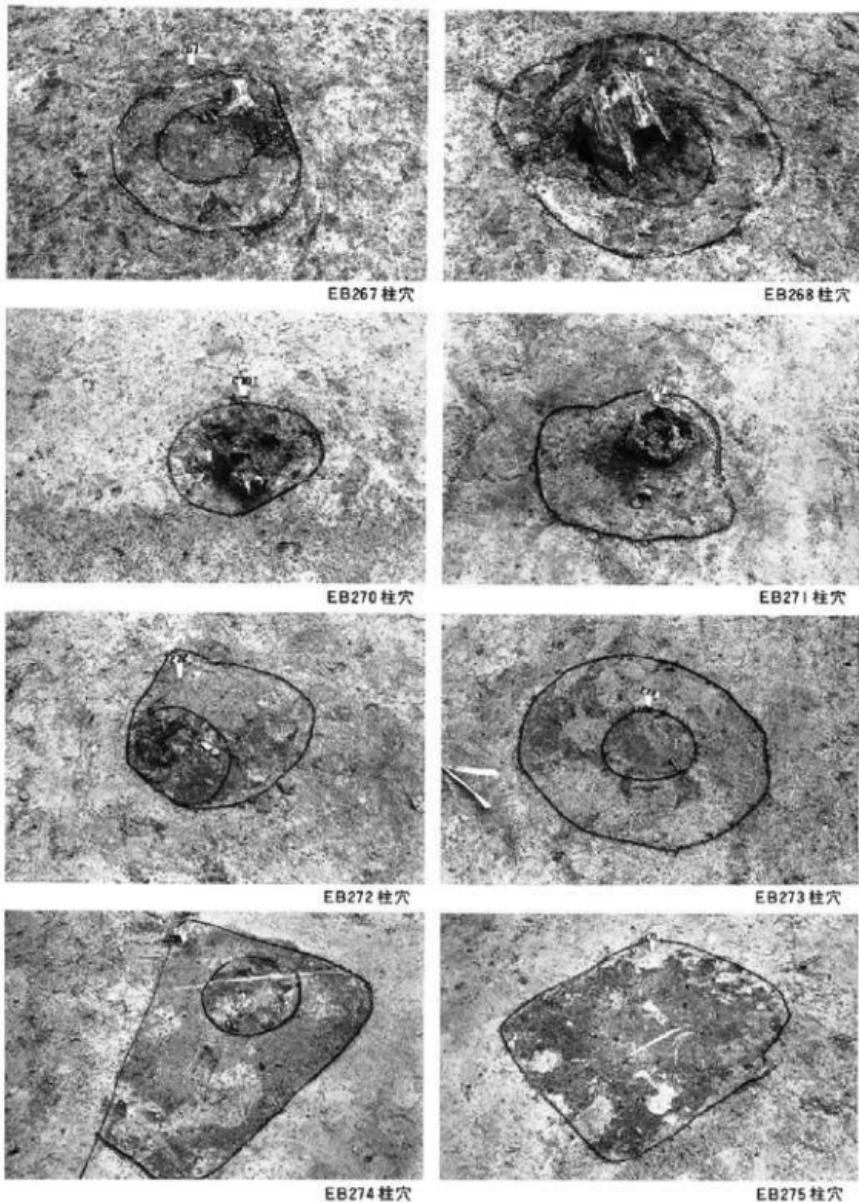
SB7建物跡柱穴検出状況・土層断面(1)

图版12



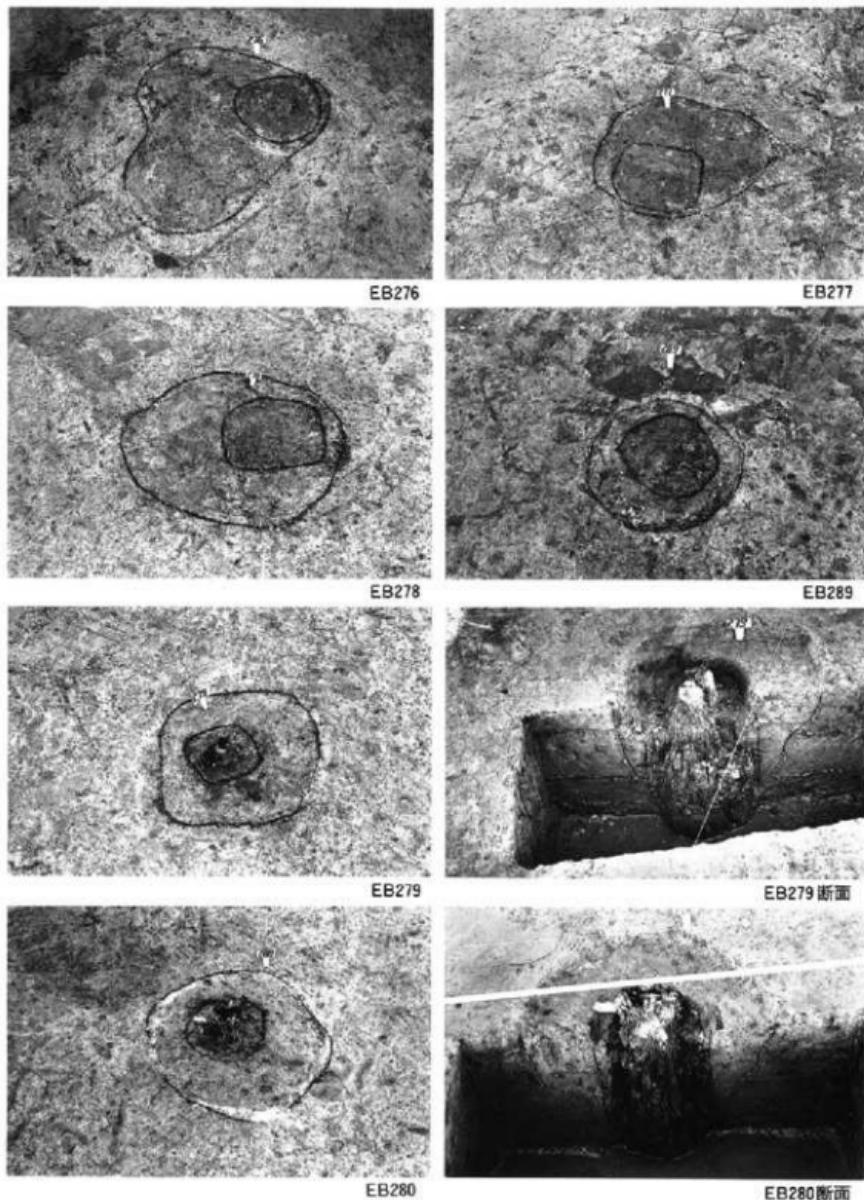
SB7 建物跡柱穴検出状況・土層断面(2)

図版13



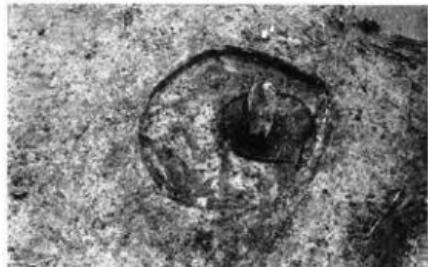
SB8 建物跡柱穴検出状況(1)

図版14



SB8建物跡柱穴検出状況・土層断面(2)

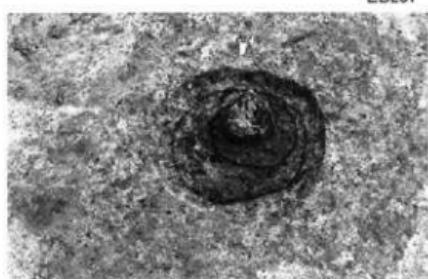
図版15



EB281



EB281 断面



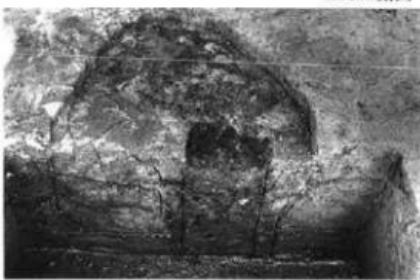
EB282



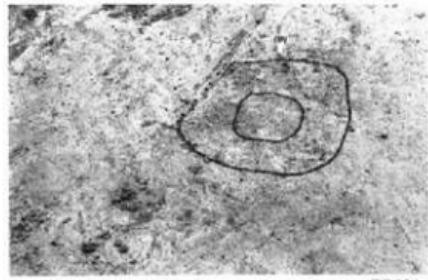
EB282 断面



EB283



EB283 断面



EB284



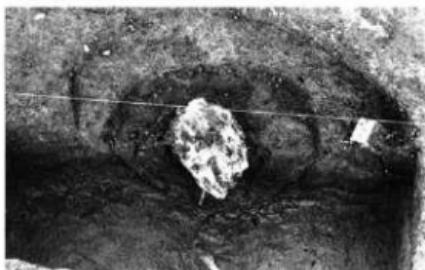
EB284 断面

SB8 建物跡柱穴検出状況・土層断面(3)

図版16



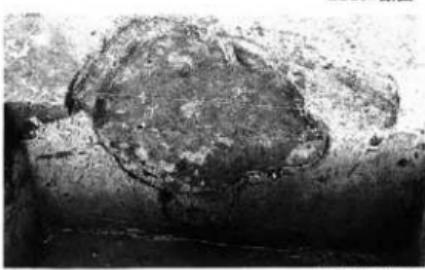
EB287



EB287 断面



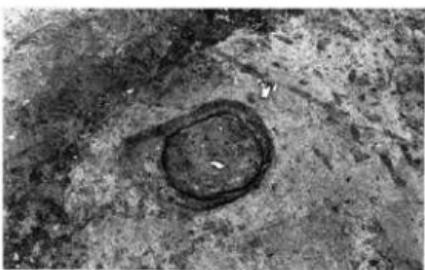
EB288



EB288 断面



EB290



EB294



EB295



EB296

SB8 建物跡柱穴検出状況・土層断面(4)

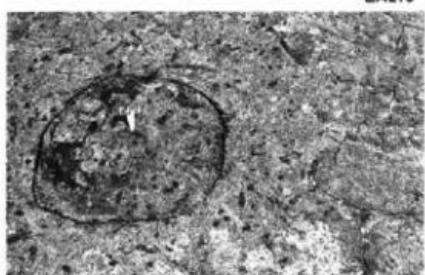
図版17



EA213



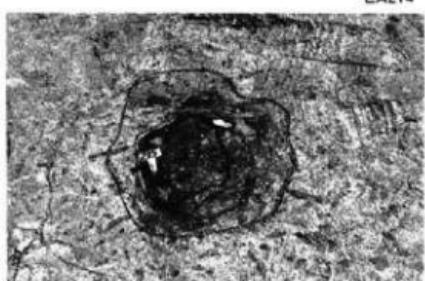
EA213 剖面



EA214



EA214 剖面



EA215



EA215 剖面

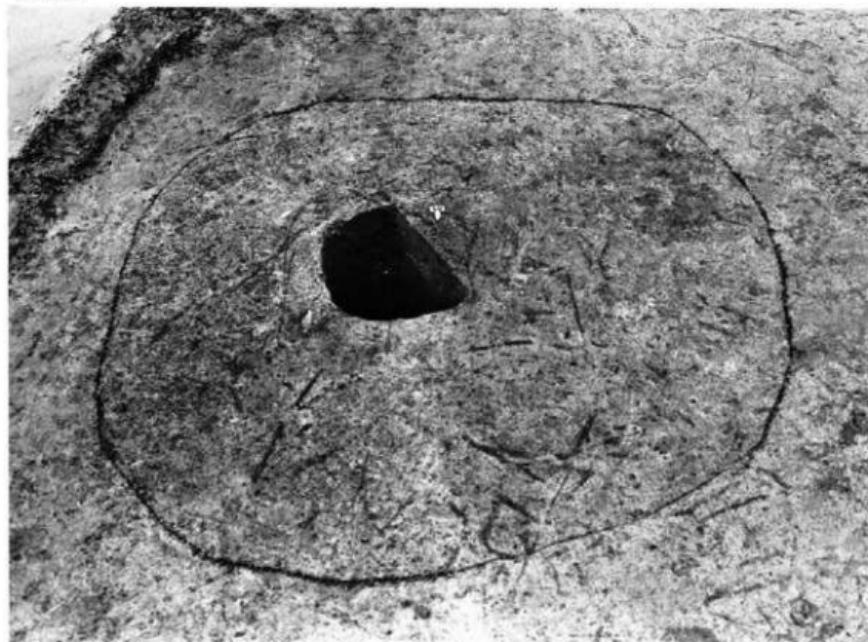


EA217

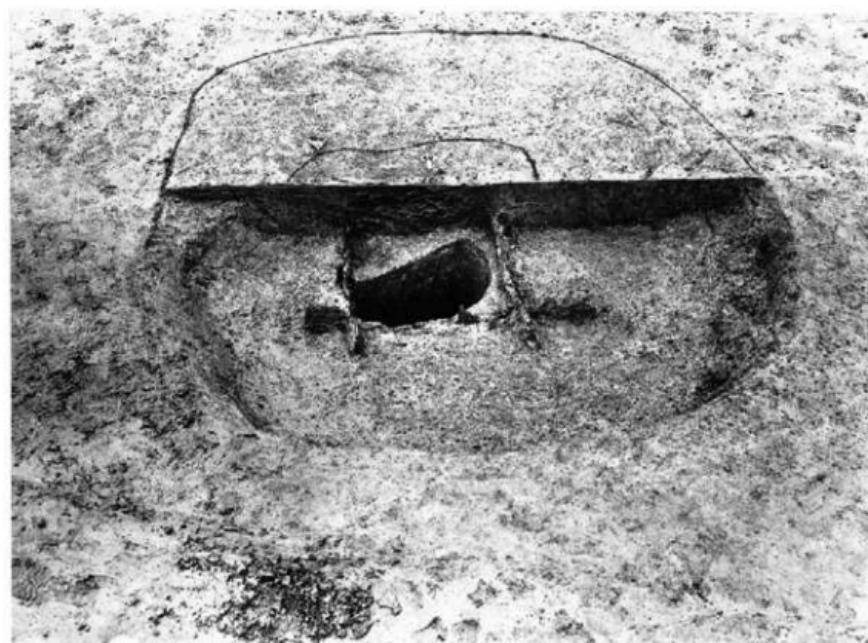


EA217 剖面

SA I2柱穴列柱穴検出状況・土層断面



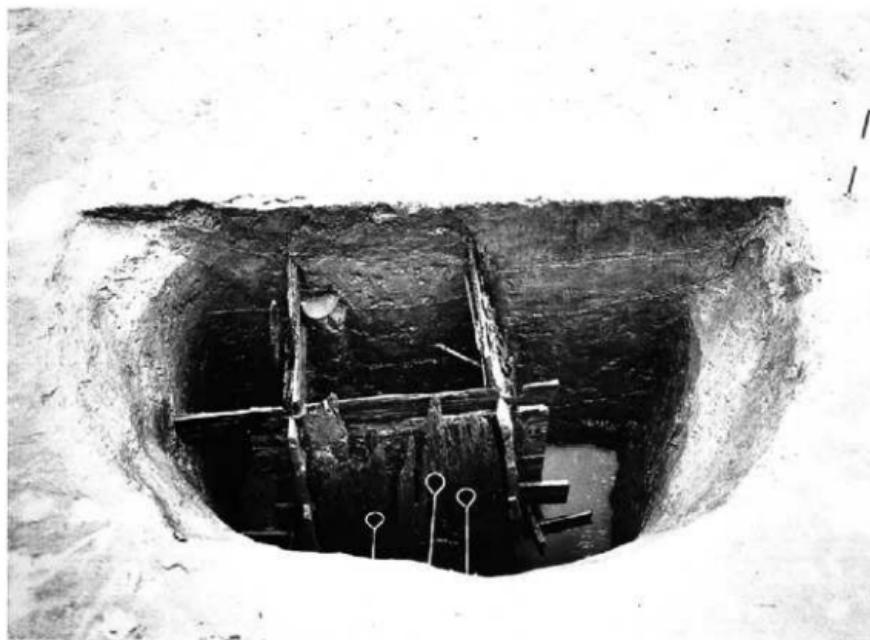
SE54 井戸跡掘り方検出



SE 54 上部井桁検出



SE 54 上部井桁状况



SE 54 土层断面



SE 54 中位井桁状况



SE 54 下部綴板檢出



SE 54 下部横栈状况



SE 54 最下部縱板檢出

図版22



画串



漆製品



画串(拡大)

SF 54井戸粹出物出土情況



SE 203 井戸跡検出状況



SE 203 井戸跡上部検出状況



SE 203 井戸跡土層断面



SE 203 井戸跡下部遺物出土状況



SE61 土層断面



SE61 穴掘



SK311 土層断面



SE63 井戸跡振り方



SE58 井戸跡土層断面



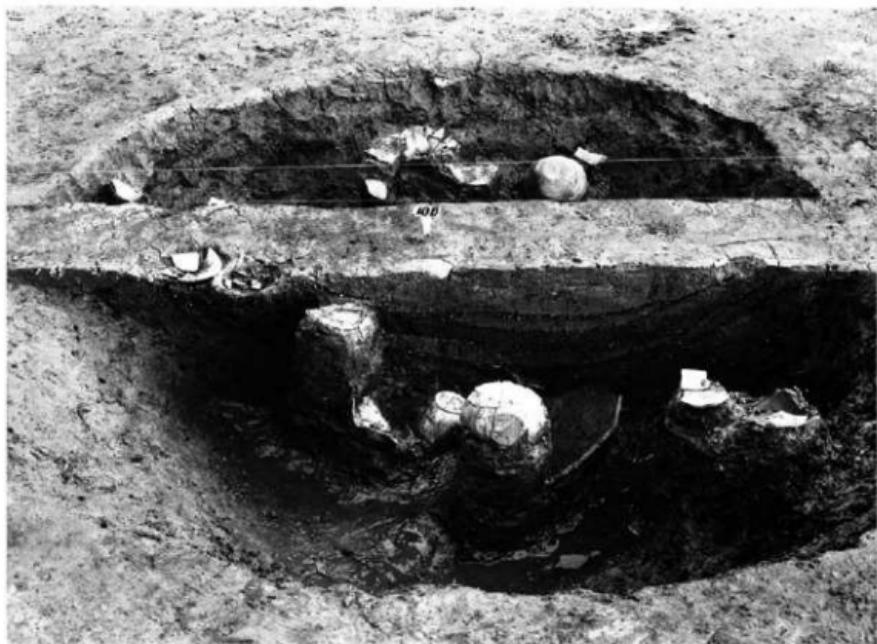
SE58 井戸跡



SK302 土層断面



SE61 井戸跡斎半出土状況



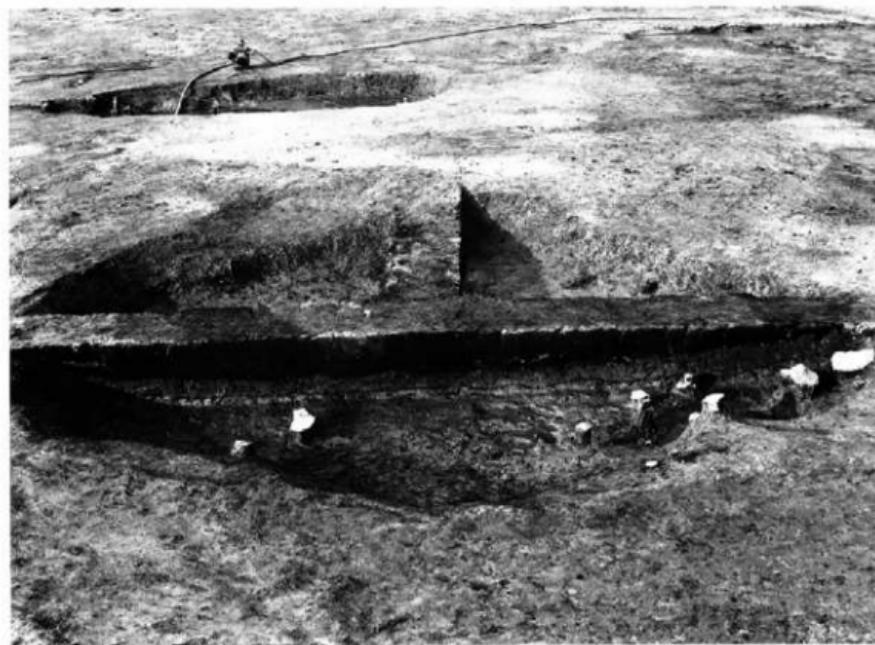
SK 100土壤土層斷面



SK 100 土器出土狀況



SK201 土壌完掘



SK201 土壌土層断面



SK202 土壤遺物出土狀況



SK207 土壤遺物出土狀況



SD205溝状遺構完掘



SK202土壙完掘



SK202土壤土层断面



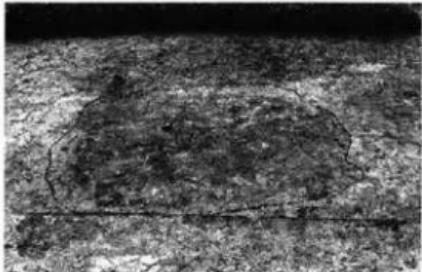
SK201 土层断面



SK206 土层断面



SK44 土层断面



SK195 土壤检测状况



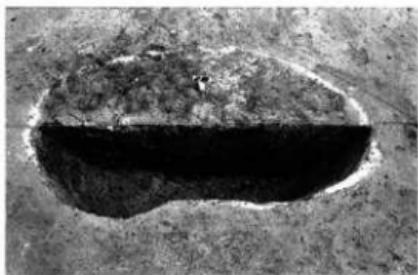
SK195 土层断面



SK195 土壤挖掘

核出土壤

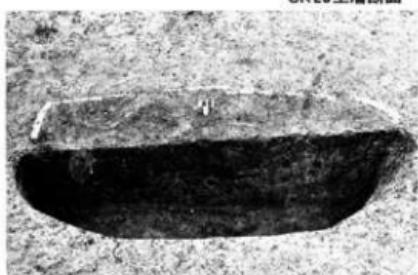
図版31



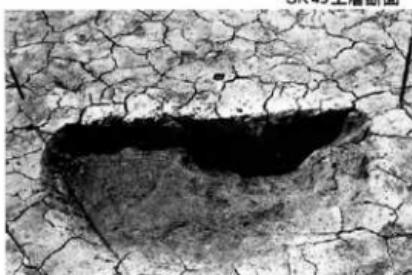
SK 28 土層断面



SK 49 土層断面



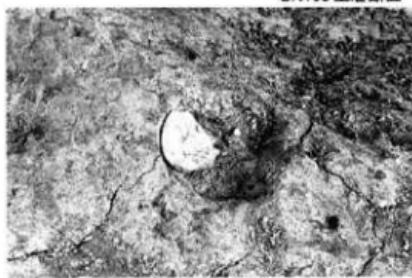
SK 89 土層断面



SK 103 土層断面



SK 191 土層断面



SK 195 土器出土状況



SE 62 遺物出土状況



SA12 土層断面



SD 31-32 調査風景



SD31-32完掘



SD 90 土層断面



SD 91 土層断面



SD 31出土土錘



SD 32出土土器



SD31出土下駁

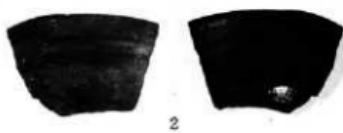
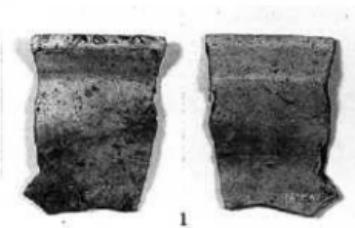


SD205完掘

溝状遺構検出状況

精宮区兜掘(北より)







9



10



12



13



17



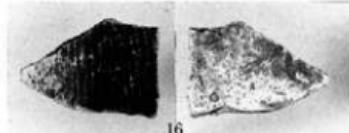
11



14

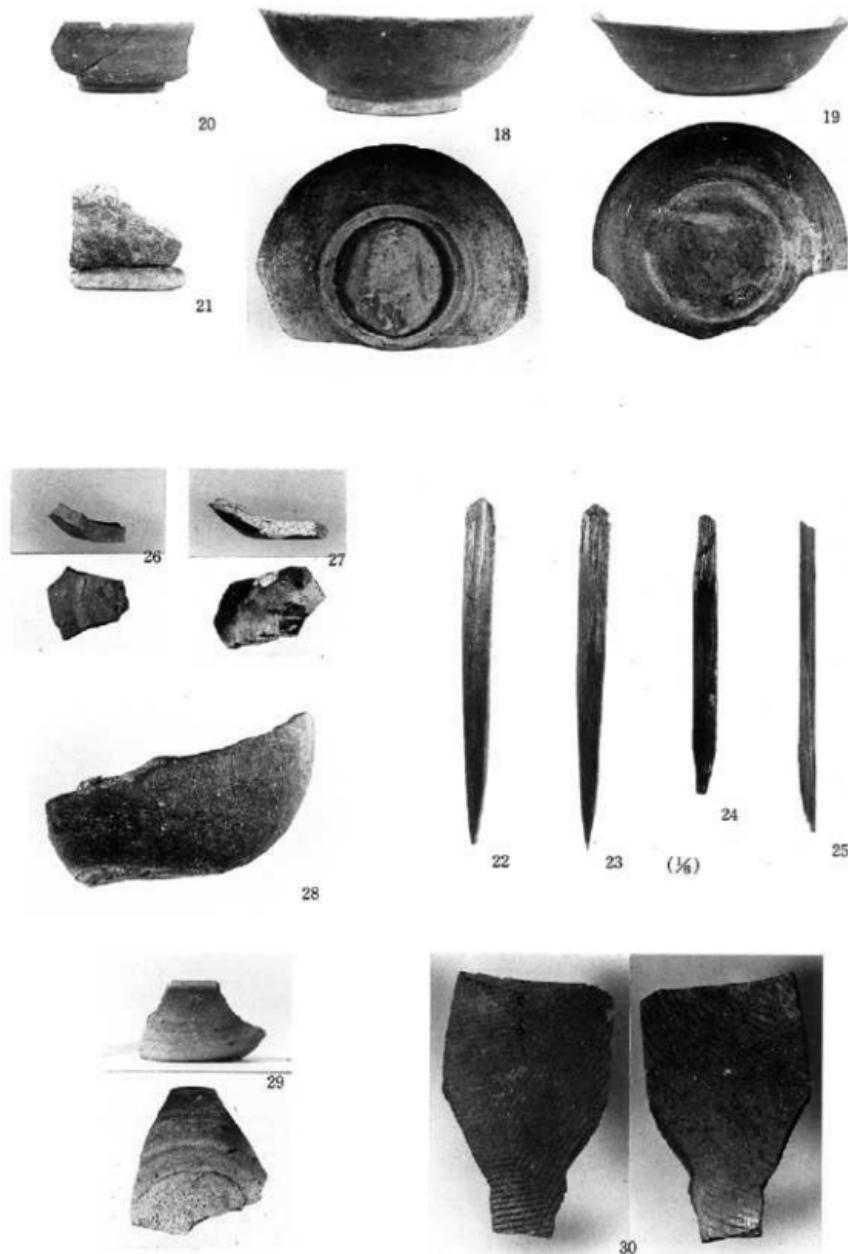


15



16

建物跡(9~15)・井戸跡(16~17)出土土器

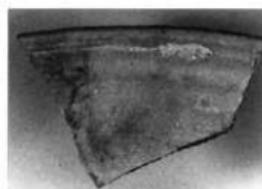




31



32



33



34



35



36



(36)



43



44



45



46

(36)



38



39



40



41



(36)

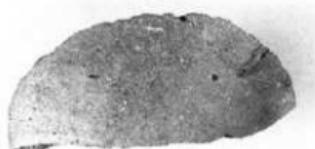


47





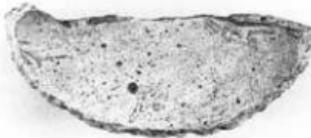
48



49



48



51



50



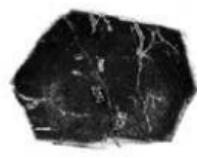
52



54



53



55



56





57



58



59



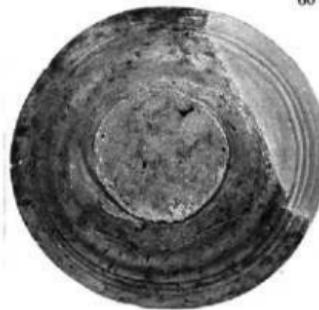
60



61



62



63



66



67



68

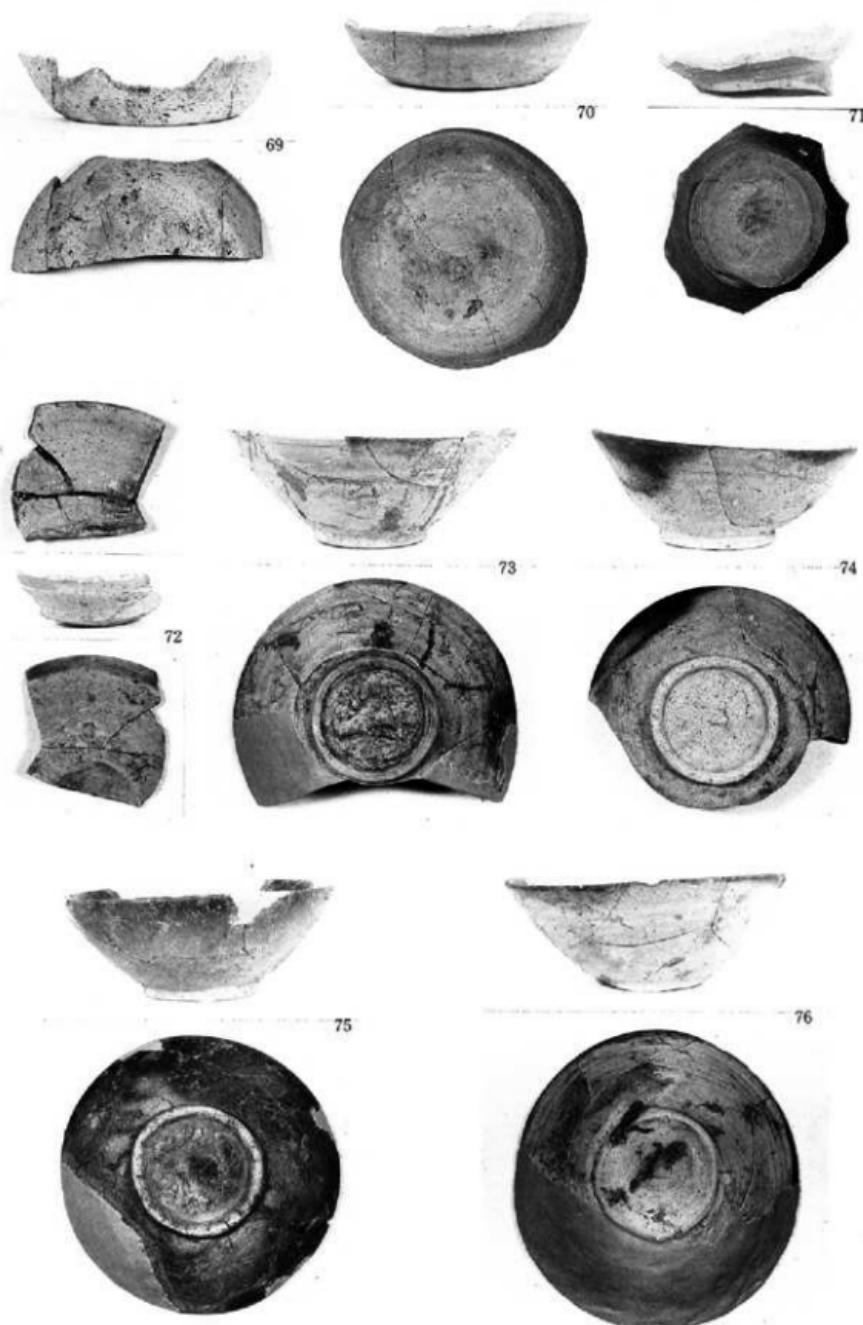


64

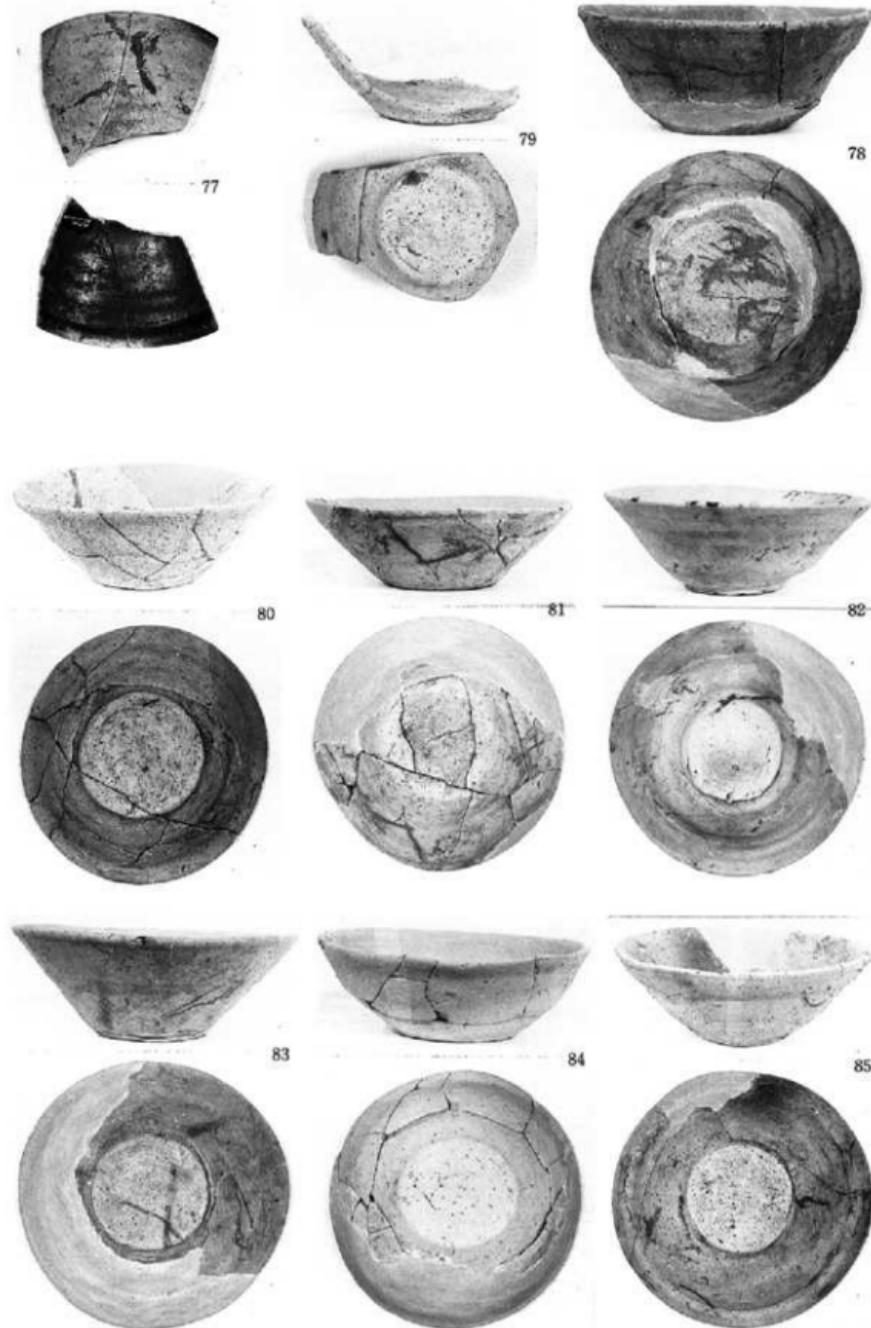


65





井戸跡・土壤出土土器(1)





86



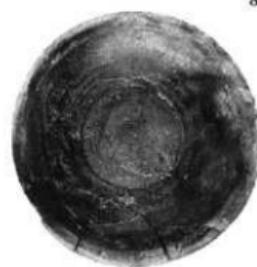
87



88



89



90



91



92



93



94



94

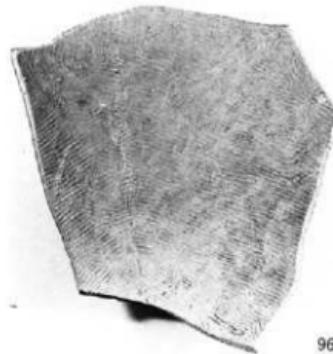




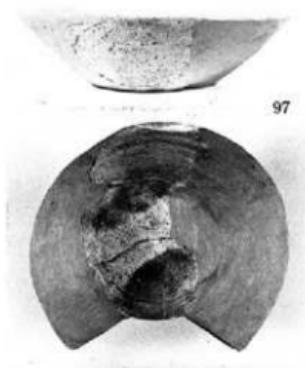
98



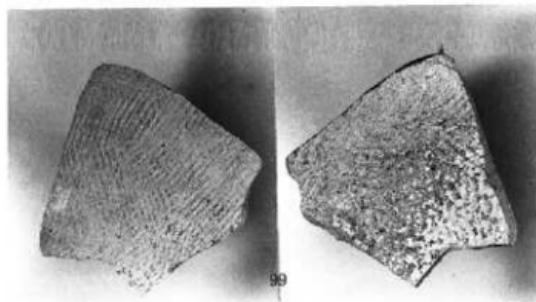
95



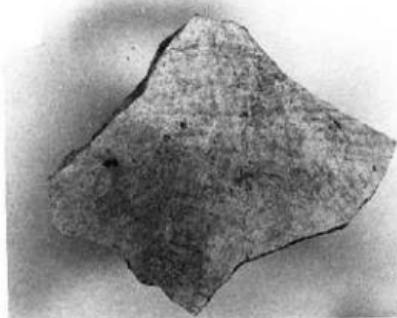
96 (1/6)



97



98 99



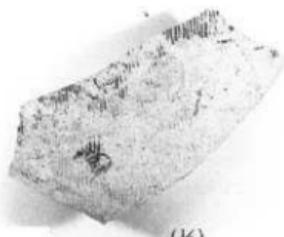
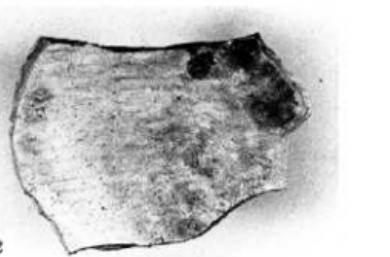
100



101



102

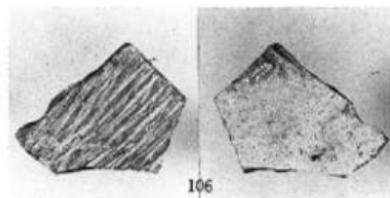


(16)

103



104



106



105





107



108



109



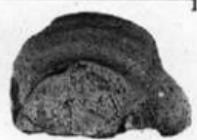
110



111



112



113



114





116



117



118



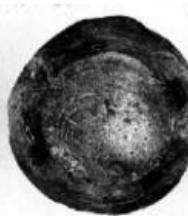
119



120



121



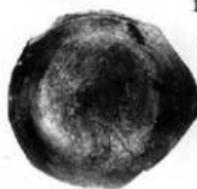
123



124



125





125



126



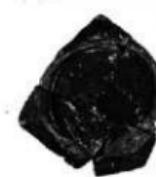
127



128



130



131



129



132



132



134



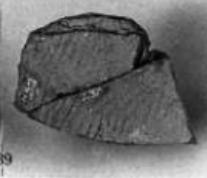
135



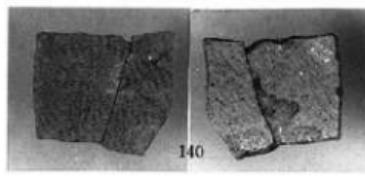
136



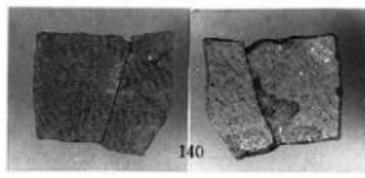
137



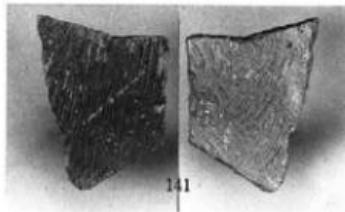
138



139



140



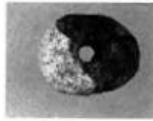
141



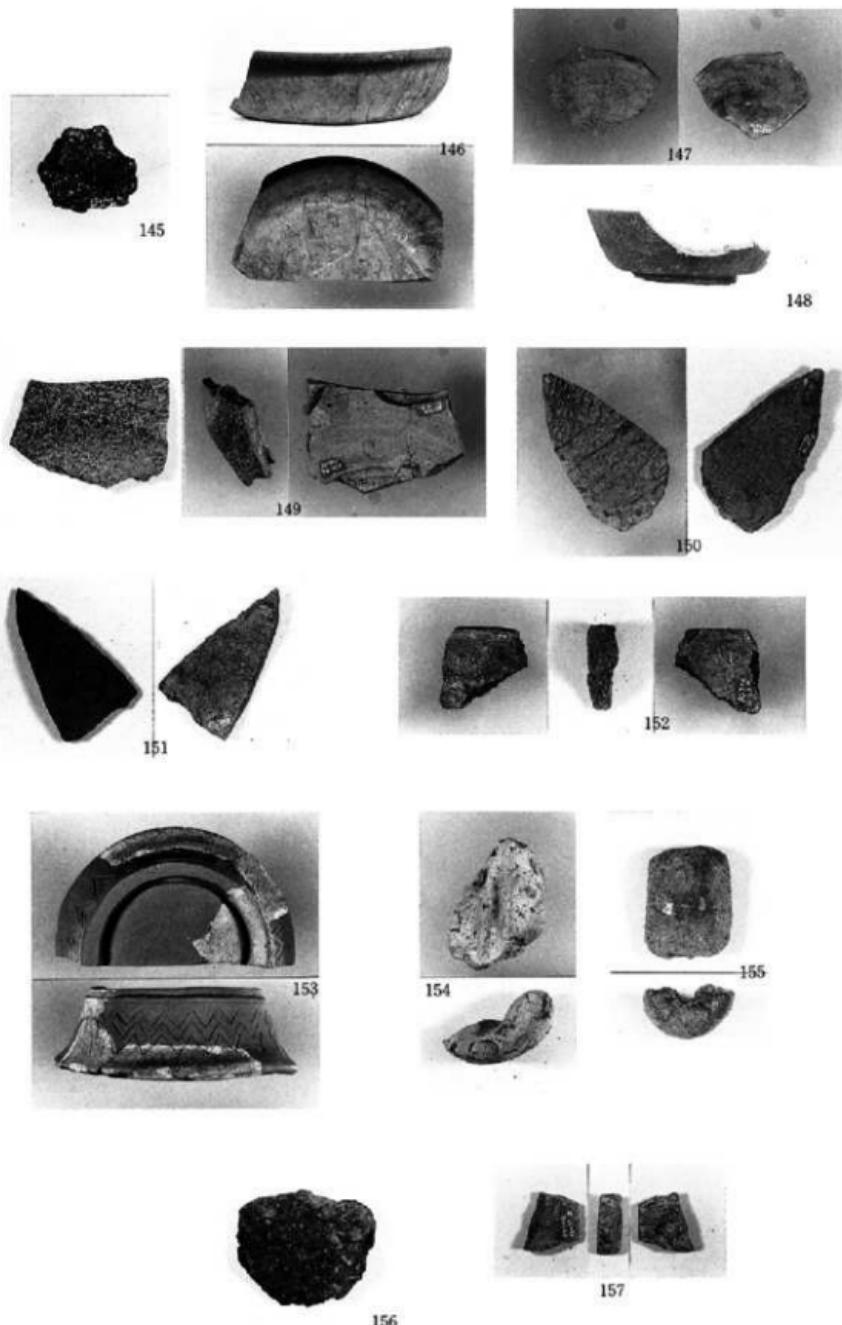
142

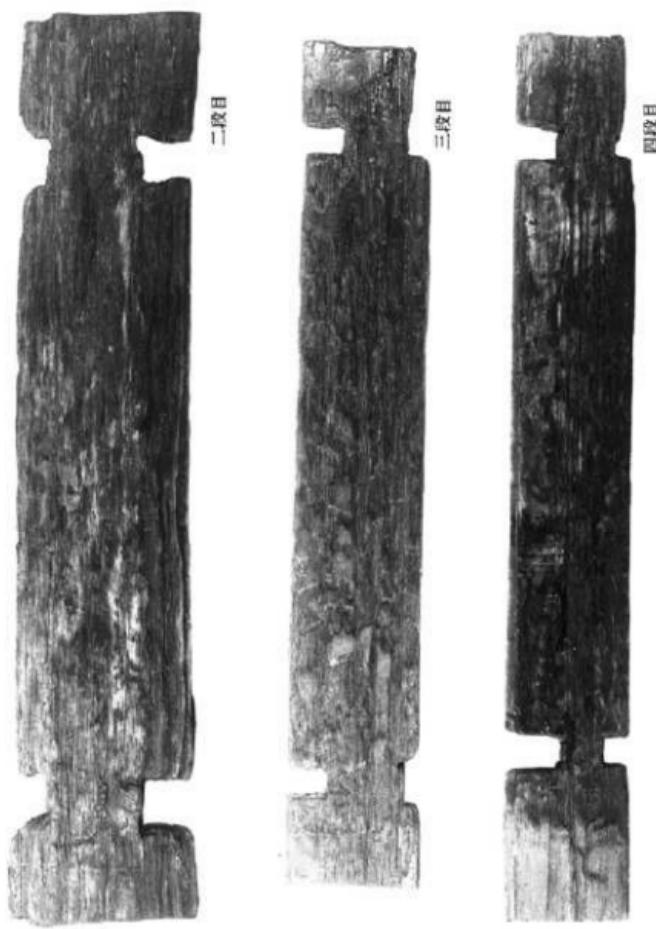


143



144





SE54西面井桁板材 (1/6)



(36)

SE 203井戸枠材外面



SE 203井戸枠材内面



(1/2)

SE 203井戸跡南井側材

SE 203井戸跡水抜き



SE 203井戸跡水抜栓拡大

水抜栓



山形県埋蔵文化財発掘調査報告書 第114集

みなみ こう や
南興野遺跡

発掘調査報告書

昭和62年3月20日 印刷
昭和62年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会
印刷 藤庄印刷株式会社
